A?　　－すべての始まり－

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａ？　－すべての始まり－

【Ｎコード】
Ｎ３４８７Ｎ

【作者名】
海土龍

【あらすじ】
父、とおるが病院に運ばれたことを知ったはるかは、駆けつけた病院で、
とおるの息子だと名乗る見知らぬ少年と出会う。
少年の名前は、かなた。
そして、はるかとかなたは、自分たちが人工的に造られたイキモノだと言うことを知る。

1. はるか

規則的な機械音が絶えず聞こえていた。
辺りは暗い。
いや、実際は暗くなかったかもしれない。私はずっと瞼を固く閉じていた。
そこは暖かく、心地良い。
優しく守られているような匂いに包まれ、常にひどく眠かった。
一日の大半を真っ黒い夢の中で過ごす日々が続く。
何も考えられない。私は全てのことに対して受け身であった。
与えられたモノで生き、与えられた場を与えられたように生きる。

生かされる。
失われていく意識の中で、いつも必死に考えていた。

私は誰？
なぜ生きているの？

私は何？
なぜ存在しているの？

闇に呑まれる。
確かなモノは、目前にしたこの闇とそれに対する恐怖だけ。
この夜が明けるのはいったい、いつなのだろう？

短すぎる昼の明るさに焦がれつつ、意識を手放した。
闇に落ちていく。

▽▲

「……はるか」
名を呼ばれ、跳ねるように上体を起こした。
「おはよーさん」
顔を上げると、呆れ果てた友人の顔と目が合う。
「なかなか起きてくれないんだもの。見捨てようかと思った。ほら、次の授業、教室移動だから」
「え？」
聞き返すと、更に呆れ顔になった。
「先週言っていたでしょ？　次の時間は実験だから化学室に来いって、先生が」
「化学室？　――ってことは、次、化学？　四時間目？」
呆然として机の上に散乱する教科書を見下ろした。全て一時間目のものであった。
「もしかして、ずっと寝てた？」
「うん。爆睡。――何？　具合悪いの？　珍しいよね、はるかが居眠りだなんて」
心配そうにのぞき込んできた彼女に、はるかは頭を振った。
「大丈夫、ちょっと寝不足なだけだから」
「寝不足？　やっぱりテスト前だから？」
夜更かししてまで勉強に励んでいるのかと聞かれて、はるかは曖昧に頷く。
事実、生まれてこの方、テスト勉強などというものは、いっさいしたことがない。
家庭学習なんて必要に迫まれ、仕方なくやるものだと思っている。

だが、眠くなったから寝ていたという極めて単純な理由を今更説明し、訂正するのも面倒なので、適当な返事をしてみせる。
すると、彼女はへえ～と驚きの声を上げた。
「はるかも勉強するのね」
言い方が悪かったと思ったようで、あわてて言い直す。
「だって、はるかって、ガリ勉って感じしないから。天才肌って言うのかしら？　なんか、苦労とか努力とかしなくても何でもできちゃうって感じよ。この間の模試だって、全国トップだったでしょ。しかも、5教科、全て満点！」
「よく覚えてるね」

それは、高校入学直後、学校側から強制的に受けさせられた全国学力模擬試験とかいうものだ。
3ヶ月も前の話で、本人はすっかり忘れていた。自分のことではないようにさえ思える。
そんなはるかなど、お構いなしに彼女は続けた。

「ほんと、やんなっちゃうわ。ただ頭良いってだけじゃないんですもんね。スポーツもオールOKだし、顔も超絶かわいいし。同学年はもちろん、年上にも年下にも、男女問わずモテモテだものね」
「そんなこと……」
困ったように俯き、黙り込んでしまったはるかに彼女は苦笑を漏らした。
「それそれ、それが原因よ！捨てられた猫みたいな顔している。連れ帰って、親に『飼っても良い？』ってお願いしたくなるわ」
「何それ？」
「ほっとけないってこと。かまってあげたくなっちゃうの」

ふ～んと鼻を鳴らせてみせたが、はるかにはどうにも彼女の言葉

が腑に落ちない。
捨てられた猫。
そんな風に自分が見られているだなんて……。

「ほら、早く。授業が始まっちゃう。」
そう言って、彼女は、いつまでも怪訝な顔をしているはるかに代わって、はるかの机の中をのぞき込んだ。
そして、化学の教科書と筆記用具を取り出し、それらを自分の分と合わせて持つと、はるかを促した。

（なるほど……）

彼女に知られないようにそっとため息をつく。
彼女の言葉通り、自分の回りには望んでもいないのにも関わらず、世話を焼いてくれる者がなんて多いのだろう。
（そんなに弱々しく見えるのだろうか？）
はるかは二度目のため息をついた。
その時、頭を殴りつけるような、ものすごい音で校内放送が鳴り響く。

『一年五組、戸田はるかさん。至急、職員室に来てください』

それは担任の声で三度も繰り返された。
「なんだろう？」
小柄なはるかは友人を見上げた。
「生徒会に立候補しろとかでしょ？　でなかったら、雑用よ、きっと！」
「そうかなぁ」
「そうよ！だって、はるか、悪いことした？　してないでしょ？
はるかに何の問題があるって言うの？　……あっ、もしかして、居

眠りのことかしら？　うん、そうだきっと、居眠りよ！」

そうに違いないと断言した彼女に対して、はるかは確かな根拠はなかったが、それは違うと思っていた。

突如として、言い様のない不安に襲われる。それは恐怖に近い。

心臓が飛び出してきそうな勢いで跳ねだす。

目眩。吐き気を催した。

「はるか？　顔色悪いよ。どうする？　私も一緒に行ってあげようか？」

いかにも心配げにのぞき込んできた彼女を振り払って、はるかは職員室に駆け出した。

（この不安は何？）

何度も人とぶつかりそうになりながらも、少しでも早くその不安の正体を知りたくって、急ぎ、駆ける。

この学校の職員室は一階にある。はるかたち一年生の教室は四階だ。

階段をもどかしく思いながらも駆け下りていくにつれて、ふと、このままずっとこの階段が続けばいいのにと思えてきた。

背に闇を感じる。

この闇は恐怖だ。

不安の正体を知ってはいけない。

なぜ知りたいと思ってしまったのだろう？

知ってしまったとたん、闇が私を飲み込むというのに――。

しだいに足が重くなり、ついにはるかは立ち止まった。

もはや、一歩たりとも動けそうにない。

眠りに落ちていく時に似た、意識が遠のく感じがした。

（逃げたい）

放送など聞こえなかったことにしてしまえばいい。何も知らなかったことに。

そう思った時、自分を呼ぶ声がして、思わずそちらに振り向いてしまった。

担任が青い顔をして職員室の扉の前に立ち、はるかを待っていた。

逃げ場を失ったはるかに、背後の闇は容赦なく襲いかかってきた。

▲▽

「父が？」

担任は３０前後の若い女教師だ。

彼女の顔色がはるかに移ったかのように、はるかの顔も青白くなった。

「詳しいことは、まだ分からないそうなんだけど、あなたの家が火事になって……」

彼女との間に壁一枚あるのではないかと疑いたくなるほど、声が聞き取り難い。

火事だの、病院だの、単語だけが耳をかすめる。
「戸田さん！」
大きく肩を揺すられて、はるかはのそのそと担任を見上げた。
「しっかりするのよ。今、タクシーを呼んでもらっているから、急いで病院に行って来なさい」

虚ろな目でゆっくりと頷いたはるかを見、彼女は自分も一緒についていて行くと言ってくれた。
だが、はるかは頭を横に振った。
人が自分をどう思い、どんなに優しく手を差し伸べてこようと、はるか自身は他人の手にはすがりたくないと思っていた。
物心付いた頃からずっと、はるかは父親と二人きりで暮らしてきた。
母親は知らない。
父、とおるはいっさい母親について話さなかった。
はるか自身も特に知りたいとは思わなかったし、何よりも今の暮らしに不満はなかった。

とおるは家から少し離れたところで喫茶店を営業しており、時々店に泊まり込んで帰って来ないような日もあった。
昨夜も帰ってこなかったのだが、そんな日の次の日は、はるかが学校から帰ってくる前に戻ってきていて、少しだけ手の込んだ料理を作りながら、はるかを迎えてくれる。
そう、今日もはるかが家に帰ったら、ジーパンにTシャツというラフな格好で料理をしているはずだったのだ。

はるかはタクシーに乗り込むと、細くきれいな指を組み、額に押しつけた。

とおるとはるかの年の差は十七歳。
親子にしてはあまり離れていない年齢差のため、兄妹に間違えられることが多かった。
そもそもとおるは３２歳だというのに二十歳前としか思えない若々しい肉体を持っていた。
とても十五歳の娘がいるように見えないのだ。
顔の造りはあまり似ていない。
とおるは美形とは言えないまでも、それなりに整った顔をしていた。
肌は日に焼けた健康的な色で、瞳は黒。
癖のない髪もやはり闇のようで、少し長めにしていた。
長身で、やや細身。

そんなとおるに対して、娘のはるかは『お人形みたいにかわいい』と幼い頃から、老若男女問わず言われ続けられるように、とにかくかわいい。
その顔立ちは言うまでもないが、回りの者が思わず抱きしめたくなる要素は１５０？にも満たない身長にあった。
何気ない動作も幼児がやると、とてつもなく可愛らしいものに見える。それと同じ目で見られてしまうのだ。
髪の色は黒。
小学生に見られることが異常に多いので、少しでも高校生っぽく見えるよう、髪を茶色くしたいと言ったところ、とおるの猛反対を受けたのだ。
その代わりと言うのもおかしなものだが、瞳の色は茶色。
――いや、茶色と言うより、金色だ。
少し緑がかった金色。
実は、これは生まれつきで、からかわれたり、首を傾げられたり、不思議な色だと散々言われてきた。

だが、はるか本人はそんなことちっとも気にしていない。
とおるがきれいだと言ってくれたからだ。
こんな風に、容姿の点から見ても二人は親子には到底見えなかった。

2. 見知らぬ少年

タクシーが止まった。　運転手に声をかけられて、はるかは目を開いた。
いつ、その目を閉じたのかさえ覚えていなかった。
タクシーを降り、目の前にそびえ立つ建物を見上げた。
その白さに目眩を感じる。　空はどこまでも青い。
頭を左右に振ると、はるかは病院内に駆け込んだ。
ぐるりとロビーを見回して、受付を見つける。
そこに駆け寄ろうとした時、突然、膝がガクッと折れ、全身がガタガタと震えだした。
咽がひどく渇いていた。

（落ち着いて）
そう自分に言い聞かせ、パンパンと膝を叩いた。
暴れ騒ぐ心臓を押さえつけるように、胸の上に手をやる。
（あそこで、とおるがどこに運ばれたのか聞かなきゃ）
よろよろしながら、一歩ずつ、受付カウンターに歩み寄る。
ふとした瞬間にも、意識を手放してしまいそうだった。　視界がぼやける。
（とおるがもし……。もし、とおるに何かあったら、私は、一人になってしまう）
母親の存在はおろか、親戚の有無さえ聞かされていなかった。
（とおるが、もし、死んでしまったら、私も……。私も、死のう）
再び膝が震える。
おそらく、自分はとおるの亡き後、自ら死のうだなどと思わなくとも、死んでしまうだろう。

一人では生きられないのだから。
気を失わないようにきつく下唇を噛み締め、やっとの思いで受付にたどり着く。
カウンターに両手を着いて身体を支えた。　顔色は、その場にいたどんな患者より悪い。
何事かと見つめてくるいくつもの視線を無視して、はるかは少しかかとを上げ、受付の女性に話しかける。
だが、はるかの口から言葉は出てこなかった。
懸命に口を開いたり閉じたりするが、どうしても声にはならないのだ。
どっと冷や汗がわき出る。
なんとか声を絞り出そうとしていると、突然、はるかの視界が陰った。

「すみません」

聞き覚えのある声が頭上で発せられる。
驚き、見上げると、とおるが、――いや、とおるによく似た顔立ちをした少年が、はるかに覆い被さるような格好をして受付の女性に話しかけていた。

（誰？）

とおるによく似た声。
よく似た顔の造り、背丈も同じくらいだ。
明らかに違うところと言えば、髪の色が金色だというところ。
だが、それもやはり、とおるのように癖がなく、少し長めにしている。
あとは、左耳に銀色に輝くリングのピアスを三つもしていて、他にも胸や腕、足首にまでジャラジャラとアクセサリーを付けている

ところ。
絶対とおるが着ないような、テカテカ光る皮の服。
彼がとおるであるはずがなかった。
彼は、よほどあわてて来たのか、息が乱れていた。つぅーと頬を汗が伝う。

「二時間ほど前に、この病院に運ばれてきた、戸田とおるの……息子なんですが、父は、今、どこに？」
切れ切れに言われた言葉は聞き取りにくいものだった。
だが、『戸田とおる』という単語をはるかが聞き逃すはずがなかった。
びくっと肩を震わせ、再び彼を見上げた。
目が合う。

（あっ）

はるかは彼の瞳の色に気付き、目を大きくする。
（同じ色）
とおるのものよりやや鋭さを持った彼の瞳の色は、はるかのそれと同じ、金色だった。
目が合ったのは、ほんの数秒だった。
彼は、とおるが運ばれたという手術室の場所を教えてもらうと短く礼を言って、すぐさま駆け出してしまった。
だから、彼がはるかの瞳の色に気付いたかどうかは分からない。
（誰なの？　いったい……）
あわてて、はるかも後を追い、駆け出した。
彼の言う『戸田とおる』がはるかの父、とおるであり、彼の行く先がとおるの元だというのなら、
ついて行くしかないと思った。

どこをどう走ってきたのか、分からない。
ただ、ただ、回りの人たちよりも頭半分背の高い彼を夢中で追った。

▲▽

ようやく彼の足はスピードを落とし、そして、止まった。
はるかもそれに習う。
彼は一度も振り返らなかった。おそらく、はるかに気付いていないだろう。
二人のすぐ脇をいったい何人の看護婦たちがあわただしく過ぎていっただろう？
何やら、やたら騒がしい。

（何か、あったんだろうか？）

再びはるかは不安に駆られた。
手術中に灯されるランプはすでに消えており、手術室の扉は大きく開かれていた。
中は薄暗い。

「何かあったんですか？」
とおる似の声に、はっとしてそちらの方を見ると、彼が一人の看護婦を捕まえていた。
「あなたは？」
「戸田とおるの息子です」
その看護婦は、はっとしたような顔をする。
少し待つように言った彼女は一旦その場から離れ、しばらくすると、複雑そうな面持ちをした医者と紺色のスーツを着た男を連れて駆け足で戻ってきた。

「戸田とおるさんのご家族の方ですか？」
中年ぐらいのその医者は半ば確認するような口調で尋ねた。
『もとやま』と書かれたネームプレートが白衣の胸のところについている。

「父は？　父はどこですか？　何があったんですか？」

今にも掴みかかろうとする彼の勢いに、医者は青ざめ、何かを口の中でもごもごと言っているが、それは全く言葉になっていない。
焦れた彼は医者を押し退け、手術室に入ろうとした。
すると、その前をスーツの男が立ち塞がった。
「わたしから説明します」
そう言いながら目の前にかざされた物は、なんと警察手帳だった。
「なんで、警察が……」
見た目で判断すると、二十代後半といったところだ。
だが、この落ち着いた態度からは、ただの下っ端の刑事ではなく、エリートっぽさが滲み出ている。
彼は小杉と名乗った。
「戸田とおるさんの息子さんですね。お名前は？」

「かなたです。戸田かなたと言います」
名乗った彼に頷き、今度はその後ろにいたはるかに目を移した。
「そちらは妹さんですね。お名前は？」
え？っと振り返った彼――かなたは、そこでようやくはるかの存在に気が付くこととなった。
自分と同じ色の瞳がギラギラと自分を見つめている。
唖然とするかなたから目を逸らし、はるかはきっぱり刑事に告げた。

「戸田はるか。戸田とおるの娘です」

はるかの答えにも同じように頷いた刑事は上着から手帳を取り出す。
信じられないモノを見るような目をはるかに向けていたかなたも、小杉が話し始めると、そちらの方に意識を注いだようだ。
はるかももちろん、かなたも、今は互いのことよりも、まず、とおるだった。

「戸田とおるさんは、午前１１時１０分、救急車で運ばれ、緊急で手術を受けられました。出火原因はただ今調査中ですが、大変な火災だったようで、戸田さんは全身にひどい火傷を負われていました」

そこまで聞いて、かなたは怪訝な顔を見せた。
「火傷？　火災って？　父はなぜ……」
「まだ、ご存じないですか？　ご自宅が火事になられたんですよ」
「火事！？　うちが？」
かなたはますます怪訝な顔をする。
「とおるが救急車で運ばれたって連絡を受けた時、俺は家にいたんだぜ。なんでそれで火事なんだよ！」
「火事になったのは、たぶん、私のうちよ」

「あっ」
声を荒げたかなたは、そのはるかの言葉にはっとして口を閉ざした。
「それで、とおるは？　……父は無事なんですか？」
無事なわけがないと心の内では否定しながら、それでも、救いを求めるように、はるかは潤んだ瞳を小杉に向けた。
そして、彼は予想した通りに少し目を伏せて、首を振った。
「11時42分。お亡くなりになられました」

ぐらりと足下が揺れ動いた。
（死んだ。とおるが……死んだ）
さーっと暗幕が引かれたように目の前が真っ暗になり、何も考えられなくなった。
はるかの身体が傾く。
（このまま意識を手放して、永遠に醒めなければいい）
床に叩き付けられる覚悟を持って、意識を手放したはるかだったが、
いつまでたっても予想した衝撃が襲ってこない。
不思議に思い、重たい瞼を無理矢理こじ開けると、とおる似の声がすぐ側で聞こえた。
「おいっ、大丈夫か？　しっかりしろ」
傾いたはるかの身体を支えたのは、かなたの強い腕だったのだ。
「……大丈夫」
大きく息を吐くと、はるかはその腕から離れ、自分の足で身体を支える。

膝が笑う。
ぎゅっと握り締めた手のひらから汗が滲み出てきた。
「それで父は、今、どこに？」
さっきまでのざわめきがいつの間にが治まり、かなたの声だけが静かに響いた。
だが、その問いに答える者はなかった。
思えば、今まで二人がいくらとおるの居場所を尋ねても正しく答えてくれた者はなかった。
「どこだよっ。言えよ！どこにいんだよ！とおるはどこかって聞いてんだよっ！」
ギラギラした鋭い瞳に睨まれて、ついに小杉が口を開いた。
「手術後、個室に運ばれたそうです。あの角を曲がって、二つ目の部屋です」
そうと聞いたとたん、かなたは彼を押し退け、その部屋に足を進めようとした。
だが、その背中に向けて小杉は続ける。

「ですが、ご遺体は……」
小杉が息を呑む音がやたら大きく響いた。
「戸田とおるさんのご遺体は、何者かに運び出されたようで、あの部屋にはないのです」
「ない？」
かなたは振り返り、小杉を睨み付けた。
「どういうことだ？」
「何者の仕業か、何の目的で、どのように運び出したのか、それら全て調査中です」
落ち着いた口調を乱さず放たれた小杉の言葉と、それに対するかなたの怒鳴り声を耳に響かせながら、はるかは意識を手放した。
もはや限界だった。

糸が切れた操り人形がごとく、その場に崩れるように倒れたはるかを支えるものは、今度こそ、何もなかった。

3．とおるの死

「やめておけ。これ以上荷物を増やすな」

規則正しい機械音の他に、音を耳にしたのは、これが初めてだった。

「おい、A？！聞いているのか？」

「だけど……。この子も、俺の子なんだろ？　おいてはいけない！」

プッ。

突然、機械音がやんだ。

代わって、勢いよく水が零れる音がして、それも止むと、何か重いモノが開く音がした。

急に肌寒くなる。

「一緒に行こう。大丈夫、俺が君を守るから」

肌に何かが触れる。

暖かい。とても安心する。　何だろう？

いったい何に、自分は包まれているのだろう？

知りたいという想いに、私は初めて目を開いた。

▲▽

見覚えのない天井。

（ここは？）

片手をついて、ゆっくりと起きあがった。

頭がひどく重い。ズキズキと痛むのだ。

はるかはこめかみを押さえながら、辺りを見回した。

窓からオレンジ色の光が注がれ、全ての物が長く影を帯びていた。

飾りっけのないその部屋は、しーんと静まりかえっていて、まるで、社会から外されてしまった空間のようだ。

ベッドに腰掛けたまま、どのくらいの時間をぼんやりとしていただろうか。

実際の時間としては、感じたほどに長くなかったのかもしれない。

だが、この部屋は時間感覚さえ狂わせる異様な空間だった。

はるかは、何千年も前からそこに根を張り巡らせている大木になったような気になる。

それは、まったく、不思議な感覚だった。

しばらくして、カラカラと軽い音をたててドアが開かれた。

そちらの方に目をやると、無表情な顔が入ってきた。

「気が付いたのか」
とおるによく似た声が発せられる。
こんなにもとおるに似ておいて、どうしてとおる本人ではないのだろう。
はるかはかなたから顔を逸らし、手元を見つめた。
気配で、彼が自分に近付いてくるのが分かる。

（来ないで）

とおる亡き今、彼の偽物ははるかの悲しみをより深いものにする。
力の限り握り締めた拳が小刻みに震える。爪が食い込み、薄く血が滲んだ。
（なんで！とおる、なんで！――死にたい。死んでしまいたい。とおるのいない世界で一人、生きていくなんてできない！）
ポタポタと手の甲に雫が落ちるのを、はるかはぼやけた視界で確認し、ぎゅっと目を固く閉じた。
すると、
「……はるかって、言ったけ？　お前」
と、声は思いの外、すぐ近くで聞こえてきた。
おそらくかなたは手を伸ばせば届いてしまうくらいの距離にいるのだろう。
だが、その問いにはるかは頷くどころか、身動き一つ、反応を返さない。
それでもかまわず、かなたは続ける。
「お前は本当にとおるが好きだったんだな。俺は、……嫌いだった」
ごくりと、咽が鳴る音が聞こえた。
「たぶん、憎んでいた」

その思いがけない告白に、はるかは顔を上げ、かなたを見つめた。
かなたもはるかを見つめ返す。

「お前、母親は？　いるのか？」
はるかは無言で首を横に振った。
「俺もだ。物心ついた時から、ずっと、とおると二人きりだった。
――いや、違う。俺はずっと、一人だった。とおるはほとんど家に帰ってこなかったから……」
今度はかなたが俯く番だった。
「中学生になったあたりからは、とおるが何日家に帰ってこなくとも平気になったし。逆にいないでいてくれた方がせいせいするくらいで、何とも思わなくなったけど。だけど、ガキの時は、やっぱしな、それなりに、なっ。――でも、ようやく分かった。とおるの奴、俺の家に帰らない日は、お前の家に帰っていたんだな」

はるかは再び泣きたくなった。
自分がとおるに当然のように甘えている間、この少年は一人で寂しい思いをしていたのだ。

「私たちは兄妹なの？」
「たぶんな」
「じゃあ、どうして別々に育てられたの？」
「知らない」

涙が零れた。　おそらくこれは、彼のための涙だ。
彼はとおるを憎んでいると言ったが、それはたぶん半分が真実で、半分は偽りだ。
憎んでいる者のために、血相を変えて病院に駆けつけてくる人はいないだろうし、彼の言う憎しみはとおるへの不満が根本にある。
いつも一緒にいて欲しい。傍にいて欲しい。

話したいことがたくさんある。聞きたいこともたくさんある。
なのに、なぜ？
どうして、ここに、自分の傍にいてくれないんだ？
そんな不満が憎しみに変わってしまっただけ。
彼は泣きたいのだ。はるかのように、泣いて、泣いて、泣き叫びたいのだ。
だが、彼にはそれができない。

「昨日、久しぶりに帰ってきたんだ、とおるの奴……」
かなたはベッドの足の方に腰掛けて、ぽつりと話し出した。
「俺が大学さぼっているの、バレて、大喧嘩になったんだ。まあ、喧嘩は毎度のことだけど。死ね！って言ったんだ。俺、あいつに。死ね！死んじまえ！とっととくたばりやがれ！って何度も言ったんだ」

かなたは自分の手元をじっと見つめた。
その手で拳を作って、きつく目を閉じ、自分の膝に力一杯叩きつけた。

「そん時、マジで、俺、死ねとか思ったんだ」

泣けない彼のためにはるかは頬をぬらし、慰めるように彼を抱きしめた。
彼もはるかを抱きしめ返し、その頬をやさしく拭う。

4．兄と妹

「お前、歳は？」
頭上で聞こえた問いに、はるかは十五歳と短く答えた。
「中学生？　高校生？」
「高校１年」
「そうか」

はるかはかなたの腕を押しやって、身体を起こした。
ゆっくりと顔を上げ、かなたを見つめる。

「あなたは？」
「ん？」
「年？」
かなたは、ああっと頷いて、その表情をふっと和らげた。
「もうすぐ、二十歳だ」
「もうすぐって？　いつ？」
「八月十五日」
「八月十五日？　ナポレオンの誕生日と一緒だ！」

日付を聞いて、間をあけずに叫んだはるかを、かなたは驚いて見つめる。
思わず叫んでしまったのが、急に恥ずかしくなり、はるかは赤面して俯いた。
ぷっ。息が漏れる音がした。
「おい、こら。ナポレオンが好きなのは分かるけど、日本人なら、

まず、終戦記念日って言えよ」
コツンと頭を軽く叩かれて、はるかは顔を上げた。笑っていた。
初めて見るかなたの笑顔に、はるかはほっとした。
だが、わざと怒ったような顔をつくり、
「あら、髪を金色に染めている人に日本人を語ってもらいたくないわ」
と、そっぽを向く。すると、
「染めてない。これ、地毛」
という驚くべき答えが即、返された。
「ほら、よく見てみろよ」
驚いて振り返ったはるかに、かなたは頭を少し下げた。
言われるままにそこに目をやると、はるかは更に驚きの声を上げることとなった。
「どうやって染めたの？　これ！」

遠目では、渋めの金髪にしか見えなかったのだが、じっくり近くで見てみると、白いものや焦げ茶色のもの、赤茶、黄色、そして金色の毛が混ざり合って生えている。

「信じられない」

猫や犬、動物の毛がこのような生え方をしているのは知っていた。
茶色い毛をした犬は、ただ茶色一色の毛を生やしているのではない。
その犬を撫でているうちに、内側に白い毛が生えていることに気付くだろうし、よくよく見ているうちに、ただ茶色だと思っていた毛は、実はオレンジや黄色、焦げ茶色の毛が混ざり合って、茶色に見えていたのだと知ることができる。
まさにかなたの髪の色もソレと同じだったのだ。

「目の色も普通じゃないだろ？　俺も、お前も」
はるかが納得したと見て、顔を上げたかなたの瞳に胸を貫かれたような気がして、はるかはあわてて目を伏せた。
「あっ！もしかして、私たちのお母さん、日本人じゃなかったのかも！」
自分でもびっくりするほどの大声が口から飛び出した。
「フランス人か、イギリス人で、きっと金髪だったのよ。目も金色で……」
次から次と語られる母親の予想像は、明らか沈黙を怖がっていた。
闇とは違う、別の何かに呑み込まれてしまう気がする。
それから逃れるために、はるかはしゃべり続けた。

（会話が途切れたら、呑まれてしまう）

恐怖と言うより、それは不安だった。
ソレに飲み込まれてしまったら、どうなってしまうのか分からない。
ただ、自分が自分ではなくなってしまうのだという気がする。
それは、とても恐ろしいことだ。
はるかが必死でしゃべり続けている間、かなたはじっと静かにはるかだけを見つめていた。
その視線に息苦しさを覚え、はるかは言葉を止める。
ついに目が合ってしまった。

（あっ）

それは、何かに捕らえられたとか、呑み込まれたというより、胸の奥底で何かが弾けたような不思議な感覚だった。
恐ろしいということもない。むしろすっきりとした感じである。

「もう大丈夫そうだな」
先に目を逸らしたのはかなたの方だった。
すくっと立ち上がると、はるかを促す。
「帰ろう」
そう言ってから、はたと考えて、
「帰ろうって言っても、お前の家、焼けちまったんだっけ。全焼らしいぜ」
どうする？と、かなたははるかを見下ろした。
「俺んち来るか？」
来るか？と軽く言われても、今日知り合ったばかりの少年の家だ。
例え本当に兄妹だとしても、十何年も存在さえ知らなかった相手を急に兄だとは思えない。
はるかは首を振った。
「とおるの店に行く。しばらくはそこで……」
とおるが営業していた喫茶店は、その二階に寝泊まりできる部屋を持っていた。
事実、今日まで、とおるは、家に帰らない日はそこに泊まっているのだと思い込んでいたのだ。
「そうか、わかった。じゃあ、送るよ」
「えっ、でも」
遠慮するはるかにかなたはバイクキーをちらつかせながら苦笑する。
「送らせるくらいさせろよ。お前、俺の妹なんだから。今まで離れていた分、甘えさせてやる」

彼はまるで、はるかにとってのとおるの身代わりになろうとしているようだった。

とおるがよくそうしていたように、はるかの肩を抱いて歩き出す。

とおるの代わりにはるかを守ろうとしている。

（とおるの代わりにこの人に守られれば、私は生きていけるのだろうか？）

はるかは真っ直ぐ正面だけを見据えるかなたの横顔を見上げた。

静まりかえった病院内に二人の足音だけが響いた。

5．黒いバイク

病院の正面玄関を通ろうとした時だった。
呼び止められ振り返ると、先程の刑事が二人を追いかけてきていた。

「何か？」
かなたの小杉への態度は冷たい。突き放すように短く言った。
「もうお帰りですか？　もし、妹さんのお体の具合がよろしければ、もう少しお話を伺いたいのですが」
「話って？」
火事で取り調べを受けるなどという話を聞いた事がない。
かなたは疑わしげな目を彼に向けた。すると、彼は慌てたように言葉を付け加える。
「放火の疑いがあるのです」
「放火？　誰かが家に火をつけたってことですか？」
一瞬かなたは狼狽える。
「まだ、はっきりとは分かりませんが。戸田とおるさんの交友関係など、お聞きしたい事がありますので、お手数ですが、署までご同行願います」

強い口調で言い放たれた言葉につられ、かなたは頷きかけた。
――いや、頷いていたかも知れない。もし、彼が、その場に一人であったら。
上着の裾をついっと引かれて振り向くと、はるかが黒髪をわずかに左右に揺らした。
その意を汲み、かなたは小杉に軽く頭を下げた。

「すみません。まだ、妹の体調が思わしくないので」
「そうですか。では、後日にいたしましょう。連絡先を教えてください」
「俺のケイタイ番号でいいでしょうか？」
「いえ、ご自宅の電話番号をお願いします。それと、ご住所も」
かたなが言い放った十桁の数字の羅列と住所を小杉は素早く手帳に書き記すと、ふと、はるかに目を向ける。
「妹さんはどうなさるのですか？　確か、火事に遭われたのは妹さんの方の家でしたよね？」

小杉ははるかが気を失っている間に、かなたから彼が分かる範囲の話を聞いたようだった。
それはつまり、二人が兄弟であること。だが、同じ家で暮らしていないこと。
また、今日初めて出会うまで、互いの存在を知らなかったこと。
母親はいない。どこの誰とも分からなければ、その生死すら知らない。
父親は二つの家を行き来しており、そのちょうど間に位置する所に店を持ち、喫茶店を開いていたこと等である。
かなたの陰に隠れるようにして黙っているはるかに代わり、かなたが答えた。

「妹は、今日のところは父の店に泊まらせます。少し落ち着いたら、俺の家で一緒に暮らすつもりです。うちには親戚といった類の者がいっさいいませんので」
「そうですか。では、念のため、お店の方の電話番号とご住所もお教え下さい」
かなたは頷くと、十桁の数字と住所を小杉に教える。
その間、はるかは先程かなたが口にした言葉を心の内で反芻していた。

（一緒に暮らす？　かなたと？）
それが彼の本気の言葉だとはどうしても思えなかった。
（だって……。そりゃあ、兄妹なんだろうけど。でも……）
かなたと暮らす自分の姿がどうしても想像できなかった。
とおるを失って、一人で生きていく自信は、はるかにはない。
死のうとさえ思っていたほどだ。
はるかはまだ十五歳で、未成年なのだから、親戚がいればその者に引き取られることとなる。
だが、あいにく、そのような親戚はいない。
天涯孤独になってしまったところに、ポンッと現れた実の兄。血のつながった肉親なのだ。
ならば、その兄と暮らすのが当然なのかもしれない。だが――。

（お兄さんだなんて、思えない）

おそらく、かなたは少し落ち着いたらと言っていたが、それは時間をかけてお互いのことを知っていけば、本当の兄妹のようになれると思っての発言だったのだろう。
互いに兄妹と認識すれば、一緒に暮らすことにも抵抗がなくなるはずだと。
だが、はるかは、かなたを兄だと思えるようになる日など、この先いくら待っても訪れないだろうと確信している。

（たぶん、一生。絶対に、私はあなたを兄だとは思えないわ）

はるかは見上げるようにして、かなたの黄金色の瞳を盗み見た。

▲▽

小杉と別れて、駐車場に向かう。

「まさかとは思うけど、免許取りたてとかじゃないよね？」

「取ったのは一年前。けど、十三の時から乗り回していたから、安心して乗れ」

不審そうに見上げてくるはるかに、かなたは鼻で軽く笑った。

「車は？」

「免許？　持ってるよ。けど、車がない。うちのアパートには駐車場もないし」

「アパートに住んでるの？」

「そう。お前んちは何？　マンション？」

「一戸建て」

はあ？とかなたは立ち止まって、はるかを振り返った。

はるかも足を止める。

「一戸建て？」

「うん」

「広い？」

「うーん、普通かな？　二人で暮らす分にはちょっと広いかなってくらい」

眉を歪ませて、かなたはポケットの内でバイクキーをジャラジャラ鳴らす。

そして、再び歩き出した。

「とおるって、もしかして、お前に激甘？」

「なんで？」

確かに、はるかはとおるにひどく怒られた覚えがない。

だが、家の話をしていたはずが、なぜ突然、甘いだのの話になるのだろうか？

首を傾げて、かなたの後を追う。

かなたが一台のバイクの前で足を止めた。どうやらこれが彼のバイクらしい。

主だった色合いは黒で、部分的に銀色が入っている。

「なんで、とおるが私に甘いって思うの？」

やはり黒いヘルメットを手渡される。

「なんでって……。お前、不自由したことがないだろう？」

「不自由？」

「言っておくけど、羨ましいって言っているわけじゃないからな」

「う、うん……？」

かなたは自分用のヘルメットを被ると、はるかを見下ろす。

「二人の子どもがいて、別々に育てている。片方は二部屋しかないアパートで、もう一人は一戸建て。しかも、片方の家には一ヶ月に一度顔を見せればいい方で、もう一人とは一緒に暮らしている。――って、どう考えても、とおるはお前の方がかわいいんだろ？」

かなたははるかに、バイクの後ろに座るように言う。

「そりゃあ、父親が、息子より娘の方をかわいがるのは普通かもし

れねぇけど。俺とお前じゃあ、差がありすぎなんじゃね？　俺、とおるに何かしてもらったり、買ってもらったりされたことないし」
これも自分がバイトでためた金で買ったのだと、かなたはバイクを叩いた。
「学費とか生活費の一部は出してくれるけどさ。それだけじゃ、たんねーの。――まあ、喫茶店の儲けじゃあ、そんなもんかなって思ってたんだけど。そーか、意外なところに金を使ってたわけだ」
彼は肩をすくめて見せた。
そして、はるかをバイクに乗せ、落ち着いたと見て、自分も跨る。

6．見えない影

しっかり捕まってろよ、と言うと、彼ははるかの手を取って、自分の腰を掴ませる。

「でも、そうだよね。喫茶店って、そんなに儲かるものじゃないよね。特にとおるのお店は。お客さんが一杯になっているところなんて見たことないもの」

そういえば、おかしな話だ。

半ば趣味のようにやっている喫茶店で、一戸建ての家が買えるほどの金が手に入るものだろうか？

まして、二人の子どもを別々に育てるほどの収入が得られるのだろうか？

（とおる、喫茶店の他にも何かやっていたのかな？）

――だが、そのような気配など全く感じられなかった。

「とおるって、なんで私たちを別々に育てようと思ったのかな？」

「さあ」

「私たちの知らないとおるのこと、まだ、あるのかな？」

今まで、自分の世界には二人の存在しかなかった。

自分ととおるだけ。

とおるだけを信じて、とおるが全てだった。

自分はとおるに秘密なんてなかったし、『戸田はるか』という人間は『戸田とおる』という人間の存在だけで、全てが言い尽くせてしまっていた。

とおるが知っている自分が、本当の自分と一寸の狂いもなく合わさっていたのだ。
それなのに、とおるの方は……。

（私、とおるのこと、全然分かってなかった）
とおるは自分に一部分の顔しか見せてなかったのだから。
（なんで、お兄さんがいるって教えてくれなかったの？　お母さんのことだって！）
そんな恨み言を口にしたくとも、もはや、その相手がいない。
遺体すらないのだ。
はるかの胸に重たい霧がかかる。
どんよりとしたそれは、背後に迫る闇へとはるかを導いているかのようだった。
バイクが駆け出した。まさに、その闇から逃げるように。

▲▽

幾つ目かの信号待ちの時だった。
バックミラーに映る車にはるかは疑問を持った。

（さっきの信号待ちの時もいた車だ）
これといって特徴のない灰色の車だが、なぜか、はるかに強い印象を持たせる。
どうしたわけか、目がその車を追ってしまうのだ。
（さっきの信号待ちだけじゃない。その前もだ）
もしかして、つけられている？
そう思うが、つけられなければならない理由など、自分たちにはない。
（気のせいだよね……）

はるかはかなたの腰に回した腕の力を強めた。
すると、その腕の上にかなたの手が被さった。
ポンポンと軽く叩かれて、はるかは彼の横顔を見上げる。
「そのまましっかり捕まってろよ」
なんだろう？と思っていると、信号が赤から青に変わり、バイクが走り出した。

（！）

その異常なスピードに、はるかは思わず目を閉じた。
後ろに投げ飛ばされそうになるのを必死でかなたに抱き付き、耐えた。
それまでのスピードもけしてゆっくりだったとは言えないが、それでも、初めて乗るはるかを気遣うように、バイクにしてはトロトロと走っていた。
それが、このスピード。
いったい、突然、どうしたのだろう？
バイクは大通りから細道に入り、住宅街を必要以上にあっちこっちと左右に曲がる。
道とは言えないような場所も信じられないスピードで駆け抜け、

同じ道も何度か通った。

ようやく、バイクが止まったのは、病院を出て2時間以上たったころだった。

とおるの喫茶店と病院との距離は、歩いてだって一時間かからないほどの距離だというのに、いったいこれはどうしたわけか。

はるかはバイクから飛び降りると、上目遣いでかなたを見た。

かなたは得意げな笑顔を見せる。

「うまく撒けたな」

「え？」

「つけられてただろ？」

驚き見上げてくるはるかにかなたは軽く笑った。

「お前が先に気付いて教えてくれたじゃないか」

「私、教えた？」

「ああ、灰色の車がずっと後をついてきているって。言っただろ？」

「言ってない」

そう思ったことは確かだけど、口に出してはいない。

否定するはるかに、かなたは特に気にする様子もなく、はるかの手からヘルメットを受け取り、

「バイク、止めてくるから、先に中入ってな。」

と言って、店の裏路地に行こうとする。

だが、その時ふいに、かなたの携帯電話が鳴り、彼の足を止めた。

無造作にズボンのポケットに突っ込まれたそれを引っ張り出して、耳元に当てる。

「何？」

店の中に入りかけたはるかだったが、その彼の疑問の声に、足を止めた。

振り返ると、携帯電話を耳に押し当てた状態のまま、空を仰ぐ彼の姿があった。

「ああ、わりー。また今度な。ん？　……マジで？　……ああ、分かった。サンキュ。……ああ、じゃあな」

短い別れの言葉を言い放つと、彼は携帯電話を耳から離し、再びズボンのポケットに突っ込んだ。

「誰？」

扉から体半分だけ出して、はるかはかなたを見上げる。

「彼女？」

「ん？」

「彼女、いるんでしょ？」

「いると思う？」

「デートの約束でもしてたの？」

「気になる？」

「将来、お姉さんになるかも知れない人だからねっ」

一向に答えをくれないかなたに、はるかは苛立って答えた。

すると、彼は耐えられないとばかりに笑った。

「なんで笑うのよ。事実いるんでしょ！じゃなきゃ、予備のヘルメットを用意してあるはずがないんだから。あれ、彼女を乗せるときのための物なんでしょ？」

とおると同じ顔をしたかなたが、自分の知らない女性と肩を並べていると想像するだけで、何やらぞっとした。
胸がムカムカする。
とおると同じ声で、彼女の名前を呼ぶのだろうか？
甘く、優しく……。
その手で触れるの？
その腕で抱き締めるの？

（なんだか……）

想像するだけで、目眩がするほど苛立つ。
そんな風に、見もしない女性に対して苛立つ自分に対しても、救いようにないほど、腹が立っていた。

「二十歳だもんね。彼女の一人や二人いるわよね。そりゃーね。大いにモテてくれた方が、妹としては鼻が高いわ」
「一人や二人、三人どころじゃないから、お前の鼻は高々だな」
「どういうこと？」

眉をつり上げたはるかに、かなたは軽く片手を上げて、バイクを引きながら店の裏路地に姿を消してしまった。

7．兄妹の距離

カラン、と、扉の上に取り付けられている小さな鐘が軽い声を上げた。
扉は見た目より重みがあり、はるかは両手でそれを押し開ける。
店に足を踏み入れたはるかに、『いらっしゃい』の言葉をかける者はない。
がらんとした店内。
はるかは胸をきつく締め付けられる想いに襲われた。
客がいないのはいつものことだったが、カウンターで見つけることのできないとおるの姿に涙が出てきそうだった。
熱を帯びた瞳に堪えるため瞼を閉じると、すぐ側にとおるの気配を感じる。
店の扉を開けると、似合わないエプロン姿のとおるがくるりと振り返った。

「いらっしゃい。――って、なんだ、はるかか」
「なんだって何？　私、お客さんなんだからね」
「客？　ちゃんと金払ってくれるのか？」
「もちろん。私のお父さんがね」
「おい……」

仕方ない奴だと言って苦笑するとおる。
（なんだ。とおる、そこにいたのね）
微笑み返して、はるかはとおるに駆け寄った。
（死んだなんて、やっぱり嘘だったんだね。どうしてそんな質の悪い冗談を言うの？　ひどいじゃない）
上目遣いに彼を睨むと、その広い胸に抱き付こうと腕を伸ばした。

カラン。

軽い音に、はっとする。

見開いた目に映る現実は、静まりかえった暗い空間だった。

「はるか？」

入り口で立ち尽くしていた少女の名を、訝しげにかなたが呼んだ。

「泣いているのか？」

「違っ」

「泣いていい」

そう言うと、かなたははるかをそっと抱き寄せた。何度も髪を梳く。

とおるほどがっちりしていないかなたの胸だが、はるかを安心させるには十分だった。

そこに頬を擦り寄せると、彼の心臓の音が聞こえてくるのだ。

「泣かない。私、とおるはどこかで生きている気がするもの。だって、私、とおるの死体、見てないもん。ちゃんと見て、心臓の音聞いて……それが聞こえないって分かってから、とおるが死んだって認める。けど、それまでは認めない。絶対！だから、今、泣いたらダメなの。泣いたら、認めるってことでしょ？」

「死んでない？　とおるが……？」

はるかの突拍子もない言葉にかなたは一瞬返すべき言葉を失う。

だが、すぐに大きく頷く。何度も。

「ああ、死んでない。とおるは死んでない」

「うん」

かなたの胸に両手をついて身体を離す、はるかは彼から数歩の距

離を取った。
「咽乾いちゃった。何か入れるね。何がいい？　コーヒー？　紅茶？」
「コーヒー。砂糖は入れるなよ」
「わかった」

かなたのオーダーにクスっと笑うと、はるかはカウンターに入る。
とおるの手伝いをしていたはるかにとってそこは、勝手知ったる何とやらで、どこに何があるかなど、分からないようなことはない。
とおるよりよほど器用に豆を引くと、沸騰する直前で火から上げた湯をそこに流し込む。
はるかの入れたものの方がおいしいと、数少ない常連客は口をそろえるが、それは全くの事実だった。
今更思うことが、喫茶店業がとおるに合っていたとは思えない。
客のいない店内をカウンターから頬杖を付いてぼーっと眺めていたとおるの姿が、はるかの脳裏に浮かぶ。

（なんで、とおる、喫茶店なんかやっていたんだろう？）

首を傾げながら、湯気の立つコーヒーをカウンター席に着いたかなたの前に差し出す。
自分の分のコーヒーを片手に、カウンターの奥に放置されている椅子を引きずってくると、カウンターを挟んでかなたと向き合う形に腰を下ろした。

「おいしい？」
はるかはスプーン二杯分の砂糖を入れてゆっくりかき混ぜながら、すでにコーヒーを啜っているかなたに上目遣いで尋ねた。
「ああ、上出来」
その回答に満足して自分もコーヒーを啜る。

ほっとした暖かい空気が二人の間に流れた。

病院から呼び出され、駆けつけて、兄妹の存在を知り、とおるの死を伝えられ、更にその死体が盗まれたことを聞かされる。
放火かもしれないと言われ、何者かに後を付けられた。
いろんなことが突然起こり、一つの事を理解するより先に次々と起こったのだ。
はるかも、かなたさえ疲労を覚えていた。
一度腰を下ろし、その疲労を自覚してしまうと、もう二度と立ち上がれないのではないかと思ってしまう。
だが、そうそう休んでいられないことを二人は十分に知っていた。

「さっきの電話のことだけど……」
「彼女からの？」
かなたが放った言葉に、不機嫌そうにはるかは聞き返した。
「そいつの話だと、俺のアパートの回りを怪しい奴らがうろついているらしい」
「怪しいって？」
「さっき俺らをつけ回した奴らと関係があるかもな」
「じゃあ、かなた狙いだったんじゃない？　いったい何したの？」
「さあ。……まあ、いろいろ」

誤魔化すように笑ったかなたに、これ以上問いただすこともできず、はるかはふーんと鼻を鳴らした。
途切れてしまった会話に息苦しいものを感じ、はるかは自分の口に吸い込まれていくコーヒーの黒い液を不思議なものを見るかのように、じっと見入った。
生温くなってしまった黒い湖は、次第にその水量を減らし、あっという間に底を現す。
すうっと最後の雫を飲み干すと、はるかはほっとため息をついて、

カップの底の白さに目を落とした。
唇から遠ざけたカップをカウンターテーブルに置く。
そっと置いたはずだったのに、その音は店内を大きく響き渡り、はるかの胸をどきりとさせた。

「……と言うわけで、俺もしばらくはここで寝泊まりするからな」
「はぁ？」
「俺もここに泊まるって言ったんだ」
間抜けに聞き返したはるかに、かたなは同じことを繰り返し言い放つと、コツンとカップをテーブルに置き、席を立った。
「二階に行こう。寝床を確保しないと」
「う、うん」

二階に登る階段はカウンターの奥にある。
はるかは、かなたがテーブルをぐるりと回ってカウンター内に入ってくる様子を目だけで追った。
その数十秒間、自由になるのは眼球の動きだけで、全身金縛りになってしまったかのように動けなかった。
かなたと自分との距離が縮まれば縮まるほど、自分の回りの空気が薄くなっていく。

（苦しい。息が……）

はるかは彼から目を逸らし、大きく口を開けて、掻き集めるように息を吸った。
ヒューという音が唇から漏れる。
（あんまり側に来ないで欲しい。窒息しちゃう）
かなたはそんなはるかの様子に気付くことなく、階段を上がっていった。
はるかも後を追った。

▲▽

店の二階は、とおるが寝泊まりしているだけあって、当分暮らすには困らないだけのものが揃っていた。

「トイレはもちろん、台所、風呂まであるんだぜ。部屋はこことそっちとあっちの三部屋。俺んちよりよほど立派だ」

階段を上がるとすぐ扉があって、一応玄関になっている。

靴を脱いで更に進むと、まず居間があって、台所がある。居間の奥には和室と洋室の二部屋があった。

六畳の和室は物置同然のようになっていた。

いったい何が入っているのか分からない段ボールが何個も積み重なった状態で放置されている。

一方、洋室はベッドが一つ、タンスが一つ置いてあるのみで、他に物らしい物はない。

「究極の選択だな、これは」

ボソリと呟いたかなたを仰ぎ見ると、彼は唇の端をにっと持ち上げた。

「お前はそっちの部屋を使え。俺は居間で寝るから」
と、かなたが指したのは洋室の方。
「あの荷物の中に掛け布団ぐらいねぇーかなぁ」

かなたは頭の後ろを掻きながら和室の段ボールの山を見渡した。
はるかが洋室のとおるのベッドを使うのは決定だ。
まさか、かわいい妹を居間や物置同然の部屋に寝かせて、自分がベッドを使えるはずがない。
妹とか、兄とか、そういうこと抜きにしても、男としてそんなことは許されないだろう。
となると、居間の床に寝転ぶか、和室の荷物を片付けるかだ。
居間の固い床で寝れば、翌朝の背中の痛みは覚悟しなければならないだろうし、和室の荷物は半端じゃない量だ。
まさに究極の選択。
だが、とおるのことで精神的に疲れている今としては、段ボールの山など触りたくもない。
それに、翌朝の背中の痛みなど、所詮、翌朝の事だ。
居間で寝る事を決めたかなたはぐるりと辺りを見回す。

8．敵がいる

「枕は座布団を折り曲げて使うとして……」
「何か掛けて寝ないと風邪引くよ。もうすぐ七月だっていっても、まだ時々寒くなったりするじゃない。探そうよ。何かあるかも」
はるかは和室を指差す。
「ダメ。俺、片付けんのとか、すげぇー苦手。段ボールの山とか、見んのもうんざり」
「とおるも苦手だよね。だから、ああなっちゃうんだよ」
言葉通りにうんざりとしているかなたに、はるかはくすりと笑い、

「いいわ。私、探す」
と、段ボールの山に向かって歩み寄り、大きく息を吐いた。
「そっちで座ってていいよ。探してあげる。――うわっ、すごい埃！もう、とおるったら、掃除ぐらいしてよね！」
この場にいない人物に対して文句を言い放つと、手前にあった段ボールの前で膝を着いた。

（物を探すのは得意なんだからっ）

はるかはじっと段ボールの山に見入った。一つ一つ、その中身を見透かすかのように。
そうすると、大抵、お目当ての物がある辺りがボッと明るく光ったりするのだ。
いや、実際は光ったりなどはしない。そんな気がするだけなのだが、そこを探して、見つからなかったことはない。
この時も、いくつかの段ボールがボッと明るく光った。
はるかはほっとして、そのうちの一番手前にあった段ボールに手

を伸ばした。
だが、その時、視野の端に青っぽい光を感じ、はるかは驚いてそちらに振り返った。
『青』と一言で言っても、青よりもっと薄く、白っぽい。
スカイブルーとでも言うのだろうか。
その名のように、どことなく空を連想させる青だ。　空の青。
それははるかにとって、とおるを想わせた。
なぜだか分からないが、時々、とおるの全身を包むかのようにその青が見える時がある。
オーラというものが本当にあるのだとしたら、その青こそがとおるのオーラなのかもしれないと、常々はるかは思っていた。

（なんであの段ボールから、とおるの青が？）

はるかは青く光る段ボールのもとへ膝を移動させた。
「どうした？」
かなたが上から覗いてくるのも構わず、はるかは段ボールを開いた。
中身を見て、はっとする。　それはぎっしりと詰められた子どもの衣類だった。
どれも見覚えがある物ばかりで、はるかは懐かしさにそれらを一枚ずつ畳の上に広げた。
小さい頃お気に入りだった緑と青のチェックのスカート。
一夏着ただけで小さくなってしまった薄いピンク色のワンピース。
とおるとおそろいで買ったTシャツ。
とおるははるかを着せ替え人形のように扱うところがあって、どこで手に入れているのか、あらゆる国々の民族衣装を喜々として持ち帰って来る。
フリルの付いたゴテゴテしいドレスだったり、そうかと思えば、古代エジプト風の衣装だったり、よくあるチャイナ服だったりする。

幼い頃はとおるのそのお遊びに付き合っていたはるかだったが、中学生になったあたりから我慢も限界に達し、十二単を着させられたのを最後に拒絶するようにしていた。
ついに反抗期かと、とおるは泣いたが、当然、無視を決め込んだ。
ロココ時代風の豪華極まるドレスを目線の高さで広げてみせると、頭上からため息が降ってきた。

「お前、こんなもん着ていたのか？」

かなたは信じられないというより、呆れて物も言えないという顔をして広げられた衣類を眺めている。
ガラス玉が散りばめられたドレスを指先で摘み上げて再びため息。

「しかし、すごい量だな。この段ボールの山、ほとんどがお前の服なんじゃないのか？」
「そうかも」
はるかも苦笑して、段ボールの山を見渡す。
そうしてから、もう一度、広げた衣類を見下ろし、それらが入っていた箱の中を覗き込んだ。
「あれ？」
「ん？」
「なんか、入ってる」
それははるかの衣類に紛れて段ボールの奥底に眠っていた。
「何だろう？」
はるかはそれを手にした。そして、あっ、と短く声を上げる。

（これだ。これが光ってたんだ）

青く光るそれは一見何てことの無い紙袋だった。

よく目にする普通の茶色い紙袋で、中にはパンなどが普通の顔をして入っていそうな物だ。
だが、手にして分かることだが、異常に重い。
ずっしりとするそれをはるかは両手で抱え、箱から取り出した。

「何だ、それは？」
「わからない。重っ」
はるかは、怪訝そうにしているかなたにそれを手渡した。
「重いな」
予想した重さと違ったのか、かなたは眉をひそめて片手で受け取ったそれにもう片方の手を添える。
そして、紙袋の中を覗き込んだ。
「何だ、これ」
かなたが紙袋に手を突っ込んで中の物を取り出した。
一瞬、ギラリとそれは黒光りする。
「銃？　まさか、本物のわけないよなぁ～。モデルガンか何かだよな、やっぱし」
手にした拳銃をかなたは両手で持ち直した。
バサリと紙袋が畳の上に落ち、中からバラバラと弾丸がこぼれ出、一面に散らばった。
「なんであいつ、こんなもん、隠すみたいに持ってんだ？」
首を傾げるかなたを横目に、はるかは散らばった弾丸を拾い集める。
紙袋の中に戻そうと袋を手にした時、はるかは袋の中に紙切れが入っていることに気が付いた。
はるかはその紙切れを摘み上げる。
四つ折りにされた紙を広げると、そこにはとおるの筆跡で文字が書かれていた。
「……はるか、かなたへ。」
突然、声を上げて読み出したはるかに、かなたは銃を置いて振り

返る。
「とおるから私たち宛てみたい」
サラリと内容を先読みしたはるかは解せない顔で紙切れをかなたに押しやった。
「なんだって？」
「読んでみて」
「……」
かなたは紙切れを受け取ると、それに目を落とし、一瞬の間、わけの分からないという表情を見せてから、さっと顔色を変えた。
その内容とは、

『はるか、かなたへ。敵だと思ったら、迷わず殺せ。』

――といった短いものだった。
だが、二人を戸惑わせるのには十分な内容であったことには違いない。
いや、むしろ、短すぎるために困惑させられたのだ。

「何だよ、殺せって。敵って何だよ！」
かなたはクシャリとその紙切れを握りつぶして、畳の上に転がる銃を見下ろした。
はるかも、かなたの視線の先に目を落とす。
「とおる、誰かに命を狙われていたのかなぁ」
小杉に放火の疑いがあると聞かされていたことをふと思い出した。
「殺された。殺されたんだよ、とおるは。誰かに！」
そうだと言い切ってしまえば、そうだとしか思えなくなってしまうから不思議だ。
それを裏付けるような、とおるの隠された部分が想像できてしまう。
「きっと、とおる、喫茶店の他に何か別の仕事をしていたのよ。た

ぶん、危ない仕事。危ないけど、やたら儲かるような仕事」
「何だよ、それ」
「わかんないよ、そんなの！でも、この客のいない喫茶店だけじゃあ、私たち二人を養えられるわけないもん」
「で、裏業ってわけか？」
「そう。それで誰かの恨みを買っちゃったのよ、きっと」

自信有りげに言い放ったはるかに、かなたは苦笑する。

「ちょっと落ち着け、お前」
「けど」
「確かにとおるは殺されたのかも知れない。裏業の一つや二つしていたのかも知れない。
誰かの恨みも買っているかも知れない。けどな……」
かなたは頭を左右に振って、コキコキと首の骨を鳴らした。
意識的にか、二人とも銃から目を逸らし、互いの目を見つめる。
「とおるは、俺やお前に、俺らが敵だと思った奴を迷わず殺れって言ってるんだぞ。つまり、俺らにとっても敵がいるってわけだ」
「敵？」
「俺らが別々に育てられたのも、その、敵って奴らと関係があるのかもな」
「どんな？」
「さあな。けど、俺、昔、思っていたことがあるんだ。逃げてるってな。何かからか知らないけど、俺んち、何度も引っ越ししてるんだ」
「引っ越し？　私んちも何度も引っ越したよ」
「だろうな。俺が高三になったあたりから、だいぶ落ち着いて、今、住んでるアパートにずっと暮らすようになったけど。その前まで、日本各地転々としていたって感じだったから。追われてるのかなぁって思っていたことがある」

「そう言えば、そんな感じかも。小学生のころ、平均三ヶ月ぐらいで引っ越してて、友達が全然できないってとおるに泣きついた覚えある。でも、とおるってば、有無も言わせずって感じで……。それにさ、喫茶店やってんだから、一つの場所にずっといた方がいいに決まってるのに、なんで引っ越しするんだろうって思ってた」
「だろ？」
「追われてたんだぁ～、とおる。でも、いったい誰に」

（敵）

はるかは心の中でその言葉を繰り返し思い描いた。
（何だろう、敵って）
『敵』などという言葉を日常的に使うことは、まず無いだろう。戦争中なわけでもあるまいし、まして、人間に天敵がいるわけでもない。
とりあえず、文明社会において、人間を殺せるモノは自然と人間のみなのだから。
はるかは再び、拳銃に目を落とした。
つられるかのようにかなたも視線を下げた。
二人の黄金色の瞳が見つめる物を、どちらも手に取ろうとしなかった。
その扱いに困り、ただ見つめる。言葉もなく、無音の時間がジリジリと流れていった。

9．客

どのくらいそうしていただろう。
日もすっかり暮れてしまい、薄く黒いベールが掛かったかのように部屋は暗くなっている。

「電気、つけるね」

先に目を逸らしたのは、はるかの方だった。
電気をつける。それだけの動作にいちいち相手に断りを入れて立ち上がる。
すくっと、自分が立ち上がる音が聞こえた気がした。
パチッ。　部屋の隅の壁にあるスイッチを押すと、2秒ほどの遅れをとって電気がつく。
その明かりのつく音さえやたら響いて耳に届いた。
はるかは立ったまま、銃を見下ろした。
さっきまで座っていた位置に再び戻り、座る気にはなれなかった。
そうしてしまえば、またしばらく、その位置から動けそうにないからだ。
はるかは別の段ボールの前に足を向けると、力任せにビーッとガムテープを引っ張った。
すると、ガムテープに張り付いていた段ボールの一層がバリバリと一緒になって剥がれてしまったが、中が開かれる。

「布団、探さないとね」
中身はやはり自分の衣類で、はるかは苦笑する。
「そうだな」
かなたもふっと息を漏らして笑い、紙袋の中に銃を戻すと、はる

かの横に膝で歩み寄ってきた。
その、かなたの膝が畳に擦れる音や自分が段ボールの中身を掻き回す音が耳に響く。
どうして、これほどまで音が気になってしまうのだろう。
けして耳障りなほど大きな音ではない。普段なら聞き逃してしまうほどの音だ。
けれど、今のはるかには聞き逃せるようなものではなかったのだ。
まるで全身が耳にでもなったかのように全ての音が聞こえてくる。
自分の心臓の音さえ、うるさい。

（あ、そうか）
心臓の音を聞きながら、はるかは一人納得する。
（私、緊張してるんだぁ）

とても緊張している者とは思えない程のんびりとそれに自覚した。
だが、しばらくして、否定する。
緊張とは違うのだ。緊張ではなく、もっと……。

（嫌な感じがする）

嫌と言うのか、不安な感じと言うのか。
はっきりとは分からないが、とにかくこれからいい事が起こりそうな予感などはせず、
逆にとんでもない事が起きるような気がするのだ。

（これ以上とんでもない事って何よ。とおるが死んだって聞かされて、兄なんかが急にできて、誰かに追いかけられるし、敵って存在がいるらしいし……。まったく、これ以上のとんでもない事があるんだったら、ぜひとも起こって貰いたいぐらいだわっ！）

半ばヤケになりながらも、胸の奥の不安を消し去ろうとはるかは強気なことを心の内で言い放った。
――と、その時。
カラン。　遠くの方で鐘が鳴った。店の扉に付いていた、あの鐘の音だ。
はるかはびくっと体を震わせてかなたに振り返った。

「誰か来たな」
誰だろう？と言う言葉を呑み込んで二人は立ち上がる。
「お客さんかも。扉が開いていたから、店やってると思って入って来ちゃったのかも」
「けど、店ん中、真っ暗だぞ」
「そーだよね」

（お客さんじゃないとしたら、いったい）

二人は突っ立ったまま、意識を足下に集中させた。
確かに人の気配を感じる。おそらく一人。
コツン、コツンと聞こえるはずのない足音さえ聞こえてくるようだった。
しばらく店内をぐるぐると歩き回っていた人の気配がカウンターの奥の階段を上がって来た。
はるかは無意識にかなたの袖をギュッと握り締める。
ピーンポーン。　間が抜けたようなチャイム音が部屋中に響いた。
どうする？と問いかけるようにかなたを見上げる。
「お前はここにいろ」

言葉なく頷いたはるかを見て、かなたは自分だけで玄関に向かおうとした。
だが、袖を引かれて眉を歪ませ、足を止める。
「おい」
言われて、はるかは自分の手がかなたの袖を握り締めている事に気が付いた。
「あ、ごめん」
握り締めた手を開こうとするが、開かない。
凍りついてしまったかのようにぴくりとも動かないのだ。
はるかは諦めて、かなたを見上げる。
「私も行く」
かなたは呆れたようだったが、何も言わなかった。

再びチャイムが鳴り響いて、二人は玄関に向かう。
「どなたですか？」
抑えた声でかなたが玄関の向こうの人物に問う。
「その声はかなた君かい？　わたしだよ、長坂だ」
帰ってきたのは男の声だった。若くはない。中年過ぎの男の太い声だ。
「覚えていないかなぁ？　覚えてないだろうね。君が４つの時に会ったきりだからね」
かなたは怪訝な顔をしている。
玄関の向こうの人物が自分で言ったように、かなたは彼にまるで覚えがなかった。
「知っている人なの？」
「向こうが言うにはな。４つの時に会ったって言われてもなぁ～」

とにかく、中に入って貰おうとかなたは玄関を開けた。
すると、はるかが予想していた通りの男がそこに立っていた。
背はそれ程高くはない。とおるやかなたの方がよほど長身だ。
だが、二人より肩幅があって、がっちりしている。
はるかが友人たちに、これが自分の父親だと紹介されると大抵、今、目の前にいるような体型の中年男が現れる。
これが世間一般の中年男で、父親と言われる年頃の男の姿なのかと、はるかはぼんやり思った。

「ああ、はるかちゃんもいるね」
長坂と名乗ったその男が言った。
「私も知っているの？」
「知っているとも。けど、君はまだ目も開かない赤ん坊だったよ」
ふーんと、はるかは鼻を鳴らした。
「どうぞ、上がってください。はるか、お茶」
「うん」
古い知人だと知って警戒を解いたようで、かなたは長坂を居間に案内した。
だが、はるかはどこか腑に落ちないものを感じていた。

（なんで、今？）

古い知人だという人が、どうして、こうもタイミング良く現れるのだろう？
まるで、とおるの身に何が起こったのか、全て知った上で現れたかのようだ。
はるかが3人分の緑茶を入れて居間まで持ってくると、かなたと長坂は小テーブルを挟んで向かい合うようにソファーに腰掛けていた。
はるかはそれぞれの前に湯飲みを置くと、かなたの隣に座った。

「長坂さんはとおるの友達？」
「友達とは、ちょっと違うかなぁ」
「じゃあ、何？」
「恩人だよ。お互いがお互いのね」
意味が分からないと首を傾げると長坂は笑った。
「君たちは、自分たちのことをどこまで知っているんだい？」
「え？」
声をそろえて聞き返した二人に再び笑う。
「その様子だと彼は君たちに全く話していないようだね。そうだろうね。彼は君たちに知って欲しくなかったのだろうね。だが、知っておいた方がいい。自分たちのことだからね」

長坂ははるかが入れたお茶をずずっと音を立てて啜り、
「わたしから話してもいいのだが、いったいどこから話したらいいものか……」
と、ゆっくりと息を吐き出した。
かなたとはるかは彼の口から言葉が放たれるのを静かに待っていた。

（この人は知っているんだ。私の知らないとおるのことを）

はるかは相手の心の中を読みとるかのようにじっと彼を見つめた。
その視線の強さに気付いたのだろうか。彼ははるかを見て、穏やかに微笑んだ。

「二人ともよく聞くんだよ。これからわたしが話すことは二人にとって信じがたいことだろうけど、全て真実なんだからね」
「はい」
「わかった」

「まず、とおるとわたしがどこで出会ったのかを話そう」
二人が素直に頷いたのを見て、長坂はゆっくりとした口調で話し出した。
それはまるで小さい子どもに絵本を読み聞かせるかのような口調だった。

「当時、わたしは『ＧＡＩＡ』という研究所に勤めていた。そこは、表向きこそ、医療関係の研究所ということになっていたが、――いや、実際いくつかの薬品を開発したりしているが、その裏では孤児を集めて奇妙な実験をしているところだった」
「奇妙な実験？」
「君たちは超能力を信じるかい？　ＰＫとかＥＳＰとか」
初めてきくアルファベットの並びに二人は首を傾げる。
「では、少し、超能力について話をしておこう。――超能力は大きく二種類に分けられるとされている。一つがＰＫ、もう一つがＥＳＰだ。ＥＳＰは透視、予知、テレパシーなど、超感覚的な分野に分けられるもので、超感覚知識、Ｅｘｔｒａｓｅｎｓｏｒｙ　Ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎの略だ。ＰＫは念力、Ｐｓｙｃｈｏｋｉｎｅｓのことで、更に三種類に分けられる。それはＰＫ－ＳＴ、ＰＫ－ＭＴ、ＰＫ－ＬＴの三種類で、ＰＫ－ＳＴは『制止した物体に影響を与える力』、ＰＫ－ＭＴは『動いている物体に影響を与える力』、そしてＰＫ－ＬＴは『生物に影響を与える力』のことだ」
「えっ、ちょっと……」
突然、超能力の話を始めた長坂にはるかは戸惑いの色を見せる。
しかも、ゆっくりだが、流れるように言われた言葉をよく理解することができなかった。
「けど、その、ＰＫとか、ＥＳＰとかが父と何の関係があるんです

か？」
必死で理解しようと試みているはるかに対して、かなたは初めからよく分からない単語など聞き流していたようで、関係のない話は早く切り上げるようにと暗に含んで長坂に言った。
だが、彼は、とおると関係のない話ではないのだと首を振る。
「まあ、聞きなさい、かなた君。『ＧＡＩＡ』では、集められた孤児に超能力を高める実験をしていたんだ」
「超能力を高める？」
聞き返したのは、興味ある瞳を彼に向けているはるかの方だった。
「実験というより、訓練と言った方がいいかな。裏返したカードに描かれた図形を当てるなど感応訓練、手を触れずに瓶を倒すなどといった念動力訓練、透視、遠隔視など……。
他にも、催眠をかけてその人が本来持っている力を最大限に引き出すなどといった治療も行われていたんだよ。『ＧＡＩＡ』のこれらの研究は、もう、ずっと以前から続いていたものだったが、成果と言える成果のない研究だったんだ。
それが、今から二十数年前、『ＧＡＩＡ』にとって転機となる一人の少年が現れた。その少年というのが、とおるだよ」
とおると聞いて二人の肩がビクンと揺れた。
「とおるは『ＧＡＩＡ』に協力する孤児院から連れてこられた少年だった。
その孤児院の記録によると、丸裸――へその緒さえ付いた状態でゴミ捨て場に捨てられていたところを孤児院で保護したらしい」
「とおる、孤児だったの？」
「親戚とか、いっさい、いないとは聞いていたけどな」

長坂は二人に深く頷くと言葉を続けた。

10．GAIA

「とおるはすぐに孤児院から『ＧＡＩＡ』に連れてこられたんだ。その、生まれて間もない幼児に『ＧＡＩＡ』は連日催眠暗示実験を施した。彼のように本当に幼い時期から『ＧＡＩＡ』に連れてこられた例がそれまでになかったからね。『ＧＡＩＡ』はとおるにあらゆる期待を持ち、半ば掛かりっきりで実験を繰り返したんだ。その中には、薬物投与や遺伝子操作なども行われたらしい。その結果なのか、もとから持っていた力だったのか、とにかく、とおるは他のどの子どもよりも飛び抜けた力を現すようになったんだ」

長塚はそこで一息付くと、二人の顔色をちらりと伺った。

そして、続けた。

「とおるの場合、ＰＫ、ＥＳＰともに優れていたけどね。特にＰＡＲに優れていた。」

「ＰＡＲ？」

初めて聞く単語にはるかは眉をひそめた。

「それも超能力の一種？」

「Ｐｓｙｃｈｏａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ　Ａｎｄ　Ｒｅｉｎｆｏｒｓｅｍｅｎｔつまり、精神力による肉体超強化。意識的に運動能力を高めることのできる力のことだよ。超能力と言ったら、超能力の内だけど、火事場の馬鹿力ってあるだろう？　あれに似たところがあるかな。けれど、とおるのそれは火事場の馬鹿力の比じゃない。生命の危機関係なく、いつでも意識的にその力が出せる上に、その力が、素手で鉄を砕き、弾丸並みのスピードで走れるというものだからね」

信じられないという顔をする二人。
それもそのはずで、自分たちの父親が素手で鉄を砕いているところも、弾丸と競争している姿も、十数年間一緒に暮らしていながら一度たりともお目にかかったことがなかったからだ。

「とおるは『ＧＡＩＡ』では別の名前で呼ばれていたよ。幼い頃は、ＣｈｉｌｄのＣに数字を付けて、Ｃ４１８。４１８というのは、『ＧＡＩＡ』に連れてこられた孤児に順に与えられた番号だ。捨てられる前や孤児で名付けられていた子どもにはその名前があるが、とおるなど、それ以外の子どもにはそのコード番号しか自分を示す名がなかったんだ。」
「Ｃ４１８……」

はるかは口の中で何度もとおるのコード番号を繰り返し呟いた。
なんだか、とおるに合わない。ピンと来ない響きだと、はるかは思った。

「幼い頃はって言うと、他にも名前があったの？」
はるかの問いに長坂は頷く。
「そう、あったよ。超能力が認められるようになってから、とおるは『Ａ？』と呼ばれるようになったんだ」
「Ａ？！」
思わず叫んだはるかに、かなたと長坂は驚きの目を向ける。
「Ａ？って、私、どこかで聞いたことある！絶対！」
パズルのピースが一つ当てはまったような、そんな感じだった。
「数学の教科書かなんかに書いてあったんだろ？」

落ち着けとはるかの肩をかなたが軽く叩く。
「ちがーう、音として聞いたことがあるの」

「だから、数学の授業で聞いたんじゃないのか？」
「違うってば！もう、黙っててよ、かなたは！」
それで？と振り返ったはるかに長坂は苦笑して、続きを話し出した。
「Ａというのは、Ａｄａｍの略だ。？は『ＧＡＩＡ』における第一能力の意味、つまり、ＰＡＲのこと。ちなみに第二能力はＰＫで、第三能力はＥＳＰ、そして、第四能力はＰＫ－ＬＴのうちの治癒能力のことだ。ＰＫには３種類あると先程説明したね。ＰＫ－ＬＴは『生物に影響を与える力』のことで、手を触れるだけで怪我や病気を治したり、悪くしたりできる能力だ。ＰＫ－ＬＴだけが他のＰＫ能力と別に分けられたのは後で説明しよう」

そこで長坂は言葉を一旦切り、湯飲みを口に運び、ぐいっと一気に飲み干した。
コトンとテーブルに湯飲みが置かれる。

「とおるという成功例を出して、『ＧＡＩＡ』は他の孤児たちにも薬物投与やら遺伝子操作実験を強制するようになった。大抵の孤児たちは、それらの実験に体がついていかなかったようで、血を大量に吐いて死んでしまったり、廃人になってしまったと聞いたよ。けど、中にはとおるのように能力を現した者もいてね。そのうちから優秀な７人が選抜された。つまり、その７人がＡ？、Ａ？、Ａ？、そして、Ｅ？、Ｅ？、Ｅ？、Ｅ？で、彼らにとおるを足して第一世代と呼ばれる少年少女たちだ」
「Ｅって、イヴ？」
「そうだよ、ＥｖｅのＥだ。少女たちのことだよ」

ふーんと、はるかは鼻を鳴らす。
今まで生きてきた日常生活からかけ離れた世界の話を聞いているためか、靄がかかっているように理解しがたい。

分かったようで、はっきりと分かっていないのである。

「8人のアダムとイヴを得た『ＧＡＩＡ』は次に、アダムとイヴの子どもたちを造り出そうと考えた。幼児期からの訓練に成果があることはとおるで実証済みだからね。『ＧＡＩＡ』生まれの子どもがどうしても欲しかったんだよ。そうして誕生したのがＦシリーズ、第二世代とも言うね。ちなみにＦはＦｉｌｉａｌのＦだ」

「生物の遺伝の勉強みたい。あれもＦの字使うよね。Ｆ１とかＦ２とか」

はるかの言葉に長坂は苦笑で答えた。

「Ｆシリーズたちのコード番号はＦに３桁あるいは４桁の数字で表されている。Ｆのすぐ次に来る数字がその子の能力種類番号。つまり、Ｆ１０２３というコード番号の場合、第一能力のＰＡＲに優れた子どもであることを示していて、彼らは１シリーズとも呼ばれて射るんだ。下２桁の数字は１シリーズ内で造られた順番を示している。

ちなみに、シリーズ数字と順番数字の間は０で区切ることになっているから、３桁の者と４桁の者がいるんだよ」

長坂はテーブルに数字を書きながら、説明を続ける。

「もう一つ例を上げれば、Ｆ４０９というコード番号なら、４シリーズの９人目に造られた子どもってわけだ。４シリーズとは……分かるね、ＰＫ－ＬＴに優れている子どもたちのことだ」

「じゃあ、Ｆ３０２６だったら、３シリーズの２６人目って意味？」

適当に作った数字でコード番号を言ったはるかに、長坂は大きく頷いた。

「その通り。はるかちゃんは頭がいいなぁ」

こんな事で誉められても困ると、はるかは肩をすくめる。
長坂はそれを見て軽く笑い、かなたに振り向いた。

「かなた君はついて来てるかな？」
「まあ、なんとか……」
苦々しく答えた彼に頷き、長坂は話を戻した。
「Ｆシリーズの能力は親の配偶と片親のどちらにより似たかに影響があってね。　例えば、Ａ？とＥ？の子どもが造られたとする。ＰＡＲ、ＰＫともに持ち合わせた子どもが誕生するのが大抵だけど、必ずどちらかがもう一方より優れているんだ。つまり、Ａ？に似てＰＫが優れていれば、その子どもは２シリーズに分類されるというわけだ」
「Ｅ？に似てたら、１シリーズなのね」
「そう」
「なあ」

不意に、それまで黙って聞いていたかなたが口を開いた。

「とおるはＡ？って呼ばれていたんだろ？　他のＡだかＥだかの奴らみたいに、子どもを造らされたりしたのか？」
どきんっ。　はるかの胸が鳴った。
敢えて考えないように、触れないようにしていたことをかなたが口にしてしまったのだ。
「今までの話を聞くと、第一世代とかいう奴らって、実験の為に相当ガキ造ってるよなぁ？　コード番号が４桁になるほどいるってわけだろ？　少なくとも一人２桁の数いるよなぁ。とおるにもいたのか？　俺ら以外のガキがわんさかと……」

（わんさか……）

想像すると嫌なものがある。
一人っ子だと思っていた自分に兄がいると知った時、戸惑ったのはもちろんだったが、嬉しいような気も少しあったのだ。
独りぼっちにならずにすんだことへの安堵感。
今までひっそりと抱いてきた兄弟姉妹への憧れ。
そんなものが少なからずあって、はるかにとってかなたは嫌悪するほどの存在にはならなかったのだ。
だが、わんさか……とまでいくと、さすがに嫌なものがある。
自分の知らない兄弟姉妹がたくさんいる。考えてみると、ぞっとするものがあった。

「どうなの？」
不覚にも潤んだ瞳で長坂を睨み付けた。
すると、彼は意外にも首を横に振った。
「A？の子どもは君ら二人だけだよ」
わんさかなんていないと彼は笑った。

「幼少期から続けていた実験の積み重ねの影響でか、A？の遺伝子プログラムに今の科学では解明できないような異常が起きてしまったらしいんだ。わたしは専門じゃないからね、良く知らないが、普通にイヴたちと配偶させたのでは子どもを造ることができなかったと聞いたよ」
「じゃあ、どうやって……？」
「何度も失敗した後に、猫科のＤＮＡを組み込ませると成功することが分かったんだ。」
「猫？」
「研究員も半ばヤケになっていたんじゃないのかなぁ～。動物のＤＮＡを組み込んでみようということになってね。どうせなら百獣の王と呼ばれる獅子のＤＮＡを使おうということになったんだ。すると、どうしたわけか、ちゃんと人間の姿を持った子どもが生まれた

ってわけだ。その子がＮシリーズ第一号。Ｎ１０１だよ」
「Ｎ１０１？」
「ＮはＮｅｏ。新しいという意味だ」
そう言うと、長坂はズボンのポケットからおもむろにライターを取り出した。
「かなた君、左腕をまくって」
「腕？」
訳が分からないという顔をしながらも、言われた通りに腕まくりをすると、長坂にその腕を引かれる。
彼はがっちりとかなたの腕を抱え込むと、肩より少し下の部分にライターの火を押しつけた。
「熱っ」
バチンっと、長坂の手を振り払い、かなたはその部分をさすりながら彼を睨み付けた。
「何するんですかっ。いきなり！」
「ごめんね。言うより見て貰った方が早いかと思ってね」
「見るって？」
首を傾げるはるかに、長坂は笑って、かなたの腕を指した。
「二人ともよく見てご覧。かなた君の肩の下辺りを」
二人が言われたところを見ると、火傷したのか、さすりすぎなのか、皮膚が赤くなっている。
何を見ろと言うのか、理解に苦しみながらも黙ってそこを見つめていると、赤くなった皮膚から、すうーっと白い文字が浮かび上がってきた。
（数字？）

「Ｎ１０１？」
「なんだって？」
その文字を読み上げたはるかに、かなたは聞き返した。
位置が位置だけに、どうやらかなたからは見辛いらしい。
「Ｎ１０１って書いてある」
信じられないという表情で振り返った二人に長坂は深々と神妙に頷いた。

「とおるの最初の子ども、Ｎ１０１というのは、かなた君のことなんだよ。Ｆシリーズは、生命の危機、力を使った時などに、そこにコード番号が現れるように造られているんだ。生命の危機までいかなくとも、火であぶったり、冷水に長時間漬けたりして、皮膚を傷つけても現れるよ。ＮシリーズもＦシリーズのうちだからね、かなた君にもちゃんとコード番号が現れたってわけだよ」

淡々と語られる信じがたい事実に本人はもちろん、はるかも唖然となって言葉もない。

「はるかちゃん、君もなんだよ。」
「私も……？」
「自分の目で確かめてみるかい？」
と、差し出されたライターをはるかは恐る恐る受け取った。
しばらく無言でそれを眺めるが、左右に頭を振ると、袖をまくった。
腕を露わにさせると、ライターの火をつけようとするが、震える手ではなかなか火がつかない。

「貸せ」
焦れたのか、横からかなたにライターを奪われた。
されるままに腕を預けると、肩より下の皮膚に炎を押しつけられ

る。
「痛っ」
「大丈夫か？」
「う、う～ん。それより、見て。浮かんできた？」
潤んだ瞳でかなたに左腕を差し出すと、かなたは赤くなった部分をじっと見つめていてくれた。
しばらくして、
「浮いてきたぞ」
と、かなたがコード番号を読み上げた。
「Ｎ３０６」
「Ｎ３０６？」
「ああ」
「それが私のコード番号なの？」
振り返ったはるかに長坂は頷いた。

11．黒猫

「はるかちゃんには黒猫のＤＮＡが組み込まれていると聞いたよ」
「猫……」
不意に、今朝方、友達に『捨てられた猫』みたいだと言われたことを思い出した。
「けど、Ｎの次に３が来るってことは、３シリーズだってことだよな？　たしか、ＥＳＰが優れているとか言う……」
「そう、その通り。はるかちゃんは母親似だったんだね」
「母親？」
聞き慣れない単語にはるかは狼狽する。
「私、お母さんがいるの？」
「もちろんだよ。はるかちゃんのお母さんは、『ＧＡＩＡ』ではＥ？と呼ばれている女性だよ」
「Ｅ？……」
はるかは、Ｅ？と何度も口の中で呟き返した。
そんな様子に長坂は軽く微笑んで、
「ちなみに、かなた君のお母さんはＥ？だよ」
と、かなたを振り返った。
こちらの少年は、そんなことはどうでもいいという態度を保っていたが、やはりどこかに想うものがあるようで、黄金色の瞳を空に漂わせている。
「かなた君の誕生からＮシリーズの研究が始まって、様々な動物のＤＮＡを持った子どもが造られたけど、Ａ？は猫科じゃなければならなかったのと、まだ研究不足な点があったので、Ａ？の子どもは君ら二人しかいないんだ。何人か造られてはいるんだけどね。Ｆシリーズにおいては受精さえうまくいかないし、Ｎシリーズでも、胎

児期に死亡してしまう場合がほとんどだったからね。ちゃんと育ったのは君ら二人だけだよ」
「ふーん、そうなんだぁ」

とりあえず兄妹二人きりと聞いてほっとする。
だが、それでも、とおるの子どもを物のように生産しようとした人たちがいたという事実に衝撃を受けるはるかだった。
そして何より、物として考えられているのは、他でもない、自分自身なのだ。

（人間ではない）

不意に心に浮かんだ言葉に、深い傷を付けられる。
（物として造られたのだ、私は）
猫のＤＮＡが組み込まれていると言われた体を抱き締めた。
（人間ではない。私は……。私は、バケモノだ）
自然の摂理を考えてものを言えば、猫のＤＮＡが組み込まれた人間など生まれるわけがないのだ。
だが、事実、自分はこの世に存在する。
あるはずのない存在。
神以外のモノが創造した醜い産物。
そう、自分は人為的に造られたキメラなのだ。
（バケモノ）
その言葉の音は頭の中を反響しているかのようで、何度も何度もはるかの心に深く突き刺さった。
心の痛みに言葉を失ったはるかの代わりにかなたが口を開いた。

「ところで、長坂さんはとおるとはどういった関係なんですか？
先程、お互いがお互いの恩人だとかおっしゃっていましたが」
「とおるとわたしの関係かい？　そうだね」

彼は少し考える仕草をしてから、ゆっくりと話し出した。

「わたしは『ＧＡＩＡ』の表向きの研究に携わっていた研究員だったんだ。初めはね。だが、ある日、偶然、『ＧＡＩＡ』の裏の顔を知ってしまったんだ。表向きの研究、つまり、医療関係の研究だが、そちらの研究員には『ＧＡＩＡ』の裏のことなど全く知らされていなかった。わたしは広すぎる施設、その割には狭く、設備の少ない研究室に疑問を抱いていた。わたしたち、表の研究員には幾つか入っては行けないエリアがあったんだ。

まず、そこからして、怪しいと思うだろう？　ある日、わたしはそのエリアに侵入することを決意したんだ」

「うまくいったの？」

「ああ、うまくいったとも。……おかげで、ただの、何も知らない表の研究員ではいられなくなってしまったがね。『ＧＡＩＡ』はわたしに秘密を守るよう脅迫した。もしも、外に漏らしたら、お前やお前の家族の命はないと」

一旦言葉を切り、長坂は重たく息を吐き出した。

「秘密を知ったから、二年間、家に帰ることも許されず、『ＧＡＩＡ』の一室に監禁されたよ。それから、裏の研究に携わることとなったんだ。とおると出会ったのも、その頃だ。彼は１０にもならない幼い少年だった。わたしは超能力の研究をさせられる一方で、彼の日常生活の世話、いや、監督をする係をしていた。彼とわたしは妙に気があってね。

彼はわたしにさまざまな超能力を見せてくれたし、わたしは彼に『ＧＡＩＡ』の外の世界を教えた。彼と出会ってから、さらに二年の歳月が過ぎ去った頃、Ｎシリーズの第一号が誕生した」

君のことだと、長坂はかなたに目をやった。

「とおるは、自分のことならまだしも、自分の子どもまで、研究の対象にしたくない、『ＧＡＩＡ』の犠牲になって欲しくないと思っていた。彼は知っていたからね。Ａ？やＡ？、他のＡやＥと呼ばれる者たちの子どもが次々に造られ、売られていることを。Ａ？やＥ？、Ｅ？の子供で、シリーズ１あるいは２の子どもたちは、海外に兵士として売られたり、政治家や有力会社の重役など金持ちに護衛として買われる。Ａ？かＥ？の子どもたちは見目が良い子が多かったから、特にシリーズ３の子どもたちは金持ちの道楽玩具として売られるのがほとんどだったよ」

長坂の言葉にぞっとしてはるかは左肩をさすった。

そこにはＮ３０６と、シリーズ３であることが記されていた。

「そして、Ａ？、Ｅ？のシリーズ４の子どもたちは治癒能力を持っているのに目をつけられて、ドナーとして売られた。彼らの臓器を使うと、どうしたわけか、移植後の拒絶反応が少ないと分かったんだ。医療関係に使用されることがほとんどだが、中には金持ちの道楽で、食されることもあったらしい。なんでも、彼らの肉は老化を遅らせることができるとか、さまざまな難病に効果があるとか。その真偽の詳しいことは分からないが、そう言われて、数十人が売られていくのを見たよ」

「信じらんねぇ～」

「ひどい……。人権とか、ないわけ？　だって、造られたって言ったって、人の形をしているのよ」

「ない。本来なら、君たちは存在しないモノだから」

はるかは、『ＧＡＩＡ』で造られ、売られていった子供たちと自分とかなたをひとまとまりに、

【君たち】と言われたことに衝撃を受け、ぐっと息を呑んだ。

「子どもが生まれれば、普通、出生届けというものを役所に提出するだろ？　それで戸籍を貰い、その者の存在がその国の政府に認められる。だが、君たちの場合、出生届など提出されず、戸籍もない。日本はもちろん、世界中のどこの政府にも存在を認められていないモノなんだ。人権は、一人の人として認めてくれた政府が保証してくれるものだろう？　君たちはそれを保証されない。実際は存在しないはずの存在だからだ」
「戸籍がない？」
「けど。だって……」
「戸籍がないはずはないですよ。俺もはるかもちゃんと学校に通っていますし、人並みの生活を送っています。今まで、人として生きることに不自由したことなんて……」

長坂は首を横に振った。

「その戸籍は偽造だよ。わたしが用意した」
彼は驚く二つの顔を交互に見比べ、ゆっくりと口を開いた。
「かなた君の誕生から、とおるとわたしは『ＧＡＩＡ』のやりように我慢ならなくなり、脱走を決意した。と、言っても『ＧＡＩＡ』の警備は厳しくってね。特にとおるは何重にもある鉄扉の奥の部屋に閉じ込められていたから。わたしたちは念入りに計画を立てた。そして、五年後、計画を実行する日になった。かなた君と、五年の歳月の間に誕生した、はるかちゃんも連れての脱走だった」
「子ども二人も連れて？　大変だったでしょ？」
「とてもね。けれど、あんなところに我が子を置き去りにして、自分達だけで逃げるなんてできないだろう？　――なんとか脱走に成功したわたしは、戸籍のない君たちのために金にものを言わせて、戸籍を買ったんだ」
「買った？　買えるものなの？」

「この世で金でなんとかならないものは結構少ないんだよ。どんな汚い手を使ってでも手に入れようと思えば、手に入れられないものはないのかもしれない」
と言って、長坂は苦々しく笑った。そして、話を続ける。
「わたしはとおるの脱走に手を貸し、戸籍を用意した。彼はわたしを『ＧＡＩＡ』から逃げる理由と機会をくれた。もし、彼が逃げようとしなければ、わたしはその勇気がないものだから、いつまでも『ＧＡＩＡ』の言いなりになり続けていただろう」
「なるほどね。それで恩人なのね」
「けど、長坂さん」

過去を懐かしむ様子を見せる彼にかなたは問う。
それは、はるかが初めに疑問に思っていたことだった。

「どうして今日、突然お見えになったのですか？　とおるが今、どんな状態にあるか、もしかして、ご存じとか？」
かなたの言葉に彼はしばし沈黙した。明らかに何かを知っている。
「今日、とおるね、病院に運ばれたの。家が火事になって……。とおるね、すごい火傷を負ったんだって。それで……」

死んだという言葉をどうしても声にできず、はるかは曖昧に濁した。

「そしたら、とおる、いなくなっちゃって……。ないって言うの。誰かに盗まれちゃったんだって」

（うわっ。泣きそ～）
泣かないと決めた限り、絶対に涙をこぼすようなことはしないが、潤んだ瞳が見つめる世界は次第にぼやけていく。

長坂は、はるかの言葉にやはりと呟いた。
「とおるの亡骸を持ち去ったのは、おそらく『ＧＡＩＡ』だろう。火事も彼らの仕業なんじゃないのか？」
「放火の疑いがあると警察に言われました」
「とおるの抵抗の跡かもしれない」
「抵抗？」
「おそらく、『ＧＡＩＡ』はとおるを捕らえる為に能力者を送りこんだのだろう。シリーズ１か２の兵士だ。数人がかりでとおるを拘束しようとしたに違いない。
だが、とおるはＡ？だ。Ａ？はＡ？やＥ？、Ｅ？などとは比べものにならないほど、圧倒的に強い。数人がかりとは言え、とおるを抑えることはできなかったのだろうな。
とおるは炎を使い抵抗し、彼らを追い払ったのだ。だが、力尽きて……」
「病院に運ばれた後、追い払ったはずの奴らが引き返してきて、とおるを連れ去ったというわけですか？」
「おそらく」
「じゃあ、とおるは『ＧＡＩＡ』にいるのね」

はるかは勢いよく立ち上がった。
今にも飛び出していきそうな勢いだ。

「行くわ、私、『ＧＡＩＡ』に！とおるを連れ帰るの」
「はるかちゃん……」
「簡単に言うな、はるか」
「けどっ」
かなたははるかの腕を引き、再び座らせると、諭すような静かな口調で言い放った。
「お前は今までの話を聞いて『ＧＡＩＡ』という所をどういう所だと思ったんだ？」

「どういうって……」
「俺は、胸くそわりぃ～よ。はっきり言って、関わりたくない」
鋭い黄金色の瞳に見つめられ、はるかの胸がどきんと鳴った。
かなたの言うように、はるかも心のどこかで想うものがあった。
関わりたくないと。

「けど……」
「けど、だ。そこにとおるがいるって言うのなら話は別だ。それに何より、自分に関係あることだ。自分が造られた所ぐらい知っておきたい。造られた意味とか、『ＧＡＩＡ』の目的が知りたい。なぜ超能力を研究するのか？　能力者を造ってどうするつもりなのか？
彼らの最終目的は何なのか、俺は知りたい」

はるかは目を見開いた。
（ああ、どうして彼は私の言いたいことを口にしてくれるのだろう）
言いたくともうまく言えないこと。
想っていても口にしないこと。
それらを彼が言葉にしてくれる。まるで自分の心が彼の心に映っているみたいだ。

「本気なのか？　本気で行くつもりかい？」
『ＧＡＩＡ』に……と長坂は息を呑んだ。
かなたとはるかは黙って頷いた。
「わかった。二人が決めたことなら、仕方がない。『ＧＡＩＡ』のある位置を教えよう」
と、言い、彼はポケットから手帳を取り出した。
そこに挟み込まれたボロボロの地図を机に広げる。
「いいかい？　『ＧＡＩＡ』は正確に言うと、４カ所に点在する。

うち、とおるが運び込まれたと予測できる研究所は、第３研究所。
『ＧＡＩＡ』内では『ＨＥＬＥＮＥ』と呼ばれている」
「ヘレネ？　そこにいるのね？」
「そこがここから一番近い。おそらく、一度『ＨＥＬＥＮＥ』に運びこんでから、第一研究所に移すだろう」
「第一研究所？」
「『ＡＲＥＳ』と呼ばれている。シリーズ１の子どもたちが兵士としての養育を受けている所でもある。そこに運ばれてしまうとやっかいだぞ。『ＧＡＩＡ』の堅固な警備と何百という兵士を相手にしなくてはならない」
「わかった。それで、『ＨＥＬＥＮＥ』の場所は？」
「ここだ」
と、長坂の指が地図の上を滑る。
「この辺りは山道が続く。道を知っている者でなければ、迷ってしまうよ。わたしが行けるところまで送ろう」
「しかし、あなたは関わりたくないでしょう？　『ＧＡＩＡ』とは、もう……」
かなたの気遣う言葉に長坂は苦笑を漏らした。

１２．記憶の中の声

「関わりたいとは思わない。だが、とおるは恩人だと言ったよね？
その子どもである君たちが危険なことをしようとしているのを見て見ぬふりはできないんだよ。止めても無駄だろうから、止めないよ。だから、せめて、少しでも危険が減る手助けがしたいんだ」
「きっとあなたにも危険が及ぶ」
「君たちの危険に比べたら……。さあ、そうと決まれば、早い方がいい」
と、言って長坂は立ち上がった。
「実はね。とおるに何かが起こっただろうことは分かっていてここに来たんだ。いや、何かが起こるだろうことを予測して来た。起こる前にとおるに会えれば良いと思ってね」
「どういうことですか？」
つられるように席を立ちながら、かなたは聞き返した。
「本当に凄い偶然だったよ。高校生の模擬試験の成績ランク表を目にしたんだ。今、わたしは高校生の参考書などを作っている出版社に勤めていてね。そこで、偶然にも目にしてしまったんだ。はるかちゃん、君の名前をね」

長坂の言っている模擬試験とは、はるかが高校入学直後に学校に強制的に受けさせられた試験のことだ。
３ヶ月も前のことで忘れていたが、今朝、友達に言われたばかりなのですぐに思い至る。
「名前だけなら、なんの心配もなかった。
けどね、５教科全て満点だったのが良くなかったんだよ」
「５教科全て満点！」

信じられないとかなたがはるかを振り返った。
「取れないだろう。普通……」
「そうかなぁ～。そうでもないよ」
はるかの、のんびりとした言葉にかなたはブンブン頭を左右に振った。
それを見て長坂はわずかに笑って、
「そうだね。できる子はできるからね。でもね、はるかちゃん。あの模擬試験の平均点、見た？　各教科４５点もなかったでしょ」
「そうなの？」
「なんで知んねぇーんだ？　お前はよぉ」
「興味ないもん」
「……とにかく、一部の教育者の間で、はるかちゃんの名前が知れ渡ってしまったんだ。
それが『ＧＡＩＡ』の耳に入ったってわけ」
「たかだか、テストの点が良かっただけでしょ？」
「シリーズ３の子供はＥＳＰが優れていると言ったよね？　つまり、裏返ったカードに描かれた記号を当てる応用で、テストの答えを当ててしまってもおかしくないんだ。特にあの模擬試験はマークシートだっただろう？」
「う、うん……」
「『ＧＡＩＡ』がその気になれば、名前から住所を調べるぐらい、簡単なことだ」
「それじゃあ、とおるの居場所がばれたのは、私のせい？　せっかく逃げたのに、捕まってしまったのは、私のせいなの？」

はるかの問いに誰も答えなかった。
はるかもまた、答えを期待していなかった。
（とおるっ）
はるかは力の限り拳を握り締めた。
爪が肉を引き裂くほどに。

「ここを知られるのも時間の問題だ。逃げるにせよ、『ＧＡＩＡ』に乗り込むにせよ、早くここから移動しよう」

長坂の言葉にかなたも、はるかも黙って頷いた。

▽▲

何万という街の明かりも遠ざかり、後方に消え去っていった。

時おり過ぎ去っていく対向車も、流れ星のように一瞬光り、一瞬で消え去っていった。

窓の外は暗闇。景色を楽しむこともできない。

ガラスに映った自分の情けない顔を、はるかはじぃっと見つめていた。

高速道路を走り出して、どのくらいの時間が経っただろう。
途中休憩に寄ったサービスエリアは覚えのない地名だった。
規則的な揺れに身を任せて、はるかは目を閉じた。
どうしたというのだろう。さっきから震えが止まらない。
カタカタと音が聞こえてきそうなほどに膝が震えている。
震えを止めようと膝を押さえつけると、はるかのものより大きな手が覆い被さってきた。
やさしく包み込むように。
手の主を見上げると、彼は無言ではるかを見返してきた。
薄暗い車内に金色の瞳が淡く光る。
はるかも言葉を発することなく、かなたの手を握り返した。

車は高速道路を降り、山道を走り出した。
今までのような舗装された道路ではない道は、はるかたちをガタガタと揺さぶる。
目的地が近いのだろう。
ハンドルを握る長坂から緊張の色が読みとれた。
その顔色は青く、唇は完全に朱色を失っていた。
以前やっとの思いで逃げ出したところに再び向かうのだから、緊張するのも当然だ。
そう思い、彼から目を逸らそうとした時、はるかの目に彼の薄ら寒い笑みが映った。
それは一瞬の表情だった。
だが、バックミラーに映ったそれをはるかはしっかりと目撃してしまう。
はるかの背筋に冷たいものが走り抜けた。
何か得体の知れない不安が襲ってくる。

（まさか……）

今となってはとおるの遺書になってしまった手紙の『敵』という文字がはるかの脳裏によぎる。
『敵だと思ったら、迷わず殺せ』
(敵って何？　ねえ、とおる)
はるかは固く瞼を閉じた。
不安が次第に大きく膨らむ。
長坂がやって来る直前に感じた嫌な予感が再び甦ってきた。
彼に対する疑心がぶり返す。

「ねえ、長坂さん」
そんな彼に不意にはるかは言葉を掛けた。
数時間ぶりに響かせた声はわずかにかすれていた。
「な、何かな？　はるかちゃん」
不意すぎる声に驚いたのか、長坂の肩がびくりと大きく揺れた。
「長坂さんはとおると一緒に『ＧＡＩＡ』を逃げ出したのよね？」
「そうだよ」
「かなたと私を連れて……？」
「なんだい？　どうしたんだい？」

今更なぜそんなことを確認するのか分からないと、長坂はバックミラーに映ったはるかを見る。
彼の目にぼんやりと輪郭のハッキリとしないはるかの姿が映った。
ただ、黄金色の瞳だけは獣のようにギラギラと輝いている。

「私、覚えているわ。少しだけだけど」

(そう、覚えている。あの、規則的な機械音。それは絶える事が無く、永遠に続く音だと思っていた。あそこは暖かくって、心地良くって、そして、ひどく眠かった)

はるかもまた、バックミラーを睨み付けた。
「なんだって？」
ぼそりと呟くように放った言葉はどうやら長坂の耳まで届かなかったらしい。
だが、お構いなくはるかは続ける。
「あなたは私を荷物って言ったのよ。置いていこうとしたわ。とおるが私も連れて行こうとしたら、あなたはやめておけって言ったのよ」

規則正しい機械音に紛れて聞こえてきた人の声。
それははるかが持つ一番古い記憶だった。
ガタガタと車体が激しい音を立てて揺れる。
はるかの細い声はまるで長坂には届かなかった。

「初めてとおると会った時。あの時とおるは『ＧＡＩＡ』を逃げ出そうとしていたのね」
おそらく、とおるの脇には幼いかなたがいて、はるかはとおるの腕に抱かれたのだ。
「あの時、私を置いて行けと言った声は……」
はるかはもっとよく思い出そうと瞼の裏側の闇を見据えた。
「あの声は、もっと……、もっと冷たくって、とおるに対して少し苛立っていた」
はるかの瞳が開かれる。ギラリと鋭い光を放つ瞳。
「あの声は、あなたじゃなかった。あなたじゃない。とおると逃げ出したのはあなたじゃない！」

はるかの張り上げた声が闇に響き渡ったその時、キキィーとけたたましい悲鳴を上げてブレーキがかかった。
前のめりになったはるかをかなたが支え、体勢を正した二人が運

転席の方へ顔を向けると、長坂が車から降りるのが目に入った。
「待てよ」
慌てて後を追い、二人も車から出る。
と、その瞬間を見図ったように二人にいくつものスポットライトが当たった。
「何？」
その眩しさに目を細め、ライトの先を見ようとする。
が、今まで闇しか見てこなかった瞳には無理なことであった。

「ご苦労だったな、長坂」
「いえいえ、金さえ貰えれば何でもしますよ」
「そうか」
ライトの先から長坂と男の声が聞こえてきた。
必死にそちらを見ようとするが、影さえ見えない。
「礼金はこの中だ。現金で五千万」
「……確かに。では、私はこれで」
そう言って、長坂の足音が車の方に引き返して来た。
が、男の声がそれを止める。
「待て、もう一つお前に渡すものがある」
「何でしょうか？」
訝しげな声が男を振り返った。その時。
パアーン。
軽い音が辺りに響いた。
そうかと思うと、次には何か重いものが地面に沈む音が静かに響く。

「お前は少し知りすぎた」

その男の声はゾクリとするほど冷たい声だった。
その声だけで他人の心臓をえぐり取りそうな、そんな残酷な声。

はるかは、いつからだろうか、忘れていた呼吸に息苦しさを感じて、大きく空気を吸い込んだ。
「かなた」
ようやく明るさに慣れ、はるかはかなたの姿を見つけ出し、彼に駆け寄る。
（いったい何が？）
はるかが長坂を疑い始めた矢先の出来事だった。
おそらく彼は、二人を売ろうとしたのだ。
とおるの恩人だと偽って近づき、依頼主の元まで送り届けた。
（だとすると、じゃあ、この男は……）
はるかは男の影を睨み付けた。
はるかたちを買おうなどと言う人間は、当然二人がただの人間ではないということを知っている者だ。
つまり、『ＧＡＩＡ』に関係する者。

男の影はゆっくりと二人に近付いてくる。
気が付けば、その男一人ではなく、数十人の人影が二人を取り囲んでいた。
ライトに照らされているだけでも逃げられないこと決定だというのに、この人数相手では確実だろう。
二人は大人しく男が自分たちの元にたどり着くのを待った。
近付いてくると次第に男の顔がはっきりと見えてくる。
声から想像していたよりも若く、とおるより少し年上といった感じだ。
神経質っぽく、細身で、声と同様冷たそうな目をした男だった。
「あんたは？」
はるかを背に隠すようにしてかなたは男に問いかける。
「お前がＮ１０１か。施設から逃げてよくここまで育ったものだ」
だが、男はかなたを無視して、後ろにいるはるかを見下ろした。

「そっちはＮ３０６だな。Ｅ？に似たな。これなら高値で売れる」
「おいっ、てめぇ」
無視されたこと、はるかを値踏みされたことに苛立って、かなたが男に掴みかかろうとする。
だが、その体は後ろから何者かに羽交い締めにされてしまう。
「なっ！」
「かなたっ！」

その何者かに突き飛ばされ、驚いたはるかが見上げると、それはどこかかなたと似た雰囲気のある青年だった。
「いい、Ｆ１０２８。放してやれ」
表情一つ変えない男に青年は素直に返事をしてかなたを放す。
「Ｆ１０２８……ってことは、Ｅ？の子ども？」
すると、かなたとは異父兄弟だ。似たところがあってもおかしくない。
「そんなことまであの男はしゃべったのか？　やはり知りすぎていたようだな」
「とおるの子どもは私たちだけっていうのは本当？」
「そういうことになっている」
「なっている？」

答えの曖昧さにはるかが聞き返すが、返事はない。
「それでお前、何者なんだ？」
繰り返された問いに、男は今度こそ答える。
「エリア３の所長だ」
「エリア３？」
「『ＧＡＩＡ』の第３研究所だ。『ＨＥＬＥＮＥ』とも言う」

「『ＨＥＬＥＮＥ』の？　……ってことは、ここは？」
聞き返したはるかに、男は無言で少し先の方を指差した。
木々の間にうっすら明るくなった空、そして白い大きな建物が見えた。
「あそこにあるのが、エリア３。お前の本当の家だ」

13．南の伯爵

気が狂いそうな程の白。
どこを見回しても白い壁がはるかを取り囲んでいた。

あれからどのくらいの時間が経ってしまったのだろう。
窓のないこの部屋から、外の景色はもちろん、太陽の位置さえ知ることはできない。
今のところ何らかの危害を加えられることなく、はるかはこの部屋に放って置かれている。
（かなたは……・大丈夫かな？）
はるかは膝を抱えて座り込むと、その膝の間に顔を押しつけるようにして、瞼を閉じた。

エリア3の所長だと言った男は、かなたとはるかを引き離し、はるかをこの白い壁の部屋に閉じ込めたのだ。
かなたがどこへ連れて行かれたのかは、はるかには見当も付かない。
自分のようにどこかに閉じ込められているのだろうか。
それならまだいい。
同じ建物内にいるのであれば、探し出せる。再び会うことができるのだ。
だが、もし、別の研究所に連れて行かれていたら？
他の研究所の所在地など、はるかは知らない。
けれど、それならまだマシだ。
どこかの金持ちに買われてしまうより……。
はるかは男の言い放った言葉を思い出した。

（私、売られちゃうのかなぁ）

自分が物かペットのように売られてしまうことはさておき、E？に似ていると言われたことに、はるかは不思議な感覚を覚える。

とおるに似てないとよく言われるので、自分は母親似なのだろうとは思っていた。

が、実際、母親を知っている人にその通りのことを言われるとくすぐったい感じがするのだ。

これで、その後に続いた『これなら高値で売れる』という言葉がなかったら、もっと良い気分でいられただろうに。

（やっぱり、売られちゃうんだよね。私……）

売られてしまうのだと頭では分かっていても、やはり感覚的にそれがどういったものかはまだよく分かっていなかった。

長坂の言葉通りであるなら、シリーズ3であるはるかは金持ちの道楽玩具として売られることになっている。

（道楽……って？）

はるかには金持ちが考えそうな遊びなど想像もつかなかった。

（玩具っていうから、おもちゃにされるってことよね。人間がなれるおもちゃってなんだろう？　着せ替え人形とか？　もっとも私は人間じゃないらしいから……）

これから自分に起こるであろう未来を予想してみるが、どうもしっくりとこない。

今までなら明日起こりそうなことくらい大概予想できたものなのに。

そう、例えば明日は27日、自分の出席番号も3の倍数だから、授業であたるかも知れないなぁ～とか、牛乳が冷蔵庫にたくさん余

っていたから明日の晩あたりにとおるがホワイトシチューをつくるかもしれないとか……。
他愛もないことばかりだけど、ある程度予想できる明日がやってくると疑いもしなかった。
明日も今日と似た一日がやってくる。
それが退屈だ、つまらないと思う人もいるけど、はるかはそれが何よりも幸せだった。
これから自分に何が起こるか分からないというのが不安で、不安で仕方がない。

はるかは顔を上げて、再び白い壁をぼんやりと眺めた。

しばらくして、足音がはるかの耳に届いてきた。
それは徐々に近付いてくる。
そして、部屋の前までやって来ると不意に止んだ。
ついに来たのだと、はるかは人の気配がする方を睨み付けた。
きっと自分の人生を決めてしまうような知らせを運んできたのだ。
ごくりとはるかの咽が鳴る。
ガチャリと音が響き、白い壁にすうーと亀裂が走った。
そこに扉があったのだ。
ギィーと重たい悲鳴を上げて扉が開く。
この扉には廊下側にしかノブがなく、部屋の中からは開かないようになっていた。

「出ろ」
低めの声がはるかを促した。
言われるままに部屋から出ると、声の主は先程の青年だった。
「あなたは確か、Ｆ１０２８よね？」
かなたと似た雰囲気を持っているが、顔立ちはもっときれいに整っていて、体の線も細い。

美形かと言えば、そうだと言える。
ただ、男性の美ではなく、どちらかというと女性っぽい、中性的っぽい美形だ。
（男の人を美人って言うのは変だけど、美人よねぇ）
ちらりちらりと青年の横顔を盗み見しながら、案内されるままに長い廊下を進む。

「もしかして、お母さんはＥ？で、お父さんはＡ？？　Ａ？とＥ？の子供には美形が多いって聞いたけど？」
はるかの問いに青年は答える様子がなく、真っ直ぐと正面だけを見据えて目的地に足を運んでいる。
まるでロボットみたいだとはるかはため息をついた。
「シリーズ１の子はみんなそうなの？　『ＡＲＥＳ』ってとこで訓練を受けるとみんなそうなっちゃうの？　かなたもそこに連れて行かれちゃうのかな？」
不安で堪らないのと、ずっとその不安を分かって貰えそうな話し相手が欲しかったので、はるかは一人でしゃべり続けた。
「かなたっていうのは、さっき会ったでしょ？　私とここに連れてこられた男の子なんだけど……。彼が今、どこにいるか知ってる？」

はるかの口が閉ざされると、急に辺りは静まりかえってしまう。
二人の足音だけが不気味に長い廊下に響き渡る。

「どこに行くの？　私、これからどうなるの？　誰かに売られちゃうのかなぁ……」
返事の期待できない問いを放って、ついにはるかは俯いた。
不安が重たくのしかかってくる。
押し潰されそうだ。
苦しくって、辛くって、逃げ出したいのに、どこに逃げればいい

のかさえ分からない。
もとより、逃げ道などなかった。

涙が溢れそうになった時、不意にはるかの視界が陰った。
そして、軽く頭をなぜられる。
「大丈夫だ」
低めの声がやさしく頭上から降り注いだ。
「お前はE？の子どもだから……」
見上げると、今まで仮面のように無表情だった青年の顔に淡い笑みが浮かべられていた。

「どういう意味？」
「E？に特別な思い入れを持つ買い手がいる。ここでは『南の伯爵』と呼ばれている方だ」
「南の伯爵？」
ぽかんとして聞き返すと、青年はクスっと笑う。
「もちろん本当の伯爵じゃない。そう呼ばれているだけで、実際に爵位を持っているわけじゃない」
「呼ばれているだけって？」
「本名を明かせないわけがあるのさ、いろいろとな」
「いろいろって……」

アヤシイ実験に、アヤシイ商売をしているんだから、いろいろあってもおかしくないかとはるかは納得する。

「それで、その伯爵って人に買われるわけ？　私……」
「そうだ。南の伯爵はE？の子ども、特にE？と顔立ちが似ている子どもを買い求めている。ここエリア3にとって一番のお得意様だ」
「ふーん」

「伯爵の元へ行けば、お前の兄姉に大勢会えるだろさ。E？もそこにいる」
「お母さんが？」
満面の笑顔で振りかえると、青年はプッと息を吹き出した。
「何？　そんなにおかしい？」

はるかは眉をひそめて青年を睨む。
すると、彼は申し訳なさそうに片手を振った。

「いや、さすがに俗世育ちだと思ってな」
「俗世育ちってねぇ～」
「俺たちにとって血のつながりなんて、いちいち気に留めるようなことじゃないのさ。異父だの異母だの、兄姉弟妹なんて、それこそトラック１０台分くらいいる。実の母親の腹から生まれたわけじゃないし、お目にかかったことさえないね。それを家族だの、何だの言える口がどこにあるっていうんだ？」

なるほどね……とはるかは呟き、頷いた。
要するに競馬の馬のようなものだと思う。
良い競走馬を生ませようと、強い馬と種付けさせる。
他の牧場でも同じようなことをするから、ある時、レースで争う相手馬の系図を見ると、兄弟ばかりだったりするのだ。
けれど、馬にとって、特に飼い主にとっては、例え兄弟だろうと何だろうとそのレース上では敵でしかありえない。
兄弟だなんて感覚は皆無だ。
把握できないほど大勢いる場合、兄弟なんて他人と何ら変わりない存在になってしまうのだろう。

「むしろ兄弟っていうのは、やっかいなもんだな。俺たちシリーズ１や２は主たちの娯楽で戦わせられることがある。兄弟ならば、持

っている能力が似ている。似た戦い方をするから、やり難い」
「あなたは？」
「ん？」
「あなたにも主がいる？」

誰かに買われたのかとはるかが聞くと青年は首を振る。

「シリーズ１や２は全員が全員売られるわけじゃない。施設の警護をする役目を負う者もいる。俺もそうだ」
「だから、シリーズ１のあなたがここにいるのね。それで、やっぱりシリーズ３や４はみんな売られちゃう？」
「いや、借り腹に使われる者もいるな」
「借り腹？」
聞き慣れない単語に首を傾げる。
「実の母親からは生まれないと言っただろ？　代理母に生んで貰うのさ。その代理母っていうのにシリーズ３や４の奴が使われる」
「それで腹を借りるね。でも私、生まれる前、ガラスケースみたいなところに入っていた記憶があるんだけど？　あれは確かに人のお腹の中って感じじゃなかったわ」
「……」

青年は、はるかの異常な記憶力に絶句したのか、急に黙り込んで眉間に皺を寄せている。
しばらくあって、青年は重たい口を開いた。

「お前はＮシリーズか？」
「Ｎシリーズって、人じゃないＤＮＡが交じっている者のことだよね？　だとしたら、そうだけど？」
「ＮシリーズはＤＮＡ操作をするから、借り腹は使われないと聞いた。女の腹の中に似せた状態を作り出せる装置で育てられるらしい」

「それよ、きっと！ガラス張りで、中に液体が入ってるの。で、コードがいっぱい繋がってて、ピッピッピッて音がずぅーっとするの」
「信じられん、記憶力だな」

そう言って笑ったのを最後に青年は再び無表情に戻った。
どうやら目的地に着いたらしい。

「ここだ。入れ」
促されて入った部屋は、今までいた部屋と違い色のある家具のそろった部屋だった。
黒い机に茶色いソファ。どうやら応接室らしかった。
「久しぶりにカラーを見たわ」
青年だけに聞こえるような声で呟くとはるかは部屋の中央に足を踏み入れる。
だが、すぐに淡い朱色のカーテンの付いた窓際に長身の男が立っているのに気付いて、はるかは歩みを止めた。
喪服のような黒いスーツを着、足が悪いのか、杖を片手に持っている。

「誰？」
「南の伯爵だ」
「この人が？」

はるかとＦ１０２８のやり取りが聞こえたのか、彼ははるかたちに背を向けたまま、杖でソファの脇に置いてあるトランクを指した。

「それで足りるはずだが、確認してくれるか？」
「わかりました」
Ｆ１０２８は呆気にとられているはるかの脇を通り抜けると、おもむろにトランクを開けた。

中には札束がぎっしりと詰め込まれている。
「確かに」
信用しているという証しなのか、さほど調べもせずに青年はトランクを横抱きにすると、一礼した。
それから、何か言いたげな顔をするはるかを一瞥し、目だけで大丈夫だと言うと、部屋から出ていってしまった。

（えーっと、あの、大量の札束は、もしかして……）
何が大丈夫なんじゃぁいっ！と叫びたくなるのをはるかは何とか堪えた。
（自分が売り買いされる現場を生で見てしまった！しかも、なんか、さらりとやられた！って感じ）
今更ながら暴れ出す鼓動を静めようと、はるかは胸を押さえつけた。
深く呼吸し、落ち着きを取り戻すと、窓際の男に目を向けた。

「あのう……」
「長いこと外で暮らしていたそうだな」
はるかの声に被るように、男も口を開いた。
「今朝方捕らえられたばかりとか。さぞかしここは驚くことばかりだろうな」
そう言って、ゆっくりとはるかの方に振り向いた。
長い黒髪が揺れる。
それはサラリサラリと左右に揺れてから、やんわりと左目を覆い隠した。
年頃はいくつぐらいだろうか。
４０半ばほどだろうか。もっと若くも見えたが、落ち着いた雰囲気からはもう少し年輩にも感じられた。
「あなたが南の伯爵？」

「そう呼ばれているな」
「私はあなたに買われたの？」
「確かに金は払った」
「そう……」

伯爵から目を逸らし、俯くと、はるかの耳にコツンコツンという音が届いた。
しばらくして、黒光りする靴がはるかの視野に入ってきた。
顔を上げると、伯爵がはるかのすぐ傍まで歩み寄っていた。

１４．同腹の兄姉弟妹

「ついておいで」
「どこに行くの？」
「わたしの屋敷だ」

やはり足が悪いのか、杖をつきながら伯爵ははるかの脇を通り抜ける。
コツン、コツン。
不思議と耳に心地よい音が辺りに鳴り響いた。

「お母さんに会わせてくれる？」
彼が杖をついているのと反対の左側に回り込むと、はるかは上目遣いに言った。
すると、少し驚いたような表情をして、
「お前が会いたいのなら」
と、伯爵はクスリと笑う。
「あなたもやっぱりおかしいと思っているのね。私がお母さんに会いたいなんて言うの」
「そうだな。だが、お前は外で育ったからな」
伯爵ははるかを見下ろすと、瞳を曇らせた。
「あまり期待してはいけないよ」
「わかってる」

Ｆ１０２８の話からして、Ｅ？にも家族意識は期待できない。
はるかを自分の娘だとは思ってくれないかも知れない。
娘だと認めてくれたとしても、そんなもの大勢いるのだ。
はるかの思い描く母親像を彼女に期待することはできない。

研究所から出ると、外に黒光りする車が彼を待っていた。
このまま伯爵の屋敷に連れて行かれるのだと思うと、かなたのことが気になり始めた。
自分はどうやら買い手がついたらしいが、かなたはどうなったのだろうか。
「かなたは？　ねぇ、伯爵、かなたは？」
「かなた？」
彼は眉をひそめた。
「私の『兄』なの。お母さんは違うらしいんだけど。ここに一緒に連れてこられたはずよ」
「異母兄ってことは、Ａ？の子か。確かＮ１０１だな」
「そう」
何か知っているかもという期待に輝かせた瞳を向けると、伯爵は申し訳なさそうに首を横に振った。
「残念だが、わたしが知っているのは君がここに捕らえられたってことだけだ」
「私、かなたをおいて行けない」
車の中に入ることを躊躇うはるかに、伯爵は小さくため息をついた。
「Ｎ１０１のことはわたしの部下に調べさせよう」
「本当に？」
「ああ。だから、何かわかるまでわたしの屋敷で待ちなさい」
「うん」
今度は促されるままにはるかは車に乗り込んだ。
車はゆっくりと走り出す。

白い壁の研究所はしだいに遠ざかり、小さく小さくなっていった。

▽▲

いったい日本のどこにこんなバカでかいお屋敷が隠されていたのだろうかと、はるかは言葉を失った。

人丈の4倍はあるだろう門が車を察して左右に開く。

すると、だだっ広い庭園があり、その奥の方に屋敷が堂々とたたずんでいるのだ。

はるかは、伯爵の後について、屋敷の中に足を踏み入れた。

「ここ、本当に日本？」

所在地を疑いたくなるような洋風な造りに、はるかはぼやく。

「ヨーロッパの宮殿みたいね」

「気に入ったか？」
「落ち着かないわ」

肩をすくめて両手を広げてみせると、伯爵はクスクスと笑った。
そうして、不意に立ち止まり、はるかに振り返った。
じっと顔を見つめられて、くすぐったいような気がしたが、
なんとなく目を逸らすことができなくて、しばらく二人で見つめ合う。
先に目を逸らしたのは伯爵の方だった。

「お前は美沙によく似ている」
「みさ？」
「E？の名だ」
「美沙っていうの？」
「そうだ。覚えておいで」
そう言って、伯爵ははるかの頭を軽く叩き、再び歩み出した。
「まず美沙に会わせてやろう」
「うん」

はるかは素直に頷いて伯爵の横顔を見上げた。
すると、どうしたわけか、伯爵は悲しそうな表情をしているように、はるかには見えた。
そういえば、さっきもE？の話が出た時、彼の瞳は曇っていた。
今にも雨が降ってきそうな程に。
何か言葉をかけようかと思い悩んでいると、駆け寄ってくる足音が聞こえてきた。

「伯爵」
それはどこかで聞き覚えのある声だった。
「隆史か。遅かったな」

「すみません。俺のせいで伯爵にお手数をかけてしまいました」
「いや、いい。お前はよくやってくれたよ」
伯爵と親しげに話す青年を見て、はるかは唖然とする。
どこかで見た顔などと言うどころではなかった。
その青年は、とおるが運ばれた病院で会った、小杉とかいう刑事だったのだ。
「なんでここに小杉さんが？」
どんな表情をして良いのかさえ分からなくなっているはるかに、二人は顔を見合わせて笑った。
「隆史はＦ２０３１。親はＥ？とＡ？だ。つまりお前の異父兄弟だよ」
「えーーーっ！」
信じられないとばかりに大声を上げる。
「だって、なんか、悪人っぽかったのに！」
刑事という役職上仕方がないとは言え、初対面で質問攻めにされたため、はるかにとっていい印象ではなかったのだ。
「悪人って……ひどいなぁ。まあ、そういうわけだから、これからは仲良くしようね。はるかちゃん」
にこっと人の良さそうな笑みを浮かべる小杉に、はるかは思わず後ずさりをする。
笑顔の奥底の恐ろしいものを直感的に感じ取ってしまったようだ。
「伯爵はずっと君のことを捜していたんだよ」
「ずっと？」
「そう、１５年間ね。君が『ＧＡＩＡ』から逃げ出してからずっと。外の世界で幸せに暮らせているのなら、それでいい。けれどもし、『ＧＡＩＡ』や君のことを知る人物に捕らえられてはいけないと思

ってね。数ヶ月前、模擬試験を受けただろう？」
「ああ、あの出来過ぎちゃったテストね」
うんざりだという風にはるかは頷いた。
「あれで『ＧＡＩＡ』に見つかったと思った伯爵は俺にすぐに君を見つけるようにと命じたのさ。けれど、全てが後手に回ってしまってね。『ＧＡＩＡ』の方が先に君とＡ？の家を見つけてしまうし、Ａ？と接触してしまうし。もっとも『ＧＡＩＡ』の目的は君よりＡ？の方にあったんだけどね」

はるかは長坂から聞いた話を思い出した。
『ＧＡＩＡ』が送り込んできた兵士をとおるは撃退したけど、そこで力尽きてしまい、病院に運ばれたのだ。

「火事のことを知って、まさかと思い、病院に行ったら、案の定、運ばれたのはＡ？で、すでに死体はなかった」
「ホント、やることなすこと遅いわね」
呆れたように言ってやると、少し離れたところから伯爵の忍び笑いが聞こえ、小杉は肩をすくめた。
「せめて君だけでもと思ったんだけど、かなた君には拒絶されるは、尾行は撒かれるわで、散々だったよ」
「あの尾行、あなただったの？」

病院から二人が乗るバイクを付け回していた灰色の車のことだ。
今度は本気で呆れて、ため息をつく。

「しかも、その後、Ａ？の経営する店を見つけてみれば、すでに君たちの姿はない」
「でも、かなたが住所を教えていたじゃない？　もっと早く来れなかったの？」
小杉はゆっくりと首を横に振った。

「彼が素直に本当の住所を教えているとでも思ったかい？　の、得体の知れない刑事に！」
「嘘の住所だったの？」
そういえば、かなたも小杉には良い印象を持っていなかったようだ。
なんだか小杉が哀れになってきて、はるかは笑みを浮かべる。
「君らはまんまと『ＧＡＩＡ』の放った者の手にかかって、エリア３に連れて行かれてしまうし……。抜け殻になった家を見て、俺が何を思ったか、君に分かるかい？　かげで伯爵の手を煩わせることになってしまったじゃないか」

確かに初めから小杉の言う通りにしておけば、はるかはもっと早く伯爵の元にやってこれたし、伯爵も『ＧＡＩＡ』に多額の金を払わずに済んだ。
かなただって、捕まることにはならなかったはずだ。
だが、はるかにだって、かなたにだって、事態をきちんと把握できずにいたのだ。
今更済んでしまったことをとやかく言われては堪らない。
何か言い返そうとはるかが口を開きかけた時、甘いようなすっぱいような、柑橘系の良い香りがどこからか漂ってきた。
「隆史、あなたのやり方が悪かったのよ」
くすくすっと鈴の音のような笑い声が聞こえてきた。
まさかっと思って振りかえると、そこには柔らかな物腰の女性が佇んでいた。
（まさか、この人が……）

白い肌。
艶のある髪は明るい茶色で、ふんわりと腰まで伸びている。
すらりとした手足。
線の細い身体。
その場の空気に溶け込んでしまうような儚い雰囲気を持った女性だ。

じっと見つめすぎたのか、その女性ははるかの視線に気付き、にこりっと微笑んだ。
だが、すぐに顔を曇らせ、
「ごめんなさいね。私じゃないのよ」
と、謝る。
「え？」
何を謝られたのか分からず、聞き返すはるかに彼女は再び微笑んだ。
「私もシリーズ３なの」
「シリーズ３はＥＳＰに優れた能力者だ」
「つまり、透視、予知、テレパシーね」
そう言って、ふふっと笑いをこぼす。
「あなたは能力が強いのね。私が読もうとしていないのに、あなたの心が私の心に流れてくるわ」
「じゃあ、さっきの……」

はるかの顔が赤らむ。
自分が考えていることが他人に伝わってしまったのだ。

「小杉さんにも聞こえたの？」
「隆史でいい。小杉は偽名だ」
やはり伝わってしまったのだろう。彼は否定しなかった。
「俺もＥ？の子だからな。多少はＥＳＰが使える」

「そういえば、かなたも言葉にしていないはず私の声を聞いたと言っていた」
「A？はどの能力もずば抜けていたから、その子どもである彼がESPに優れていてもおかしくないだろうさ。もっとも彼が一番得意とする能力はPARだと思うがな」

PARは意識的に運動能力を高めることのできるの力だ。

「私もPAR使える？」
「もちろん、君はA？の娘だからね」
「ふーん」
はるかは低く鼻をならすと、もしかしてE？なのではと思った女性に振りかえる。
「それであなたは？」
「F302。E？とA？の娘よ。美奈子さん、もしくはお姉さまって呼んで」
「お姉さま？　自ら『様』付けを要求してるし……」
「何かおっしゃった？」
「いえいえ、おねぇ～さま。お前何様だよ……だなんて、一言も言っておりません」
「ふふっ。『おねぇ～さま！』に決まってるじゃない。や～ね、聞いてくれれば、そう答えてあげるのに」

たぶん、彼は一生かかっても、この姉には勝てないだろう。
そう思わせる二人のやり取りに、はるかは思わず笑みがこぼれる。

「そうか、二人は同じ両親の姉弟なのね」
「あら、そう言われてみれば、そうね」
「ホント……」

はるかに言われて、たった今気が付いたように二人はお互いの顔を見合わせるので、
はるかは余計に笑い声を上げた。
そこでようやく、それまで黙って3人を見守っていた伯爵が口を開いた。

「お互いの自己紹介はそれくらいでいいだろう？　たしはこの子を美沙と会わせてやらねばならない」
「E？と？　でも……」
「彼女は知っているんですか？　その……」
伯爵の言葉に二人とも戸惑いの色を見せる。
「何も知らないでE？に会うのは、衝撃が強すぎるのでは？」
はるかはわけが分からないと3人の顔を代わる代わる見上げた。
「何？　どういうこと？」
「会えば分かることだ」

美奈子と隆史の言葉を遮り、伯爵ははるかの頭をなぜると、歩みを促せた。

「自分の目で確かめるといい。『ＧＡＩＡ』の力のすさまじさを」

１５．地下室

一段、また一段と階段を降りていく。
その都度、体感温度までもがつられるように下がっていった。
はるかは剥き出しになった腕をさする。
そこでようやく自分の服装に気が付いた。
半袖のシャツに、下着が透けて見えるのを隠すチョッキ。
生地の薄いスカート。短い白い靴下、焦げ茶のローハー。

はるかは、はあっと白い息を吐き出した。

校内放送で呼び出されてから、病院へ行き、喫茶店、『ＨＥＬＥＮＥ』、そして、ここに連れてこられるまで、ずっと高校の制服を着ていたのだ。
しかも、先月末に衣替えをしたため、夏服である。

「ねえ」
三階分ほど降りたところで、はるかは凍える声を上げた。
湿った感じのあるコンクリートの壁がその音を低く反響させる。
「もうすぐ着く」
伯爵は、はるかの言いたい事など分かっているというように短く答えた。
そして、その言葉通りに、階段が途切れ、扉が現れた。
重たい扉だった。まるで倉庫か何かのような、頑丈な扉だ。
目だけの指示を受けた隆史がその扉を開いた。
すると、一瞬の間をあけて、白い冷気が中から溢れ出てくる。

（！）

思わず目を閉じる。
（なんで、こんなに、寒いの？）
確か自分はE？に会わせて貰うためにここまで来たはずだった。
それが、なぜ、こんな地下倉庫みたいなところに連れて来られてしまったのだろう。
騙されたのかと思い、伯爵を振り返ると、そんなはるかの瞳に狼狽える様子もなく、彼は中に入るようにと促した。
すでに中に入っている隆史や美奈子を見て、はるかも足を踏み入れるが、予想通りに中は冷蔵庫並みに寒い。
いや、それ以上の寒さだ。
自分で自分を抱き締めるようにしていると、ふわりと何かが被さってきた。
はるかは驚いてそれを見る。そして、それを被せた人物を仰ぎ見た。

「着なさい」
「でも」
それは、伯爵がつい先程まで身に着けていた上着だった。
慌てて脱ごうとしたはるかを美奈子が制する。
「いいのよ、着ていて」
「でも……」
「伯爵は、中には入らないから」
「え？」
振りかえると、彼も黙って頷く。
「どうして？」
「いいから、いらっしゃい」

はるかの問いに答えようとせずに、美奈子ははるかを急かした。
はるかが中に入ったのを確認して、扉が閉められる。

と、同時に、うすぼんやりとした明かりがつく。
赤みがかった、どこか不安にさせる明るさがはるかを包んだ。
その明るさにようやく慣れると、はるかの目に奇妙な物が飛び込んできた。
それは縦に長い水槽のようだった。
（なんだろう？）
はるかの視線がそれに釘付けになっているのに気付き、隆史はゆっくりとそれに歩み寄った。

「これか？」
頷き、はるかもそれに近付く。
水槽の中を覗き込むと、ヒトの胎児のようなモノが見えた。
だが、明らかにヒトの胎児とは違う塊。
胴よりも3倍大きい頭部。やけに短い手足。　青みがかった緑色の肌。
ハ虫類のような尾、それも3本も生えている。
「これは？」
「Ｆ３０１だ」
「Ｆ３０１？」
では、これも自分の兄姉なのかと、はるかは再びソレに見入った。
そんなはるかの隣に美奈子も並び、陰った瞳を向けた。
「Ｆ３０１はＥ？とＡ？の子どもよ」
「とおるの？」
「そう」
自分の同父兄妹だと聞いて、はるかは目を見開く。
「だって、とおるの子どもは私とかなたしかいないって……」
確かにそう聞いたはずだ。
はるかの顔があまりにも驚きを露わにしていたのだろう。美奈子は苦笑した。
「たしかに、Ａ？の子どもはあなたたちだけよ。とりあえず、生存

しているのはね」
「どういうこと？」
「みんな死んだってことだ」
「死んだ？」
吐き捨てるように短く言い放った隆史に、聞き返しながら振りかえる。
「Ａ？は飛び抜けて強い力を持っている。だから、『ＧＡＩＡ』は何よりもＡ？の子どもが欲しいのさ。だから、大量に造る。そして、大量に死んだ」

はるかは長坂に聞いた話を思い出した。
とおるは幼い頃からさまざまな実験を繰り返しさせられていて、その中には薬物を使ったものがあり、
そのせいで、遺伝子上に異常を起こしてしまったのだとか。

「Ｆ３０１は、Ａ？の遺伝的異常を見抜けずに、子どもを何とか造ろうと躍起になっていたころに造られた、要するに失敗作だ」
「けど、前の二作に比べれば成功に近かったのよ。４年ほど生きたから」
「前の二作？」
「Ｆシリーズの第一作目はＡ？とＥ？の子どものＦ１０１、二作目はＡ？とＥ？の子どものＦ１０２だ」
「そして、三作目が彼、Ｆ３０１よ」
「前の二作は受精卵で死んだからな。Ｆ３０１はそのまま成功作になるかと思われていた。が、ナリがこれだ。４年も生きられたのが不思議なくらいだ」

隆史と美奈子が互いに付け加えながら説明してくれる。

「四作目は、Ａ？とＥ？の子どもでＦ１０４よ。これも失敗。そし

て、五作目。ついにFシリーズの成功作が生まれたの」
「けど、A?の子どもじゃない。A?とE?の子どもだ」
「六作目はA?とE?の子どもで、F202。彼女の事はよく覚えているわ。私は彼女の数日後に誕生して、しばらく彼女と一緒に育てられたから」
「美奈子は七作目のFシリーズなのさ」

隆史の言葉に、はるかは頷いた。確か、美奈子はA?とE?の子どもで、F302だ。
美奈子は懐かしむような瞳をさせて、ゆっくりと言葉を声に換えていく。

「5つになろうとしていた頃だったわ。二人でカードを使った訓練を受けていたの。カードをめくる彼女の手が突然止まったのよ。不思議に思って彼女を見たら、燃えていたわ」
「燃えていた?」
首を傾げると、言葉通りよと美奈子は小さく笑う。
「人体自然発火とでも言うのかしら? 近くに火元なんてなかったのよ。それが突然、人が燃えだしてしまうんですもの」
「突然? 燃えた?」
そんなことがあるのだろうか?と、ますます首を傾げたくなる。
「ほんの数分のことだったわ。気が付いたら、彼女の足だけがコロンってね、転がっていたの」

それ以上話したくないと、美奈子は目を逸らした。
しばらくの沈黙後、ポツリポツリと隆史が言葉を放った。

「A?の子どもは造るまでが大変。それ以外の子どもは造った後が問題なのさ。突然燃えたっていうのはF202だけの話じゃない。俺も何人か見た。自分の力を扱い切れないんだろうな。気が狂って

しまう奴も多かった。不意に倒れたかと思えば、目や耳、口から血を吹き出して死んでいた……なんて日常茶飯事だったからな」
そう言うと、隆史は片手を持ち上げた。
その指の先に目をやる。
すると、一つ、二つではない、幾つもの水槽がはるかの目に映り込んできた。
「まさか、これ全部……」

水槽の大きさは様々だった。
よく普通の家庭で、熱帯魚とかを飼うような水槽もあれば、水族館にあるような天井まで届く大きな水槽もあった。
形も様々で、四角いばかりではない。円柱のもの。凹レンズのようになっているものもあった。
それは、中に入っているモノの大きさが様々で、その形もそれぞれに異なっているからなのだろう。
ヒトらしいナリをしているものがほとんどだったが、Ｆ３０１のような奇形も少なくない。
はるかは水槽一つ一つ歩み寄って、その中を覗き込んで回った。

「全て伯爵が買い取ったＥ？の子どもたちだ」
「伯爵が買い取った？」
聞き捨てならない言葉に隆史を振り返ると、彼は無表情の仮面を付けて言葉を続けた。
「伯爵が買わなければ、こいつら全員、ゴミ箱行きだった」
「こいつら？」
今まで、『作品』だの言って、物扱いをしていた彼が、『こいつら』と生き物扱いをしたことを不思議に思って聞き返すと、隆史はわずかに肩をすくめてみせた。
「生きてる」
「生きてる？」

「死んでいるのもいるが、そいつとそいつ、あっちのも……」
と、言って幾つかの水槽を指した。
駆け寄って見ると、死んでいると言われたのと比べ、こちらの水槽は生暖かい。
それに細かい空気の粒が下から上に移動していた。
ゴーーーという機械音。
よくよく見ると、細い管が彼らの身体のあちらこちらに繋がっていた。

「生きているんだぁ」

ほっとしてような、感心したような、曖昧な声を上げると、それに答えるかのように水槽の中の住人が、ふっと瞼を開いた。
驚いたことに、開かれた眼は４つあった。

「その子はＮシリーズよ」
「Ｎシリーズ。私と一緒？」
「そう、Ｎ３０７。確か、あなたはＮ３０６だったわね」
美奈子は、はるかと同じように水槽の中を覗き込んだ。
「うん、そう言われた」
「Ｎ３０７はね。Ｅ？とＡ？の子供で、魚のＤＮＡが混ざっているの」
「魚？」
「人魚を造ろうとしたらしい」
呆れたように言うと、隆史も水槽を覗き込んだ。
「こいつは失敗したが、Ｎ３０８は『ＧＡＩＡ』の思惑通りの人魚になった」
「Ｎ３０８は人魚なの？」

人魚など童話や神話の世界だけの存在だと思っていたはるかは興

味津々の瞳を彼に返した。

すると、隆史はクスリと笑って、

「はるかちゃんの期待通りの人魚じゃないと思うよ」

と言う。

「晴海っていう」

「はるみ？」

「８才の生意気なガキだ」

相当苦労させられているのか、それだけ言うのにひどく疲労したように、ため息をついた。

「あら、私には素直なかわいい子よ」

「俺には凶悪なガキだよ。この間も食事を持っていったら、『こんなまずいもの食べられないわ。あたし、ケーキが食べたいの。持ってきてくれない？　３０秒以内に！』って、魚介類しか食べられないくせして……」

その時の怒りを思い出したのか、両手を握り締めて小刻みに震える隆史。

「苦労してるね……」

「要領が悪いだけよ」

哀れみの目を向けると、隆史はすぐにその視線に気付き、情けなく笑った。

そして、再び水槽に目を戻すと、コツンとガラスを叩いた。

16．母

「こいつは鳴海。人魚のできそこないを半魚人と言うのならば、こいつがそうだ。全身、鱗に包まれ、えらを持っている」
「えら呼吸しているの？」

生物の授業で習った、肺呼吸とえら呼吸を思い出す。
陸地に住む生物は肺呼吸をしているものがほとんどだが、魚類など水中の生物はえらを使って、水中に溶け込んだ酸素を利用して呼吸しているのだ。

「晴海は？」
「あいつは肺呼吸。イルカや鯨なんかと同じ」
「ふーん」
「鳴海もね、日光を苦手としていなければ、晴海と同じ水槽に入れられたんだけどね」
「光がだめなの？」
「強い光はね。目が弱いらしいの。ほとんど見えてないみたいだし」
「４つもあるのに？」
「だからじゃないのか？」
なるほどと、はるかは頷いた。

それから幾つかの水槽に挨拶をして回り、徐々に奥の方へと足を踏み入れていった。
ふいに隆史と美奈子の足が止まった。
どうしたのだろうかと思い、二人の見つめる先に目を向けると、重たく、頑丈そうな扉が３人の前に立ち塞がっていた。
「この奥よ」

「この奥？」
「美沙がいる」
「お母さんが？」
ごくりと咽が鳴った。
ついに自分の母親と会うのだ。そう思うだけで胸が騒がしく鳴り響く。
意を決して扉に手を掛ける。

（この扉の向こうに私のお母さんがいる）

どんな人だろう？
やさしい？
きれい？
私のこと、どう思ってくれるだろうか？
まるで、この扉を開けることで、自分自身の正体を知ってしまうかのような気持ちだった。

金属が掠れる高い悲鳴を上げて、扉はゆっくりと開いた。
白い冷気がはるかを襲う。
思わず目を閉じたはるかは、ブルっと身震いをして、そっと目を開いた。

「……お母さん？」

扉の奥の部屋はそれほど広い部屋ではなかった。
むしろ狭く、扉さえ開ければ、部屋全体を見渡せるほどだ。
はるかはその人に歩み寄った。
他に人影はなく、その人がはるかの母親であることを示していた。
だが、はるかは自分の目が信じられなかった。
その人の頬に触れようと、はるかは手を伸ばした。だが、その手

は触れることなく、空に漂う。
やり場の無くなった手を握り締めて、はるかはその場に膝を折った。

「そんな……」

期待なんてしてなかった。
するなって言われたし、もとより自分に母親がいるとは考えていなかった。
とおるさえいればいいと、そう思っていた。
それでも、どこか、期待していたのかもしれない。アニメや漫画、テレビドラマみたいな母子の再会を。

真っ白になった長い髪。
手足は枝のように細い。
頬骨の出た顔はきれいとは言い難かった。
薄く開いた瞼から白濁した瞳が伺え、唇は紫色、肌は白というより、青に近い。
その姿の全てが、彼女が生きていること否定していた。
そして、何よりはるかの瞳を潤ませたものは、彼女と自分を隔てている氷の壁だ。
分厚い氷の壁は、触れることさえ許してくれない。
美奈子の手がそっとはるかの肩に置かれた。

「『ＧＡＩＡ』よ。彼らが美沙をこうしたの」
「なぜ？」
彼女に向けても仕方がない。
そう分かっているのに、はるかの負の感情は美奈子に食いかかった。
金色の瞳が獣のように光る。

『ＧＡＩＡ』は美沙の死体をきれいなままに保管したかったのよ。だから、凍りづけにしたの。死体でも、きれいであれば買い手がつくから」
「買い手？」

伯爵だと、はるかはすぐに察した。
エリア３にとって一番のお得意様だという南の伯爵。
Ｆ１０２８の話によると、伯爵はＥ？に特別な想いを寄せていて、その子どもたちを買い集めているのだとか。

（特別な想いって？）
「恋愛感情よ」
心の中で浮かんだ疑問に即答されて、はるかは顔を赤くする。
「あなたたちの前では隠し事はもちろん、思い悩む事もできないわ」
「ふふっ。そんなの今だけのことよ。心に壁を作ることを覚えたら、いくら私たちでも読むことができなくなるわ。もっとも、あなたの場合、こちらが読もうとも思っていないのに、あなたの方からあなたの考えていることが伝わってくるのだけどね」
「心に壁を作るって？」
「後で教えてあげるわ。これも『ＧＡＩＡ』にいた時に受けた訓練の一つなんだけど」

はるかがこくりと頷いたのを確認して、美奈子は話を続けた。

「伯爵と美沙が初めて出会ったのは、３０年近く前のことよ。当時、伯爵は６歳の少年。……ふふっ。あの、伯爵が６歳だなんて、想像できないわね」
「美奈子」
隆史に咎められて美奈子は肩をすくめた。
「伯爵は、大企業の社長の一人息子だったんですって。つまりお金

持ちのお坊ちゃん。と言っても、当時よりも伯爵の代になった今の方が資産は多いのだけどね」

この、バカでかい家の外観を思い出しながら、はるかは頷く。

「伯爵のお母様っていう人が、やさしいのだか自己満足なのだか、とにかくボランティア誠意心満載な方でね。伯爵を連れて、よく孤児院を訪問していたらしいの」

「孤児院」

「そこで出会ったのが、美沙。当時、伯爵と同じ年の６歳だったそうよ」

二人の恋はそこから始まったのだと美奈子は言った。

それは、初め、ままごとのような恋愛だったのかもしれない。

子どもらしく、ほんのりと甘い、淡く儚い想いだった。

それを、全てを打ち砕いてしまったのは、『ＧＡＩＡ』だ。

「それまでと同じように孤児院を訪れた伯爵は、ある日、美沙がいなくなったことを知ったの。誰に訊いても美沙の行き先は分からず、８年の月日が流れたわ。美沙が『ＧＡＩＡ』にいると知った伯爵はすぐに彼女を迎えに行こうとしたの。けど、当時の伯爵は１４の子ども。『ＧＡＩＡ』が相手にしてくれるはずがなかったわ」

「だが、あいつらは知っていたのさ。伯爵が指折りの企業の社長息子だってことを。その当時はともかく、後に自分たちにとって良い客になると読んだんだ」

「そう、だから、『ＧＡＩＡ』は伯爵を邪険に追い払うようなことはしなかったわ。美沙を売らない代わりに、他のモノを売ったの。それが私よ。その時、私は４歳だったわ。Ｆ２０２が死んだ後のことよ」

はるかは息を詰まらせた。
伯爵は美奈子を見て、なんと思っただろう？
自分が想いを寄せる人の子どもを見て、なんと思ったのだろうか？

「その後、伯爵が美沙を買い取りに行く度に『ＧＡＩＡ』は、次々に製造した美沙の子どもたちを伯爵に売りつけたのよ。そうして伯爵は悟ったわ。美沙を買い取るには、財力はもちろん、それ相応の権力も必要だと。１０代後半で自らの会社を建て、お父様の死後、その会社も引き継ぎ、あらゆる方面に力を伸ばしていったの」
「伯爵は、政治家は言うまでもなく、警察、弁護士、医者と、様々なところで顔が利くお人だ」
「だから、隆史は刑事になりすましていたのね」
「そういうこと。昨日一日の刑事だが、あの警察手帳は本物なんだぞ」
「本物っていうと語弊があるわね。偽名なわけだし」
「そうだよね」
「いいんだよ、細かいところは」

眉間に皺を寄せた隆史に二人は顔を見合わせて笑う。

「それで？　ついにお母さんを迎えに行けたのよね？」
話を進めるように促すと、美奈子は顔を曇らせた。
「ええ。それから更に十数年後。よく覚えているわ。私は１８歳だったんですもの。伯爵に連れられて『ＧＡＩＡ』に行ったわ。ついに美沙を買い取るだけの財力と権力を伯爵は手にしたのよ。その力を『ＧＡＩＡ』も認めて、美沙を売ることを承諾したの。けど……」
「けど、美沙は、その時すでにこの状態だったんだっ」

言葉に詰まった美奈子の代わりに隆史が吐き捨てるように言い、

凍り付けの彼女を指し示した。

「後から分かった事だが、美沙が死んだのは伯爵が買い取った時よりも１３年も前。つまり、伯爵が美沙の居場所を知って、『ＧＡＩＡ』に初めて乗り込んだ時から、一年後に美沙は死んでいるんだ」

「それじゃあ、『ＧＡＩＡ』は１３年間もお母さんが死んだことを伯爵に黙っていたの？　伯爵はお母さんが生きているって信じて、１３年間も……」

目頭が熱くなる。

「忘れるわけがない。あいつら『そぉれ、感動のご対面だ。』って、笑って扉を開けたわ。伯爵と私はその扉が開くのを黙って待っていたの。扉の向こう側に美沙がいる。伯爵にとっては２１年ぶりの再会、私にとっては初対面。もしかしたら、黙っていたのではなくて、声も何も出せないほど緊張していたのかもしれないわね」

美奈子は自虐的に、ふふっと笑った。

「扉が開いたわ。突き刺さるような冷たい風が私たちを襲ったの。やっとの思いで目を開くと、そこに美沙がいたわ。私よりも幼い姿の美沙。ガリガリで痩せっぽち。なのに、髪は老婆のように白く、指は筋張っているの」

目を閉じると、美奈子が話している状景が見えてくる。

まるでその場にいたかのように、はっきりと。

先程のはるかと同じように膝を折る伯爵。

そこから数歩後ろに立ち尽くす美奈子。

笑い声が聞こえる。バカにしたような笑いだ。

嘲るような、見下したような笑い。

振りかえると、白い白衣を着た男たちがクスクスと忍び笑いを漏らしていた。

耐えきれず、はるかは瞼を開いた。
と、同時に熱いものが頬を伝い、ポタリと音を立てて落っこちた。
ぼやけた世界に自分と同じ年で死んだ母親の姿が見えた。

「その後、伯爵はよりいっそう美沙の子どもを買い求めるようになったんだ。救えなかった彼女の代わりに、せめて彼女の子どもだけでも救おうと」
「それが、『ＧＡＩＡ』の思惑通りになってしまうことだって分かっているの。けれど、仕方ないじゃない。他にどうしろと言うの？
伯爵は言ったわ。時々、分からなくなるって。美沙を愛しているのか、憎んでいるのか、分からなくなる時があるって」

本当は幼い初恋で終わるはずだった二人の出会い。
だが、それは『ＧＡＩＡ』に持たされた急すぎる別れによって、３０年近くも縛り付ける苦しみの想いに変わってしまった。
彼女に恋した伯爵は、彼女を愛したが故に彼女に苦しめられるのだ。

「はるか、立って。ここは寒いわ」
泣きじゃくるはるかの肩を抱いて、美奈子は立つように促した。
されるままに立ち上がると、はるかはふと気付いた。
「でも、お母さんが死んでしまっているのだから、お母さんの子どもも限りがあるでしょ？　全員を買い取ったら、伯爵は『ＧＡＩＡ』から開放されるんじゃない？」

Ａ？であるとおるを除いた第一世代と呼ばれる者たちの子どもは、半ば機械生産のように年に十数人の割合で造られているという。
だが、Ｅ？である美沙は死んでいるのだ。
その子どもを造ろうにも死んでしまっては造りようがない。

そう思ったはるかだったが、すぐにその考えを、美奈子に首を横に振ることで否定されてしまう。

「『ＧＡＩＡ』には美沙のＤＮＡサンプルがあるの。それだけじゃないわ。卵巣よ。美沙の体から卵巣を抜き取って保管しているの」

「さらに面倒なことに、『ＧＡＩＡ』にはクローン技術がある。特に、部分を造ることにかけては一流と言える。ＤＮＡサンプルをもとに卵巣だけを造り出し、そこから好きなだけ卵子を取り出すことだって可能なんだ」

「ひどい」

「そうこう言う俺も。はるかちゃん、君も、そうやって美沙の死後に造られた子どもだ」

「死後に？」

はるかはもう一度、同い年で時間が止まってしまった母親を振り返った。

目眩がした。

自分は母親に存在さえ知られていない子どもだったのか。

死後に生まれた子。

それは、はるかに強い衝撃と暗闇をもたらした。

17．美の女神

気が付くとはるかはベッドの上にいた。
どうやら、あのまま気を失ってしまったらしい。
慌てて身を起こし、辺りを見回した。

（なに、ここ？）

そう思うのも仕方がない。学校の教室2つ分ほどある部屋の中央に、普通の4倍ある大きさのベッドがボンッと置いてあり、その上に自分が寝ていたのだから。
とにかくベッドから降りて、部屋の外に向かって歩いてみる。
扉はいくつかあるが、片っ端から開ければ、どれか一つぐらい見知った廊下に出るだろう。
そんなことを思っていると、不意に目指していた扉が開いた。

「起きたの？」
ほっとしたような表情を覗かせたのは美奈子だった。
「うん、さっき。……ここ、どこ？」
眉をひそませて聞くと、美奈子は笑った。
「あなたの部屋よ」
「え？」
「伯爵はあなたの誕生を知ってすぐこの部屋を用意したの。あなたをここに迎えるために」
「伯爵が？」
「必要な物があったら、何でもねだると良いわ。大抵のことはかなえてくれるから」
「でも、私……」

「ここで暮らすのは嫌？」
はるかが言い淀んだ言葉を美奈子がさらりと口にしてしまう。
「嫌って言うか、そうじゃなくて、……ううん、やっぱり、嫌なのかも。でも、私、一人じゃ生きられないし、ここで生きていくしかないんだと思う。けど……」
「けど？」

はるかの脳裏にとおるの姿が浮かぶ。
似合わないエプロン姿。
完全に趣味に入った服をはるかに着させようと企むとおる。
仕方がない奴だと笑いかけてくるとおる。
記憶の中の様々なとおるが次々に思い浮かぶ。

「もう二度と、とおるとは暮らせないの？」
「A？に会いたい？」
「会いたい。だって、今まで私には、とおるしかいなかったんだもん。とおるが全てだった。それなのに……。急にとおるを取り上げないで！」
叫び放った声は部屋中に響き渡った。
美奈子は呆れたようにため息をついた。
「たぶんA？はエリア1に連れて行かれたんだと思うわ」
「エリア1って『ARES』のこと？」

はるかは顔色を失った。
長坂の話によると、そこはシリーズ1の子どもたちを造る第一研究所であり、『GAIA』の本拠地でもある。
他のどこの研究所よりも警備が厳重で、そこに連れて行かれたのなら諦めるしかないだろうと言われていた。
よろけたはるかの身体を美奈子が支える。

「これからどうするのか、ゆっくりでいいわ。よく考えなさい。……それより、会わせたい人がいるの。来てくれるかしら？」
逆らう気力もないので頷くと、美奈子は、にこりと笑ってはるかに背中を見せた。
その背中をはるかは追う。
「会わせたい人って？」
「Ｆ３０３。私のすぐ下の妹よ」

親や兄姉姉妹を大切に想うはるかに合わせて『妹』と言ったものの、それが我ながらおかしかったようで、美奈子は、うふふっと笑い声を漏らした。

「朱美といって、Ｅ？とＡ？の子どもなの。朱美には『ＧＡＩＡ』にいた頃、別の呼び名があったのよ」
「呼び名？」
「そもそも私たちの『美奈子』だの『隆史』だのっていう名前は、伯爵に買い取られてから、伯爵に付けてもらったものなの。『ＧＡＩＡ』ではコード番号で呼ばれるからね。名前なんて必要ないのよ。悲しいことに『名無しさん』だったわけね。けれど、ごく偶にＡ？レベルの優秀な能力者が生まれることがあるの。そんな子には特別に呼び名が与えられるのよ」
「じゃあ、Ｆ３０３は優秀な能力者なのね」
「Ａ？には及ばないけれど、あなたと同じくらいじゃないかしら？
でも、あなたは訓練を受けていないから、分からないわね。潜在能力はもしかしたら、あなたの方が高いかもしれないわ」
なんと言ってもＡ？の娘なのだからと美奈子は続けた。

▽▲

しばらく歩いてようやく美奈子の足が止まった。
コンコンと軽く扉を叩くと、返事も聞かずにその扉を開いた。
と、ほぼ同時に部屋の中から、細いきれいな声が聞こえてくる。

「相変わらず元気そうね、美奈子」
「あら、あなたもね。邪魔するわよ」
つかつかと中にはいると、くるりと振り返ってはるかを招く。
「この子がＡ？の子どもよ。Ｎ３０６」
「はるかちゃんでしょ？　知っているわ」
知っていると言われて、はるかは眉をひそめた。すると、彼女はクスクスと笑う。
さすがに姉妹、美奈子と笑い方が似ている。だが、もっと鈴の音のようにきれいに耳に響く。
思わず聞き惚れてしまいそうだ。
「私のことはもう聞いたかしら？」
自分に向けられた質問に、はっとしてはるかは彼女に目を向けた。
そうして目がまったく離せなくなってしまったのだ。

（すごい）

呼吸さえ忘れて彼女に見とれる。
Ａ？やＥ？の子どもには美形が多いと聞いていたし、実際ここに来て、なるほどと大きく頷いていた。

が、彼女の場合、美形どころの騒ぎじゃない。

（なんで、こんな人がこの世に生きているんだろう？　本当に生きている人？　人間？）

もしも『女神』という存在が本当にいるのだとしたら、彼女のような美しさを持っているのではないだろうか。

そう思うほど、今まで出会ったどの人よりも美しい人だった。

ぼうっと見とれていると、女神の形の良い眉が歪められた。

「……ねえ、美奈子」

「何かしら？」

「何？　この子、か、か、かわいいっ！」

「……」

「……」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。だが、すぐに自分の心を読まれていたことを知った。

はるかの顔が赤く染まる。

「私、この手の誉め言葉は嫌ってほど聞いてきたけど、こんなにストレートに言われたの、初めてよ」

「はるかは言ってないわ。思ったのよ」

朱美の喜びように呆れて、美奈子は苦笑した。

「そこであなたに頼みがあるの」

「分かってるわ。この子に力の使い方を教えればいいのね」

「ええ」

そう言って二人ははるかを振り返る。

不安げに見つめ返すと、大丈夫と彼女たちは笑った。

「『ＧＡＩＡ』のように荒っぽい教え方はしないわ。ただ、今のよ

うに心を読まれては、あなた、困るでしょ？　心に壁を作る方法を教わると良いわ。それと、私たちの戦い方をね」
「戦い方？」
その言葉の響きを不思議に思って、はるかは聞き返した。
「戦いと言っても、シリーズ1や2じゃあるまいし、取っ組み合い、殴り合いなんてことはしないわ。けどね、私たちの戦いはそれよりもっと痛いし、辛いの」

朱美は白いワンピースドレスをひらりと翻して二人に背を向けると、やたら大きく、部屋の4割の面積を占めるL字型のソファに腰を下ろした。
美奈子も当然の顔をして朱美の隣に座り、はるかにも腰掛けるように勧めた。
はるかは二人から少し離れて、二人の顔が見える位置に腰を下ろした。

「そうね。簡単に言うと、私たちの戦い方は相手より先を読んで、早く動くこと」
「予知するってこと？」

シリーズ3はESPを得意とし、ESPにはテレパシーや透視、予知能力が含まれる。
そう聞いた話を思い出して、はるかは確認するように訊いた。
だが、朱美は首を横に振った。

「予知というより、テレパシーだわね」
「テレパシーっていうのは、他人に自分の考えを伝えたり、または相手の心を読む力のこと。つまり、相手の考えが分かれば、次にその人がどう行動しようとしているのか分かるでしょ？　それが私たちの言う、先を読むことよ」

朱美の言葉を美奈子が補修して説明してくれる。
はるかは頷いた。
「要するに、シリーズ３の戦いは、いかに相手の心を読むか、読まれないようにするかの戦いなのね」
「そういうこと」
「あとは、相手の精神を乱すという方法もあるけれど、危険だからあまりお薦めはしないわ」
「精神を乱すって？」
「テレパシーの応用よ」
「相手の記憶の中から、いやぁ～な過去を探るの。そして、それを思い出させるのよ。そうすることによって、洗脳したり、廃人にしてしまったりできるわけ。他にも、脳にイメージを送って幻覚を見せるというやり方もあるわ。つまり、例えば相手に自分が炎に焼かれているというイメージを送るとするでしょ。すると、その相手は、実際には炎なんてどこにもないのに、その人だけには炎が見えてしまうの。熱いと感じたり、火傷をしたり、場合によってはそのまま焼け死んでしまうこともあるわ」
「炎がある。自分が焼かれていると、脳が騙され、思い込んでいるのよ」
「本当にそんなことが？」
できるものなんだろうか。できるとしたら、なんて恐ろしい。
はるかはブルッと身体を震わせた。
それを見て、美奈子がふっと笑う。手櫛をするように何度もやさしくはるかの頭をなぜてくれる。
「そんなことができるのはシリーズ３の中でもほんの一握りよ。私や隆史にもできないことなんだから」
「そうなの？」
「ええ。特に隆史はＥＳＰの中でも透視を得意としていて、テレパ

シーはそこそこ、予知は苦手ね。苦手と言っても他のシリーズの子よりは優秀だけど」
「朱美さんは？」
「朱美でいいわ」

クスリと笑ってそう言うが、年上で尚かつ、美人な人を呼び捨てにできる度胸をはるかは持ち合わせていない。
こんなに近くにいることさえ、呼吸に使う酸素を不足させているのに……。

「朱美さんはできるんですか？」
やはり『さん』付けで呼ばれた名前に彼女は苦笑する。
そして、ゆっくりと頷いた。
「できるわ。それに、きっとあなたにもできる」
「私も？」
「けどね、危険だって言ったでしょう。やろうだなんて思ってはダメよ」
「危険って？」
「相手の心を読むには、自分の意識を相手の心の中に潜り込ませるの。読むだけならば、潜り込んだ心からの脱出は簡単。けれど、心を乱そうと思ったら、乱すのに夢中になって出口を見失ってしまう場合があるの。乱れた心の中に閉じ込められてしまうのよ」
「もし、閉じ込められたら？」
「あなた自身が廃人になってしまうわ」

山道で次に来る人を困らせようと、標札を逆の道に移したり、草木で道を隠したりしていたら、あまりにもそれに夢中になりすぎて自分自身の道を失い、迷子になってしまったという最低の自業自得、もしくは『ミイラ取りがミイラになった』パターンだ。
はるかはきつく唇を結んだ。頭の上に重たく黒い影がじっとりと

降りてきたように感じる。
今、初めてはるかは自分が持っていると言われた力に大きな恐怖を覚えた。
それまでは恥ずかしいとか、ひたすら感心するばかりだった。
少しだけでも未来が分かったら、お得な気分になれるかもとか、箱の中を見ないでも透視できれば便利かも……とかいった軽い気持ちを持っていた。
それなのに、まさか、自分の力で人に害を及ぼすことができるだなんて。
下手をすれば相手を殺してしまう。いや、自分自身だって殺しかねない力。
そんな力が欲しいだなんて思ったことは一度もない。
くださいだなんて、誰にも頼んでないのに……。
じっと自分の手の平を見つめると、何かを掴むかのように、ぎゅっと握り締めた。

「手放せないものをいらないと言っていても仕方がないわ。得ることができないものを欲しいと言ってもどうしようもないようにね」

嘆くより、慣れろと朱美は静かに言った。
もしかしたら、手放せないものをいらないと言って嘆いていたのは、朱美自身のことだったのかもしれない。
彼女はシリーズ3の中でも飛び抜けて優秀なＥＳＰの使い手だという。
誰かの精神を破壊してしまったことがあるのかもしれない。人を殺してしまったこともあるのかもしれない。
けれど、彼女はそんな様子も見せず、笑う。

「あなたに教えたいことはいっぱいあるけど、まずは心の壁の作り方を教えるわね」

美の女神も嫉妬する程の微笑みを浮かべて言うので、はるかはそれ以上何も訊くことができず、黙って頷いた。

▽▲

美奈子と朱美に超能力の使い方を教わっている最中、はるかのことを聞いた他の姉妹たちが次々と顔を見せに集まってきていた。

いや、顔を見せにではなく、はるかの顔を見にやって来たのだ。

彼女たちは無遠慮に、『ＧＡＩＡ』の外で育った姉妹に興味津々の瞳を向けた。

ほとんどがはるかより年上だが、同じ年くらいの子や年下もいて、うち何人かはＮシリーズだった。

集まってきた姉妹の中に晴海の姿はない。彼女は水槽から出られないのだそうだ。

人魚だったことを思い出してはるかは忍び笑いを漏らす。

晴海のように容易に自分の部屋から出られない者がいて、姉妹全員集合というわけにはいかなかったが、朱美の部屋が狭く感じるほどの人数が集まった。

初めのうちは、はるかのＥＳＰ訓練に協力してくれていた彼女たちだったが、外の世界のことやはるかがどのように育ったのかを知りたがって、美奈子や朱美にため息をつかせた。

結局、二人が顔を見合わせて肩をすくめた時点で授業は終わり、後は３０人近い女たちによるトークタイムが始まったのだ。

途中、何度か男兄弟たちも顔を見せたが、その輪に入れるわけがなく、すぐに部屋を出ていった。

目に付いた人、全員が兄弟姉妹というのは不思議な感じだし、こんな大勢に囲まれたのは初めてのことで気が動転してしまうが、なぜか、とても安心する。

もしかしたら、ここが自分の居場所なのかと思ってしまう。

とおるがいなくとも、彼女たちがいるここで満足できてしまう気がした。

だが、その思いは間違っていると、そう思ってはいけないのだと知ったのは、翌日のことだった。

１８．もう一度

伯爵に呼ばれて彼の部屋に行くと、美奈子と隆史、朱美がそこにいた。
美奈子と朱美は並んでソファに座っており、その向かいに隆史が腰掛けていた。
伯爵は窓の側に立ち、じっと外を見ている。
はるかは隆史に促されて、彼の隣に腰を下ろした。
黒いソファは思いがけず柔らかで、体重を掛けたところが１０センチ近く埋まってしまう。
その柔らかさにびっくりして一度下ろした腰を再び浮かせたが、声の方は口から飛び出る寸前でなんとか呑み込んだ。

しばらくして、はるかが落ち着いたと見て口を開いたのは伯爵ではなく、隆史だった。
「かなた君のことが分かったよ」
「かなたの？」
昨日『ＨＥＬＥＮＥ』を出る時に伯爵が約束してくれたことを思い出した。
彼は部下を使ってかなたのことを調べてくれると言ってくれたのだ。
「彼はまだエリア３にいる」
「エリア３って『ＨＥＬＥＮＥ』のことよね。第三研究所……」
はるかの言葉に隆史は頷く。
「第三研究所をエリア３と言うのは、一々、第三研究所と言うのがややこしいからだ」
「じゃあ、『ＨＥＬＥＮＥ』と呼ぶのは？」

言い難そうに隆史は朱美を見た。彼の代わりに答えたのは美奈子だった。

「はるか、朱美には別の名前があるって言ったわよね？　『ＧＡＩＡ』が優秀な子にだけ与えた名前があるって」

「うん」

「朱美のもう一つの名前は『ヘレネ』よ」

「ヘレネ……」

もはや、嫌だと言うほどに聞き慣れてしまった音に、はるかは愕然とした。

「第三研究所が『ＨＥＬＥＮＥ』と呼ばれるのは、そこで生まれた最も優秀な子どもの名前にちなんでいるからなんだ。もう一度、もう一人、ヘレネを造ろうってね。目標を掲げているようなものだ」

だからなのかと、はるかは気付く。

だから隆史は『ＨＥＬＥＮＥ』とは言わずにエリア３と言ったのだ。

ここに、すぐ傍に朱美がいるから……。

はるかは隆史に向き直って、話を元に戻す。

「それで？　かなたはエリア３でどうしているの？　どうなってしまうの？　売られる？　それともエリア１に連れて行かれる？」

「連れて行かれるんだ。今日」

「今日！？」

ある程度予想していたことだが、あまりにも急すぎるそれにはるかは大声を上げた。

「今日と言っても、日が落ちてからこっそりと運ぶんだろうな。薬品を造っているはずの研究所から人間を白昼堂々と運び出すほどマヌケな相手だったら、こちらも苦労しない」

「かなた、エリア1に連れて行かれたら、どうなるの？」
「それは君がってこと？　それともかなた君がってこと？」

自分については分かっている。
もう二度とかなたとは会えないだろう。とおるとも会えない。
自分はここで、この館で、伯爵や兄弟姉妹たちと暮らしていくしかなくなるのだ。
潤んだ瞳に隆史は全てを承知して頷いた。

「おそらく、兵士として教育されるだろう」
「兵士？」
「大半が金持ちに護衛として買われるが、中には『ＧＡＩＡ』の施設を警護させるために売らずに残されるような奴もいる。そして、残りの何人かは海外に売られるんだ」
「どうして海外に？」
「戦争の駒として使うためさ。通常の人間より優れた運動能力を持つ彼らは大きな戦力となる。しかも、詰め替えがきく。嘆く家族もいないし、そもそも法的には存在しないモノだ。戦死しようが、どうなろうと問題ないってわけだ。日本には戦争がない。だから、戦争をやる国に輸出するのさ。まあ、海外に売られようと、日本内で売られようと、死ぬまで『ＧＡＩＡ』にこき使われようと、どれにせよ、シリーズ1の奴らは戦うために造られて、骨の髄まで戦い方を教え込まれるんだ」

隆史の言葉ははるかの胸をギリギリと締め付けた。

荒れ地に転がる死体の山。
くすぶる黒い煙と耐え難い血の臭い。
誰もいない。
生きている者は誰もいない。

そんな中、一人たたずむかなたの姿が、はるかには見えたような気がした。
だが、すぐに、その幻を打ち破る声が響いた。
「Ｎ１０１が海外に連れて行かれるとは考え難いわね。金持ちに売られることも」
「なぜ？」
「Ｎ１０１はＡ？の子どもだからよ。Ａ？の子どもは貴重なの。あなたたち二人しかいないからね。そんな彼を『ＧＡＩＡ』が手放すはずがないのよ」
「確かに」
美奈子の言葉に隆史も朱美も頷く。
「そうね、きっと。兵士として教育して、新たな名前を彼に与えるんだわ。『アレス』って」
「アレス？」
「シリーズ１の中でも最も強い能力者に与えられる名前よ。今もアレスって呼ばれる子はいるけれど、Ｎ１０１が今のアレスより強ければ、彼がアレスと呼ばれるようになるわ」
「Ａ？の子だもの。強いに決まってる」
「けど、外で暮らしていたかなた君が素直に『ＧＡＩＡ』の訓練を受けるかなぁ？」

かなたの獣のような瞳を思い出してはるかもその意見に頷いた。
獣のような瞳。
その黄金色は、自分と同じ色だ。
だが、鋭く、きつい印象があり、ギラギラと燃えるようなそれはプライドの高さを示していた。
誰にも服従しない百獣の王の瞳。
「かなたは絶対に大人しく言うことを聞くような人じゃないわ」

そうであって欲しいという願いが込められていたかも知れない。
はるかもあの瞳に心を捕らえられ、服従させられてしまった一人だ。
その彼が誰かに従う姿なんて見たくない。

「そうね、彼は『ＧＡＩＡ』には従わないかもしれないわ。あなたの知っている彼ならね」
「どういうこと？」
「あなたの知らない彼になってしまうってことよ」
美奈子の言っている意味が分からなくて、はるかは不安げに首を傾げる。
「エリア３には人の記憶を消せる者がいるわ」
「記憶を？」
ごくりと咽が鳴る。美奈子の陰った瞳の行方を追って、朱美にたどり着く。
「誰なの？」

記憶を消す。
それはきっと、美奈子や隆史にはできないことなのだろう。
もっと強い力の持ち主でないとできないようなこと。
もっと強い力の持ち主。それは、誰……？

ゆっくりと朱美の口が開いた。
「ヘレネよ」
でもっとはるかは大声を上げた。
「ヘレネって朱美さんのことでしょ？」
「そうよ。でも、今言ったヘレネは朱美のことじゃないわ。いいえ、朱美であることには違いないけれど……」
「違う！あれは朱美とは別人だっ」

忌々しいとばかりに怒鳴った隆史にはるかは説明を求める。
朱美ではないが、朱美であることには違いないとはいったい。
だが、答えたのは朱美本人の口からだった。

「私のクローンがいるの」
「クローン？」
そういえば、『ＧＡＩＡ』のクローン技術は進んでいると聞いた。

「私がヘレネとしてエリア３にいたのは、６年ほど前までよ。そもそも『ヘレネ』とか『アレス』っていう名前は継承されていく名前なの。私より強い力の持ち主が現れたら、その子がヘレネになるの。用済みな私はこうして伯爵に売られたってわけ。アレスもそうよ。けど、アレスの場合、次のアレス候補が現れたら、二人を戦わせて、負けた方は勝った方に殺させるみたいだけど」
「戦わせるって、兄弟姉妹同士で？」

兄弟姉妹はやっかいだと言ったのは誰だっただろうか？
戦い方が似ているからやり難いと彼は言っていた。

「アレスは特に交代が激しいけれど。ヘレネはね、私から私のクローンに代わったのみよ。『ＧＡＩＡ』は第２のヘレネを造ることができなかったの。私たちの力はね、成長と共に強まり、２０歳をピークに衰えていくものなの。特に、シリーズ１にはその傾向が著しいの。私が２０歳を間近にして焦ったのね。一刻も早く次のヘレネを造ろうと、『ＧＡＩＡ』は私のクローンを造った。私以上の力は望めないが、私より劣る力ではない。今はそれで十分だってね」
「その……朱美さんのクローンがかなたの記憶を消すの？」
「その可能性が高いわね。『ＧＡＩＡ』にとって、外の記憶なんて邪魔以外の何者でもないから」

かなたの記憶を消されてしまったら、どうしたらいいのかと、はるかはかなたとの記憶をたどった。
わずかな記憶でしかない。
突如現れた兄。
初めは驚きで、不快で、そして惹かれて、見知らぬ女性の影にちょっと嫉妬したりして……。
わずかでしかないけれど、彼が自分を忘れてしまうだなんて、耐えられない。
それに何より、彼がとおるを忘れてしまうなんて、絶対に嫌だ。
彼は、かなたはとおるとの思い出を共有できる唯一の存在だ。
まだまだたくさん話したいことがあった。
とおるのこと、とおると過ごした彼の時間をはるかはまだ聞かされていない。
それなのに、もう二度と会えないかもしれない。
記憶さえ消されてしまう。

「そんなの嫌っ！」

つうーっと頬を熱いものが流れた。
勢いよく立ち上がると、はるかは部屋を飛び出そうとした。
だが、低めの声がそれを制す。伯爵だった。
それまで静かに窓の外を眺めていた彼がゆっくりと振り向き、冷ややかな目をはるかに向けた。

「どこに行くんだ？」
「かなたを助けに行くわ。エリア３にいるんでしょ？　今から行けば間に合うかもしれない」
「ああ、間に合うかもしれないな。だが、お前も捕まる」
「！」

「捕まるだけならいい。また、わたしが引き取りに行けばいいことだ。そのための金はいくらでもある。だが、それではＮ１０１は助け出せない。その上、運が悪ければ殺される。――いや、お前は貴重な子だ。殺されはしないだろうが、殺したことにして持ち主であるわたしの元に返してくれないかもしれん。次はどこに売られるか分からないぞ。お前に都合の良い主だといいが」

冷静な声ははるかの頭を冷やす。

確かに言われた通り、はるか一人『ＧＡＩＡ』に駆け込んだところで、どうにもならない。

そしてはるかは『ＧＡＩＡ』の恐ろしさを本当の意味でまだ分かっていない。

はるかの知っている『ＧＡＩＡ』は窓のない真っ白い壁だけだった。

「じゃあ、どうしたらいいの？」

「ここにいなさい」

「かなたはどうなるの？　伯爵はかなたのことが分かるまで屋敷にいなさいって言ったわ。分かったら助けてくれるって……」

「そんなことを言った覚えはないが」

はっと息を呑む。

騙された？

――いや、違う。

確かに伯爵はかなたを助けてくれるとは言わなかった。

はるかは頭を振った。

「だけど、私はかなたに会いたいの！もう一度、彼に会いたいのよ。もう二度と会えなくなるなんて嫌なの！」

やはり一人でも『ＧＡＩＡ』に乗り込もう。
そう思って再び扉に手を掛けた。
その結果、最悪な事態に陥ったとしても、その時は仕方がないと諦めよう。
やれるだけのことはやったのだと。
やれることもやらないで諦めるなんて嫌だ。
ここは、伯爵の元は、とても安心できる。
兄弟姉妹たちもいる。楽しいし、辛いことから守られて暮らしていける。
けど、ここにはとおるがいない。
例え、かなたを助け出せてもとおるがいないことには変わりはないが、かなたはとおるを知っている。
とおるとの思い出を持っている。とおるを感じることができるではないか。
かなたをとおるの代わりにするわけではない。
かなたはかなたで、彼自身に強く惹かれている。
あの強い瞳。
抱き留めてくれた腕。
頼りがいのある背中。
そのくせ子どもっぽいところがあって、意地の悪い言い方をしたり、横柄な態度を取っていた。

（もう一度、彼と会いたい。もう一度。もっと彼を知りたいから。ずっと傍にいて欲しいから）

涙が後から後からと、こぼれ落ちていく。
全身の水分を流しきってしまう勢いである。
扉に掛かったはるかの手が小刻みに震えているのを見て、ため息混じりに伯爵の口が開いた。

「はるか、そんなに彼を助けたいか？」
「私一人で助けられるなんて思ってないわ。でも、一目会いたいの。その後、捕まってもいい。どっか知らないとこに売られてもいい。一目、彼に会いたい」

伯爵が重たく息を吐く音がはるかの耳にも届いた。
それから、ゆっくりと伯爵がはるかの背中に歩み寄ってくる気配を感じる。
その気配が背中の真後ろでピタリと止まると、はるかの手の甲に大きな手が重ねられた。
驚いて見上げると、悲しそうな瞳に行き当たる。

「伯爵？」

ぼやけた視界に、ひどく情けない顔をした伯爵が現れた。
彼にこのような表情をさせているのは、他の誰でもなく自分だと思うと、申し訳ないような、悲しい気分になった。

「ごめんなさい」
「なぜ謝るんだい？」
「私が我が儘だから」
「お前が？」
「だって、私、伯爵に買われたんでしょ？　本当ならあなたの言うことは何でも聞かなきゃいけない立場にあるのよね。あなたのペットみたいなものだから」

道楽玩具という言葉を思い出した。
伯爵に買われなかった他のシリーズ３の子どもたちは、金持ちの道楽玩具にされているらしい。
それがどういったものだか、はるかには分からないが、おそらく

ペットのようなものだと思っていた。
そう思って、思ったままを言ったのに、伯爵はますます目を曇らせた。
「わたしはお前をそんなふうに思ったことはない。美奈子も隆史も、朱美もペットだなんて、思ったことはない。そのように扱った覚えもない」
「……そうね」
はるかは素直に頷いた。
「伯爵はそんな人じゃない。そんな人だったら良かったのに……。そのくらいひどい人だったら、何が何でもここから逃げ出してやるのに」
「はるか……」
ここは居心地が良い。
伯爵も好きだ。伯爵はお母さんを好いてくれた人だから。
（けど……）
伯爵の手を振り払って、今度こそ部屋から飛び出そうと思った時、意外な言葉が彼の口から発せられた。
条件があると。
それはあまりにも小さい声だった。
え？っと振り返ったはるかに再び同じ言葉がかけられる。
「条件がある。それを約束してくれるのなら、わたしも協力しよう」
「条件？」
上目遣いに彼を見つめると、伯爵はやさしくはるかの頭をなぜた。
「『ＧＡＩＡ』が保管する美沙に関するものを全て盗んで来て欲し

い」
「伯爵っ！」
叫んだのは誰だっただろう？
隆史か、美奈子か。いや、朱美も含めて3人同時だった。
「盗めないものなら、その場で処分して欲しい」
「お母さんに関するものって？」
「DNAサンプル、卵巣、その他の臓器があれば、それもだ」
「それが『GAIA』の元から失われれば、もう二度とお母さんの子どもは造られないのよね？」
伯爵は頷く。
E？の子どもが造られなくなれば、伯爵もようやく『GAIA』から解き放たれる。
もう二度と『GAIA』から子どもを買い取ることもなくなるだろう。
そのような条件なら願ったり叶ったりだ。
「やる」
はるかは瞳を黄金色に光らせて、力強く頷いた。

19．エリア3へ

どこにでもありそうな建物がはるかの目の前に姿を現した。
そもそも研究所だの病院だの工場だのという建物はどれも似たり寄ったりで、どの建物でどんなことをやっているのか、はるかにはさっぱり分からない。
白い壁。静まりかえった空気。
どこか重苦しくて、外部を遮断するような建物だ。

車から降りたはるかは建物を見上げた。
総合病院並みにでかい。その大きさに押し潰されそうになって、数歩後退りをした。
とんっと伯爵の胸にぶつかる。
「どうした？」
心配そうな顔がはるかを見つめる。
引き返すのなら今だぞと、その目は言っていた。
はるかは頭を横に振って、もう一度、上を見上げた。
『ＧＡＩＡ』の研究所はでかい。雲を突き破るほどの高さだ。
けど、そんな『ＧＡＩＡ』の遙か上には青い空がある。
空。
青い空は、はるかにとおるを思い出させる。
「なんでもない」
そう言って、はるかは微笑んだ。

建物の中に入ると、伯爵は迷うことなく『立ち入り禁止』の札が

された部屋に入っていく。
そして、その部屋の本棚を押しやって、くるりと回転させる。
すると、そこに階段が現れるのだ。

「いつ見ても古典的な仕掛けだな」
呆れたように隆史がつぶやく。
「でも、忍者屋敷みたいでおもしろいじゃん」
「へえー、はるかちゃん、余裕そうだな。これからすること本当に分かってる？」
「分かってるよっ」

隆史は、はるかの手助けをするようにという伯爵の指示で一緒に来てくれている。
他にも朱美が協力してくれるらしい。
けれど、彼女はここにはいない。
自分がいても足手まといになるだけだからと屋敷に残り、そこからテレパシーで助言してくれると言う。
階段を下りていくと、はるかの見知った廊下に出る。
『ＧＡＩＡ』の裏の顔がそこにあった。
擦れ違う人々皆、白衣を着て、神経質っぽく歩き去っていく。
だが、伯爵の顔を認め、頭を下げることは忘れない。
伯爵の足がようやく止まった。

「ここは？」
「所長室だ」

あの冷たい声をした男だとはるかは思い出す。
心臓をえぐり取るような冷たい声。　はるかは衣服の上から自分の胸を押さえつけた。

「山内勤。元はエリア１の重役だった男だ。だが、１５年前、Ａ？に逃げられ、その責任を取って、エリア３に移動させられた」
「エリア３の所長よりエリア１の重役の方が偉い？」
「エリア１は『ＧＡＩＡ』の本部でもある。他のエリアは本部の命令を忠実に実行する」
「つまり、下っ端？」

はるかの言い方がおかしかったのか、伯爵は苦笑する。
そして、ドアを軽く叩くと中からの返事を待って、開いた。

「突然、押し掛けてすまない」
部屋の中に入って、まず一声がそれだった。
その旧友に話しかけるような伯爵の口調にはるかは首を傾げる。
「この子がどうしてもヘレネに会いたいと言うのだが、会わせてくれないだろうか？」
そう言って、伯爵ははるかを山内所長の前に押し出した。
冷たい目がはるかを見据える。
ぞくっと背中をひんやりとしたものが走り抜けた。
そして、覚悟していた通りの冷ややかな声が発せられた。
「何度も言うようだが、ヘレネは売れん」
「分かっている。今日は会いに来ただけだ」
「それなら良いが……」
山内は少し考える時間を取って、
「案内を付けよう」
と、デスクの上の電話に手を伸ばした。が、伯爵はそれを言葉で制す。
「必要ない」
それは短い言葉だった。
だが、山内には十分で、低く唸るように頷く。
勝手にしてくれと言うと、彼の鋭い目はデスクの上に落ちた。

礼を言って部屋から出ると、３人はほっと息をついた。
「バレましたね」
早歩きでその場を逃げるように去ると、不意に隆史が言い放った。
「そうだな」
「バレたって？」
「俺たちがこれから何かをしようとしているってことをだ。何をするのかは分かっていないようだけど」
「でも、バレたんなら、やばいんじゃない？」
「まだ、大丈夫。あの人は様子を見てみようと思ったみたいだから。やれるもんならやってみろってね」
「じゃあ、やってやりましょ」
にこっとしてはるかが言うと、隆史もおうっと言って笑い返した。
「では、二人ともくれぐれも気を付けるんだぞ。わたしは先に車に戻っているから」
「はい」
「伯爵、ありがとう」
伯爵が一緒に来てくれなかったら、はるかは研究所に踏み入れたとたん捕まっていただろう。
彼が来てくれたおかげで、『ＧＡＩＡ』の裏側に入ることはもちろん、こうして堂々と歩けるのだ。
「もし、誰かに声をかけられたら、自分は南の伯爵の所有物で、所長の許可を貰って研究所を見学していると言いなさい」
「うん、分かった」
「必ず帰ってきなさい」
何度も頷いたのにまだ不安そうな顔をしている伯爵を残して、はるかと隆史は『ＧＡＩＡ』の廊下を歩き出した。

▽▲

白い壁。
白いタイル。
白い蛍光灯。
それら全てがはるかの胸を騒がせる。

（かなた、どこ？）

キョロキョロと辺りを見回しているはるかの頭を軽く隆史が叩いた。
「怪しまれるだろ」
「でも」
さっきからいくつもの扉を通りすぎた。
あの扉の向こうにもしかしたらかなたがいたかもしれない。
そう思うと落ち着かなかった。

片っ端から開けて、かなたの名前を叫びたい。
「だめ」
はるかの心を読んだのだろう。即答される。
「じゃあ、どうやってかなたを探すの？」
「今、朱美が探してる」
「へ？」
わけが分からず首を傾げた時、不意に頭の中で声が聞こえた。
《……るか、はるか》
「何？　だれ？」
慌てて辺りを見回すが、隆史以外に誰もいない。
頭の中の声はクスクスと笑う。
《はるか、私よ》
落ち着いて聞いてみると、その声は朱美の声だった。
（これがテレパシーってやつ？）
遠距離の相手に言葉を使わずに気持ちを伝える力。
すごいとはるかは小さく声を漏らした。
《いい？　はるか。目で探してはダメよ。感じるの》
（感じる？）
《Ｎ１０１の気配を感じ取るのよ。あなたならできるわ》
（うん）
姿のない相手に頷いてみせると、しばらく、朱美の指示通りに廊下を歩いた。

もはや、無駄に目を動かすことはしない。前だけを見つめて、堂々と歩く。

（私、捜し物って得意なのよ）

《そうでしょうね》

声に出さない会話は、はるかにとって初めてのことで楽しかった。

表情は仮面のように無くし、心の声だけを楽しげにさせるのは、なかなか難しい。

けれど、常に誰かと一緒にいるような、一人じゃない心強さが嬉しかった。

手を伸ばせば届く距離には隆史もいる。

外には伯爵が車を用意して待っていることだろう。

（大丈夫。絶対かなたを連れて帰るもん）

はるかは、ぎゅうっと手を握り締めた。

その時、白だけの世界にうっすらと金色が光った。

まさかと思い目を凝らす。

だが、見ようとすればするだけ、それは見えなくなってしまう。

（目じゃなくて、感じる）

朱美の言葉を思い出して、瞼を閉じた。

すると、確かに見えたのだ。かなたの黄金色の光が！

「いた」

「どこだ？」

「こっち」

今にも駆け出したくなるのを堪えて、ゆっくりとその光に近付く。
（ああ、もどかしい）
ゆっくりとしか動かない足がもどかしい。うざい。切り取ってしまいたくなる。
（かなた、早く。早く会いたい）

光の見えたところにたどり着くと、深く息をついてから、ドアノブに手をかけた。
だが、鍵が掛かっているようで、びくとも動かない。
はるかはため息をついて隆史を振り返った。

「貸して、開けるよ」
「開くの？」

疑わしそうに言うと、彼は開いたら見直してくれと笑う。
淡い光が彼の手から漏れる。そして、ドアがカチッと音を鳴らした。

２０．黄金色の瞳

「何をしたの？」
「今の力がＰＫさ。ＰＫ－ＳＴ。シリーズ２が得意とする力。俺も一応Ａ？の血を受け継いでいるから、少し使えるんだ」
「ＰＫ－ＳＴって、確か、静止しているものへ影響する力だっけ？」
「その通り」
「力があれば、鍵なんて掛かっていても意味ないわね」
そう笑うと、はるかはもう一度、息を深く吸い、ゆっくりと吐き出して、ドアを開いた。

（！）
「なんで？」

目に飛び込んできたのは、白い壁。
誰もいない部屋だった。

「なんで、いないの？」
ヒステリー気味に叫びそうになったところ、隆史に口を塞がれる。
彼はいたって冷静にその場に膝をついた。
床に手をそっと置く。
「いや、間違いなく彼はここにいたようだ」
「え？」
「感じてごらん。彼の姿が見えるだろ」
そう言うと、隆史ははるかの手を掴みその手を床に押しつけた。
すると、見えたのだ。
壁に寄り掛かり、あぐらを掻いているかなたの姿が見えたのだ。

「かなた」

ふらふらっとはるかの足がかなたに近寄る。
その頬に触れようとした。
だが、はるかの手はすうーっとかなたの身体を突き抜け、空を漂う。

「サイコメトリーと言う」
「何それ？」
分からないと隆史を振り返ると、彼は床から手を離し、立ち上がった。
「物や場所が持っている記憶を読みとる力だ」
「今のは？」
「この部屋が記憶していたかなた君に関するものを読みとった」

そうだったのかとはるかは呟いて、部屋を出た。
かなたがいないのなら用はない。
そう思った時、部屋からずっと廊下の奥まで長く続く糸のようなものを見つける。
それはキラキラと黄金色に輝いていた。

「あれは？　あれは何？」
「どれ？」
「あれよ」

その糸を指し示すが、どうやら隆史には見えないらしい。
隆史に構わずはるかは糸をたどって駆け出した。
途中、擦れ違った白衣の男に呆気にとられたような顔をされたが、そんなことに気を止めている余裕は、今はない。

糸は次第に細く、薄く、掠れるように消えていくから。
（きっと、この糸の先にかなたがいる）
そう信じて、はるかは駆けた。

もはや、どこをどう走ってきたか、分からない。
糸だけを見つめて、はるかはひたすら走った。
少し前に同じようなことがあったと思い出して、不意におかしくなる。
あの時は病院で、かなたの背中を追いかけて無我夢中で走った。
追いかけてばかりだ。
もう一度、彼に会えたら文句を言ってやろう。
今度はあなたが鬼だから、と。

《はるか、止まって！》
急に頭の中で声がした。
驚いて、言われるままに足が止まってしまった。
気が付くと、目の前に大きな扉があった。明らかに他の部屋とは違う扉だ。
（ここは？）
《ここは、ヘレネの部屋よ。危険だわ。すぐに、ここから離れて》
（ヘレネの！？）

朱美はヘレネに近付くなと言うが、糸は確かにこの部屋の中に続いている。
この中にかなたがいるのだ。
（私、行くよ。だって、ここにかなたがいるから）
朱美は何かを考えているようだ。
返事が返ってくるまでわずかな時間があった。
《わかったわ。それなら……》
（何？）
《それなら、ヘレネを殺す気で行きなさい》
（殺すって？）
あの美しい朱美のものとは思えない言葉に驚いて聞き返すが、答えはなく。
彼女はただ、
《私もそのつもりでいるから》
と、感情無く言い放った。
振りかえると隆史も傍に来ていて、はるかの目を見ると、黙って頷いた。
彼もそのつもりなのだ。
そう知ると、はるかは咽をごくりと鳴らし、扉に手をそっと置いた。
押しやると、音もなく扉は開いた。
部屋の中は、ごく普通の少女の部屋といった感じで、研究所の中とは思えなかった。
どこか、朱美の部屋と似た雰囲気がある。
誰もいないことにほっとして、はるかは糸の行方を捜す。

どうやら糸は、続きの部屋にまで続いているらしく、はるかはそっと奥の部屋の扉を開いた。
この部屋は寝室のようだ。中央にどんっとベッドが置いてある。
糸はそのベッドへと、はるかを導いている。
一瞬躊躇したが、戸惑って良い時点はとっくに過ぎ去っている。
思い切りをつけて、ベッドに歩み寄った。
すると、ベッドの上に、遠目に人らしい形が見て取れた。

「かなた？」

小声で呼んでみる。が、それは動かなかった。
近付いて、触れてみる。
間違いなく、かなただ。
黄金色の癖のない髪は少し長めで、耳を隠し、首にまとわりついている。
隠された左耳には銀色に輝くリングのピアスが三つもついており、他にも、胸や腕、足首にもジャラジャラとアクセサリーがついていた。

「かなた」

ほっと息を吐いた。

「かなた？」
あんなにギラギラしていた瞳は瞼に閉ざされ、まったく見ることができない。
いつまで経っても目覚めないかなたに、はるかは不安を覚えた。
「かなた、起きて。ねえ。ねえってば！」
何度も、何度も身体を揺すってみる。
だが、ピクリとも彼は動かなかった。

「息はしているみたいだ」
かなたの口元に手をかざした隆史はそう言うと、朱美と呼びかける。
《たぶん、ヘレネに意志を封じられているんじゃないかしら？》
（どうしたらいいの？）
《彼の心の中に入るしかないわ。けれど、あなたにはまだ無理よ。危険だわ》
（やる。それしか方法がないのなら。私、やる）
朱美のため息が聞こえたような気がした。
聞こえなかったふりをして、朱美に問う。
（どうやるの？　教えて）
《相手の心を読むのと同じよ。意識を相手に集中させるの》
感覚的にやるようなことで、こうすればできるという説明はできないと、昨日、朱美は言っていた。
鉄棒の逆上がりや、縄跳びの二重飛びのようなものだと。
もっと足を上げてとか、もっと腕を早く回してとか、そういうことは言えても、具代的なやり方は言えない。
できる人はできるし、できない人はできない。
ある時、突然、できない人ができる人になるしかないのだ。

はるかはかなたの頭を数回なぜつけると、その額に手を置いた。
呼吸を彼のそれと合わせる。ゆっくりと瞼を閉じた。

その時、瞼の中の闇がくらりと揺らいだ。
赤、青、黄色と様々な色が合わさって、爆発して、また引き合って、散って。

キレイだけど、不気味だと思いながら、それらに魅入っていると、ポタ、ポタと水音が聞こえてきた。
足下を見ると、金色の水たまりができている。

ポタポタ。

続けて二粒その中に落ちた。
いったいどこから落ちてくるのだろう？
そう思って見上げると、目の前に大きな蜘蛛の巣が広がっているのが見えた。
いや、蜘蛛の巣ではない。
鎖だ。
何本も複雑に絡み合っている。
また一粒、はるかに向かって水滴が落ちてきた。
まるで金の粒のようだ。
手の平で受け止めようとして、腕を伸ばす。

ビシャ。

手の平にぶつかって、それは粉々に散った。
欠片が舞う。
それを目で追いかけながら見上げると、なんとそこに、かなたの姿があった。
鎖に巻き付けられ、ぶら下げられたかなたの姿を見つけ、はっと息を呑む。
金色の水滴はかなたの瞳から流れ出たものだったのだ。

はるかは鎖を伝ってかなたのもとに登った。
手や膝を鎖に引っかけて切ったが、たいした痛みも感じなかった。
そこにかなたがいる。

もうすぐで会える。
その想いが他の感覚を麻痺させていたようだ。
「ねえ、どうして泣いてるの？」
かなたの傍までたどり着くと、彼に覆い被さるような体勢で身体を落ち着かせた。
下から覗き込むように彼の顔を見つめる。
「悲しいこと、あったの？」
とおるが死んだと聞かされた時でさえ、彼は泣かなかった。
前日に大喧嘩をして、思わず死んでしまえと言ってしまったのだと、彼は悔やんでいた。
けれど、彼は泣かなかった。
だから、代わりにはるかが泣いたのだ。
「もっと私が泣いてあげれば良かった？」
彼の涙を拭ってやりたかったけれど、両手は鎖を掴んでいて離せない。
手の代わりに唇を寄せる。
目に、頬に、顎に、そして……。
まるで鳥の羽根に口付けを落としたようだった。
自分でもなぜしてしまったのか、分からない。
そうするのが当然だった気がした。しなくてはならないような気がしたのだ。
いいや、違う。
単に、はるかがそうしたかったのだ。
二人の唇が離れると、それまで閉ざされていた瞼がすうーっと開いた。

黄金色の瞳が姿を現す。
「……はるか」
寝起きの甘い声がはるかの耳をくすぐる。
なんだか恥ずかしくって、へらへら笑ってしまった。
「おはよ」
「……おう」
かなたも照れくさそうだ。
年上で、お兄さんなのに、なんだか可愛くなってしまった。
はるかは鎖から手を離し、ぎゅうっとかなたを抱き締めた。

すると、そのとたん、かなたを縛っていた鎖が消えた。
支えをなくした二人の身体は勢いよく落下する。
そのスピードに、天と地がひっくり返ったような錯覚がおきた。
地面に叩き付けられる。
そう思った時、はっと目が覚めた。

見渡せば、どうやらヘレネの部屋らしい。
心配そうな隆史の目と目が合う。
大丈夫と短く答えると、慌ててかなたを振り返った。
彼はだるそうに、ゆっくりと身体を起こそうとしていた。

「かなた！」
黄金色の瞳が薄く開いた。
「よお、久しぶり」
掠れた声だったが、間違いなくかなたの声だ。
やっと、やっと会えた。

ぎゅうっと抱き付いて、その存在を十分に確認する。
「もう、かなたは、目を閉じたらダメだからね。瞬きもダメ」
「なんだよ、それは」
「お仕置きっ」

自分と同じくらい、いや、それ以上の力で抱き返してくれる彼の腕が、はるかはとても嬉しかった。
そうして、彼の存在がかけがえのない大切なものだと実感した。

21．ヘレネ

かなたの視線が隆史を捕らえたのを感じて、はるかは焦った。
彼に話さなければならないことがたくさんあったのだ。
隆史のことはもちろん、伯爵のこと、美奈子や朱美のこと、他の兄弟姉妹たちのこと、そして、お母さんのこと。
何からどうやって話したらいいのか、悩んでいると、ごつんとかなたが頭に頭をぶつけてきた。

「痛っ」
「動くな」
「何？」
シッと言われて、黙っていると、分かったと言ってくっついていた頭を離した。
「分かったって？　何が？」
ぶつけられたところをさすりながら訊くと、かなたはニッと笑った。
「全部」
「全部？」
「俺もただじっとここにいたわけじゃないってこと」
「へえ？」

おマヌケな声を上げてから、しばらく考えて、記憶を読まれたことに気が付いた。
かーっと顔の熱が上がった。
かなたはそれを見て面白そうに笑うと、よしっとかけ声を上げてベッドから降りた。

そして、隆史に目を向ける。

「いろいろと世話になったみたいだな」

「いや。こちらこそ、はるかちゃんのおかげで伯爵の重い腰がようやく上がって、喜んでいる」

「どういうこと？」

きょとんとして聞き返すはるかに、隆史は苦笑を漏らす。

「伯爵は、現状がだめだと分かっているのに、それを打破しようとはしなかったんだ。どうすればいいか、ちゃんと分かっていたにも関わらずにね」

美沙の子どもを皆買い取り、幸せにしてやれば、彼女を救えなかった償いになると、伯爵は考えている。

だから、『ＧＡＩＡ』が彼女の子どもを造れば、造っただけいくらでも金を払ってしまうのだ。

そんなことを止めさせたくて、はるかは今回の条件を呑んだ。

Ｅ？のＤＮＡサンプル、及び、卵巣やその他の臓器を盗む、もしくは廃棄すること。

そうすれば、『ＧＡＩＡ』は二度とＥ？の子どもを造ることができない。

地下室で見たＥ？の姿は、伯爵の心の内そのものなのではないだろうか。

凍り付けにされた幼い少女。

あの少女と同じ時間が伯爵の心の中で凍り付けにされている。

はるかにはそのように思えた。

「でも、伯爵はどうして今まで何もしようとしなかったの？　あなたや他の兄弟姉妹に命じれば良かったんじゃない？」

私のような、まだ力を使い切れていないような奴じゃなくてさっと、はるかはぼやいた。

すると、隆史は遠くを見るような目で笑った。
それはどこか自虐的な笑いだった。
「伯爵が美沙への償いから、その子どもを助けたいと思っているのは本心だと思う。けどね、同時に美沙の子どもを助けられたという満足感に酔っているところがある。それに、子どもを助けることによって、美沙との繋がりを持ち続けられると思っている。だから、『ＧＡＩＡ』のことを黙認していたんだ」
けど、と隆史ははるかに目を向けて続けた。
「今までは美奈子が一番美沙に似ていると思っていたけど、今は年が同じだけあって、君の方が似ているね」
１５歳で時間が止まってしまった母親の姿を思い出して、はるかは少し首を傾けた。
「美沙そっくりの君に言われて、伯爵もようやく『ＧＡＩＡ』と手を切る決意ができたんだろうな。伯爵が君に条件を出した時、ついにこの時が来たかと俺も、美奈子も、朱美も、みんな大喜びしたのさ」

恩を返したいと隆史は言った。
美沙のことなんか、忘れて欲しいと。
それで伯爵が幸せになれるのなら、自分たちの母親など忘れて欲しい。
そう彼は言い放った。

隆史の口が閉じてから、数秒後、声を発したのはかなただった。
「んじゃあ、盗むもん盗んで、とっととズラかろうぜ。お前たちの家族が帰りを待ってるんだろ？」
にっと笑った彼にはるかも笑い返す。

家族。
そう、あそこにいるみんなは家族だ。

彼らが自分たちの帰りを待っている。
そう思うと、一刻も早くここから抜け出したくなった。一秒だって、ここにはいたくない。
はるかは寝室の扉に手を伸ばした。
と、その時。
ぞわっと何かが背中を這う。

（何、この感じ……）

嫌な予感というより、危険信号だ。
怖い。

（扉の向こうに何かいる）

それはとっても嫌なモノ。
開けたくない。
そう思うのに、手は扉を押しやった。
音もなく扉は開いた。

朱美の部屋に似た雰囲気の部屋がはるかの目の前に広がる。
さっき見た時はほっとしたはずの部屋なのに、なぜか今は震えが止まらない。

《はるか！》

遠くの方で朱美の声がした。
いや、聞こえたような気がしただけだったのかもしれない。
もはや、何が何だか分からない。

部屋の４割もの面積を陣取っているソファに、座る人影が目に映った。
ふらふらと近付くと、それはゆっくりと振り返った。

透き通るような白い肌。
はっきりと黒く、つややかな髪。
濡れたような赤い唇。
こんなイキモノが存在するのかと、ため息が出てくる程のきれいな子。

（朱美さんのクローンだ！）
そう、見た瞬間に分かった。
年頃は、はるかと同じくらいだろう。
なのに、この色気は何？
この独特な甘い雰囲気は？

（この子がヘレネ……）

あと数メートルという距離まで近付くと、はるかは彼女の前で膝を折った。
身体が思うように動かないのだ。
動け、動けと幾度も命じるのに、そのままピクリとも動かなくなった。
ふふっと笑い声が耳に届く。

「あなたがＮ３０６？　Ａ？の娘なんですってね。良かったわ、ちゃんと餌に食い付いてくれて。餌にその価値がなかったらどうしようかと思ったわ」

餌とは、どうやら、かなたのことらしい。
彼がなぜヘレネの部屋にいたのか、疑問を持たなかった訳じゃない。
むしろ、違和感だらけだった。
ヘレネの言葉に納得して、はるかは彼女を睨み付けた。
つまり、ヘレネは、自分の元にはるかをおびき寄せようと、かなたを利用したというわけだ。

「それで？　一応シリーズ３みたいだけど、全然たいしたことなさそうね。顔も、力も。
やっぱり、俗世育ちだからかしら？」
ヘレネは足下に跪くはるかをギロリと見下ろすと、靴先ではるかの頭を突く。
「全然たいしたことないのに、うるさいのよね。Ａ？の血を受け継いでいるからって、それだけで特別扱いで」
「私がいつ特別扱いを受けたって言うの？」

身に覚えがないことで恨みを持たれては困ると言い返すと、つかさず、はるかの頬に蹴りが入る。

「痛っ」
「はるかっ！」

心配そうな声に目だけで振りかえると、かなたも隆史も扉付近で金縛りにあっているようだった。
悔しそうに噛み締めた唇から血がうっすらと滲んでいる。

「私はね、Ｎ３０６さえ逃げ出さずにちゃんと訓練を受けていれば、彼女こそ『ヘレネ』と呼ばれていただろうって、言われ続けていたのよ！『ヘレネ』じゃなくなったら、クローンである私に存在意味

なんてなくなっちゃうのよ。分かる？　あんたに」
自分の気持ちが分かるかと、再びはるかの顔を蹴りつける。
「認めさせてやるわ。あんたより私の方が、力が上だってことを」

そう言うと、彼女はカッと目を見開く。
その瞳は赤く輝いた。
不思議で、本当にきれいな輝きだった。
その目を見るなと、隆史の声が聞こえた気がしたが、すでに全てが遅かった。
ぞくりっと悪寒が走る。
この不快感を何に例えよう。
ミミズのぶっといようなイキモノが何匹も胸の中をうねうねと這いずり回っている……とでも言おうか。
心の中を引っ掻き回されている嫌悪感にはるかはじっとりと汗を噴き出した。

（嫌っ。嫌だ）
必死で心の壁を造るが、ミミズは所構わず穴をあけて侵入してくる。
（気持ち悪い。ヤダ。誰か、誰か助けて！）
不意に、脳裏にとおるの姿が浮かんだ。
自分が辛い時、いつも助けてくれたのはとおるだった。
（助けて、とおる！）
手を伸ばすと、はるかの体内を駆けずり回っていたイキモノが皮膚を突き破って外に現れ、腕を伝い、手を伝い、とおるの元へと駆けていく。
（嫌だ！止めて！）
はるかの制止など聞くわけもなく、ソレはとおるの目から、口から、鼻から体内へ侵入し、内側から貪り食っていく。
あっという間に、とおるは穴だらけになってしまった。

（ウソよ！こんなの！）
ヘレネが見せる幻だと分かっていても、どうすることもできなかった。
はるかの目は無意識に次の助けを求めてしまう。
見つけたのは、かなただった。
再びはるかの手が伸びる。
皮膚が裂けて、ミミズのようなイキモノが飛び出した。
腕を伝い、手を伝い、かなたの元へ……。

その時、頭が割れるような声がはるかの耳に届いた。
朱美の声だ。

《はるか、しっかりしなさい！負けてはダメよ》

その声にはっとなって、かなたに向かって這いずっていくミミズを間一髪で握りつぶした。
たとえ幻だとしても、これ以上、大切な人に穴などあけて欲しくなかった。
はるかは自分の身体に張り付いたイキモノを一匹ずつ剥ぎ取ると、握りつぶしていく。
ぐにゃりとする感触はけして気持ちの良いものではなかったが、それをいちいち気にしている余裕はない。
最後の一匹をビシャリと叩き付けると、ヘレネを睨み付けるように立ち上がった。
ヘレネも立ち上がる。
ここで初めて二人の目の高さは等しくなった。

姉妹だからと言って、朱美のクローンだからと言って、本気の相手に手加減は無用だ。

（危険だと言われているけど）
それしか方法がないと、はるかは目を閉じて意識を集中させる。
（炎、燃えて！）
ボッとヘレネの衣服に炎がついた。
小さな炎だったが、しだいに大きく燃え広がっていく。
だが、
「こんな幻、私には通用しないわ」
彼女が片手を振り上げただけで、炎は黒い煙となって消えた。
それならと、はるかは氷をイメージする。凍りづけにされた母親を……。
急に辺りがひどく冷え込む。
あの、伯爵の屋敷の地下室のようだ。
徐々にヘレネの足が凍りついていく。
ピシッ、ピシッと氷が悲鳴を上げた。
その度にヘレネの身体を覆う氷の面積が大きくなっていく。

「な、生意気っ！」

ヘレネは苦痛に歪んだ顔ではるかを睨んだ。
赤い瞳が光る。
はるかの頬を何かが掠めた。
振り返って確認にする余裕はないが、おそらくナイフのようなものだろう。
つうーっと頬に赤い線が流れた。

《はるか、そのまま集中して。しょせん幻よ。あなたはどこも傷ついていないわ》
などと朱美は言うが、ズキズキと頬が痛む。
これがもし、深く刺さった痛みだとしたら……。
そう思った時、再びナイフが飛んできた。

はるかはそれを避けるように身を翻す。

バシーン。

氷に亀裂が入った。

その中でヘレネが笑みを浮かべるのが目に映る。

《はるかっ！》

集中しようとするのに、次々と飛んでくるナイフに気が散ってしまう。

そればかりか、ナイフは皮膚を裂き、肉に突き刺さった。

左の太股に3本同時に突き刺さり、はるかは悲鳴を上げた。

咽まで裂けてしまいそうな悲鳴だった。

（だめ、できない）

ヘレネを覆っていた氷はすでに薄くなり、ほとんどが水になっていた。

勝ち誇った彼女の顔が見えた。

「ねえ、分かった？　あんたは私に勝てないって」

氷は水へ、水は蒸気となって、跡形もなく消えていく。

はるかがつくり上げた幻は完全に打ち破られたのだ。

それと前後して、再び、はるかの身体にミミズのようなイキモノがまとわりついてくる。

中へ中へと入り込んでくる。

口の中に2匹同時に入り込んできた。

歯を食いしばって侵入を防ごうとしたけれど、歯と歯の隙間から、ゼリー状になって通り抜けてくる。

舌の上をにゅるりとした感触が過ぎ去った。

それは咽に張り付くと、はるかの呼吸を止める。

（！）

《はるかっ！》

ぼうっと、頭に霧がかかってしまったかのように、何も考えられなくなる。

闇にのまれる。

視界がぼやけて、次第に何も見えなくなった。

はるか、はるかと朱美の声が遠くの方で聞こえた。

それまではすぐ近く、頭の中で聞こえた声だったのに、今はこんなにも遠い。

暗闇にぽつんと一人捨てられた気になる。

誰もいない。

じわりと涙が溢れてきた。

一人が寂しいからなのか、呼吸ができなくて苦しいからなのか、涙のわけさえ分からない。

もしくは両方なのかもしれない。

寂しくて、寂しくて、苦しくて、苦しくて、死に物狂いでもがくのに、どうにもならない。

このままずっと永遠にこのままなのかもしれない。

そう思った。

22．家に帰ろう

その時、ボッとはるかの身体を赤い光が包んだ。
同じ赤い光なのに、ヘレネのそれとは異なる。
もっと、温かで、心地よい。
赤と言うより朱色だ。
すぐに朱美の色だと、はるかは気付いた。　朱美が力を貸してくれている。
はるかは頭を左右に振ると、ヘレネに向かって力一杯に手を伸ばした。

（行け！）

心の中で強く叫んだ。
咽が裂け、血が吹き出る。
溢れた血が口から流れ出たけれど、焼けるように痛むけれど、はるかは叫んだ。
自分の背後に控えた獣に向かって。

ぐるるるる、と低く唸る声が聞こえた。
暗闇に黄金色の瞳が、一瞬きらめく。
「何？　何がいるの？」
得体の知れない獣の存在にヘレネが動揺を示した。
それは、とてつもなく大きな獣だった。

（行けぇーっ！）
再びはるかが叫ぶと、獣ははるかの頭を飛び越えて逃げまどうヘレネの背に爪を向けた。

ビシャ。
血飛沫が舞う。
倒れたヘレネの背に飛び乗った黄金の獣は唸り声を上げると、ヘレネの頭に牙を剥く。
メキッ。
ひどい音がした。
はるかがやめるように命じると、頭をくわえた獣がゆっくりと振りかえる。
首のない身体がビクリと跳ねて、転がり、そのままずっと動かなくなった。

（もういい。もういいから、こっちにおいで）
血だらけの獣に手を差し伸べると、獣はゴロゴロと咽を鳴らし、はるかの元へ帰ってくる。
ゆっくりと、一歩ずつはるかに近付く。
その一歩ごとに獣の体は小さく縮んでいくようだ。
はるかの手に中に収まった時、その獣の体は猫ほどの大きさになっていた。
二、三度、労うようになぜてやると、すうっと消えていく。
と、同時に、辺りが明るくなって、全ての幻が消えたことを知った。

「大丈夫か？」
金縛りが解けたのだろう。かなたが心配そうな顔で覗き込んでくる。
大丈夫と笑って、はるかは自分の足を確認する。
何ともなっていない。

朱美の言う通り、傷一つ付いていないようだ。
（不思議……）
あんなに痛みを感じていたのに、今はどこも全く痛くない。
鼻を掠めた血の臭いに、はっとしてヘレネを振り返った。
すると、はるかの目に首のない死体が飛び込んできた。
一面の血の海。
「わ、私がやったの？」
ふらりと傾いたはるかの身体をかなたが抱き留める。
脅える目で隆史を伺うと、彼は首を横に振った。
「違う。『ＧＡＩＡ』がやったんだ」
『ＧＡＩＡ』の力がやったことだから、君が気にする必要はない
と彼は言う。
けれど、はるかの気は晴れない。
人を殺してしまったのだ。しかも、姉妹を……。

「行こう。一刻も早くここを出るんだ」
黙って俯いたはるかの肩を抱いてかなたが言うと、隆史も頷く。
「Ｅ？に関するものの保管場所は、こっちだ」
「なぜ分かる？」
「前もって調べてあったんだ」
そう言うと隆史は、かなたとはるかを案内するように駆け出した。

「動けるか？」
「大丈夫」
笑って見せたのに、まだ心配げなかなたを安心させようと、はる
かも隆史の背を追って駆け出した。

▽▲

最後の一枚を灰にすると、ほっとした空気が流れた。

Ｅ？のＤＮＡサンプルや臓器を焼き払うついでに、Ｅ？の実験データなどといったものも全て焼いてしまうことにしたのだ。

伯爵は盗んでこいと言ったが、隆史の提案で、この場で処分してしまった方が良いだろうということになった。

なんとなく、美沙の臓器やデータなど伯爵には見せたくなかった。

もっと他のことに目を向けて欲しい彼に、未練が残ってしまうから？

そう思う半分、実のところ、はるか自身が、自分のとっくに死んだ母親の臓器など、すぐにでも燃やしてしまいたかったのかもしれない。

凍りづけの彼女を見た時から、はるかにとって彼女は死んだ人になった。

それなのに、臓器だけが生きているだなんて不自然なことが、あって良いはずがない。

はるかは埋葬する気持ちで、彼女の全てを焼き払った。

「それにしても……」

E？の資料を保管していた部屋から出ると、隆史が眉間に皺をよせる。
「案外、あっさりしていたな」
もっと邪魔が入るかと思っていたのだ。
どうやらヘレネは、はるかたちがエリア3に忍び込むことを知っていたようだったし、山内所長も自分たちが何かをしようとしていると分かっている。
それなのに、今のところ、3人の前に立ち塞がるような敵はいない。

この上に行くとシリーズ3の子どもたちの訓練室や個室があるんだ、と隆史が言った階段を下る。
出口まであと少しだった。
出口に戻るためには、あの忍者屋敷の仕掛けみたいな扉を通らなければならない。
そこに行くまでには昇り階段があり、階段は所長室のすぐ横にあった。
つまり、所長室の前を通らなければならないのだ。
数メートル前から、忍び足を始める3人。
なぜか呼吸さえ止めてしまう。
心臓の音がうるさい。

（どうか、見つかりませんように）

扉の前を通り過ぎると、詰めていた息を吐き出して、3人は顔を見合わせた。
あとは階段を上るだけだ。
そう思い、顔を上げた時、階段の前に人影を見つけてしまう。

前を駆けていた隆史の足が止まり、かなたもはるかを背で庇うように立ち止まった。
はるかはその背に手をついて前を覗き見た。
すると、その見知った顔が目に映る。

「あなたは、Ｆ１０２８」

伯爵の屋敷に行ってから、すっかり美形に見慣れてしまったが、それでもきれいだと思える顔の造り。
すらりとした身体。はるかは一瞬見とれてしまった。
背後にも気配を感じて振りかえると、黒い服を着た少年たちが４人、はるかたちの逃げ道を無くすように立っていた。
黒い服は４人ともおそろいで、Ｆ１０２８も同じものを着ていた。
『ＧＡＩＡ』を警備する者の制服なのかもしれない。
だとすると、背後にいる４人もシリーズ１だということになる。

（３対５か……）

はるかの頬を汗が伝った。
こちらは３人と言うが、はるかは先程のヘレネ戦で精神的に疲れてしまっている。
これ以上、力を使って何かしろと言われても無理だ。
隆史は、本人曰く、戦闘向きではないのだそうだ。
特にシリーズ１が得意とする接近戦は苦手で、できるだけ補助はするが、戦力として考えないでくれと、彼は言う。
そうなると、まともに動けるのはかなた一人だ。
だが、相手は５人。それも、兵士としての訓練を十分に受けた５人だ。

「お願い、見逃して。そこを通して、お願い！」

逃げるのは不可。
戦っても負けると分かったはるかは、見知った顔に懇願する。
少しだけ話したことのある彼は、悪い人じゃないと信じたかった。
話せば分かってくれる。
そんな期待を込めてはるかは頭を下げた。
だが、返ってきた言葉は限りなく冷たい。

「やってくれたな」
はるかの肩がびくっと震えた。
「見逃す？　冗談。好き勝ってやられた上、逃げられたら、俺たちの能力を疑われる。俺たちは無能者呼ばれされたくない。」
そう言うと、彼は両手で拳を作った。
きれいな眉が歪む。
一瞬、彼を取り巻く空気が揺らいだ気がした。
カッと目が見開かれる。
と、ほぼ同時に、Ｆ１０２８が殴りかかってきた。
いち早く反応したかなたが隆史とはるかを突き飛ばし、自分もひらりとそれをかわす。
ダーン、という爆発音にも似た音が響き、それと一緒になって白い粉のような物が辺りに散った。
Ｆ１０２８の拳が壁を打ち砕いたのだ。
きれいな顔からはとても想像し得ない威力に、はるかは言葉を失う。
それに、なんてスピード。早いって言うもんじゃない。
ピクリとも動くことができなかった。
あまりの衝撃に、はるかは尻餅を着いたまま動けなくなる。
（これがシリーズ１の力……）

シリーズ１は自在に運動能力を高めることができるという。
腕力、握力、脚力など、筋肉を使う全ての運動能力値を通常の倍以上に高められるのだ。
他にも、視力や聴力、嗅覚などに優れる者もいるが、これにはシリーズ１の中でも個人差があるらしい。
Ｆ１０２８は、えぐれた壁から拳を離すと、再びかなたにそれをくり出した。
今度もかなたは身を屈めて避け、お返しとばかりにＦ１０２８の腹目がけて拳を突き出す。
鈍い音がした。
吹っ飛んだ身体は数メートル先に落ち、ゴロゴロと転がった。

「か、かなた？」
信じられないと彼を見上げると、彼も自分と同じ表情をして己の拳を見つめている。
「吹っ飛ぶ、だなんて……」
力を込めて殴り付けたのは確かだ。
だが、あんなにも相手の身体が吹っ飛ぶとは思わなかったと、かなたは言った。
これが自分の力なのか、と。

Ｆ１０２８が倒されたことで他の４人が顔色を変えた。
今にも４人いっぺんにかかってきそうな雰囲気だ。
はるかはかなたの背に隠れるように、後方に下がった。

「かなた君、一瞬なら相手の動きを止めることができる。その隙をつくんだ」
同様にかなたの後ろについた隆史がそう言って両手を広げる。
隆史はシリーズ２の力を使う気なのだ。
生物に影響を与える力と言えば、ＰＫ－ＬＴ。

その力で持って、彼らの動きを一瞬でも止めてみせると言う。
かなたは振り向くことなく頷くと、低めの体勢を取り、構える。
そんなかなたを取り巻く空気に、はるかは黄金色を見た。

（これが、かなたの力……）

その時、すぐ近くで、扉が開く音が聞こえた。
あれほど開くことを恐れていた扉が、ついに開いてしまったのだ。
低く冷たい声が響いた。
「下がれ、お前たち」
それは黒い制服の少年たちに発せられたものであったが、はるかはあまりの怖さに震えてしまう。
なぜなのか、分からない。彼の声が怖いのだ。
渋々というように少年たちがはるかたちから離れると、山内所長はジロリと3人に目を向けた。
「さっさと行け」
「え？」
思いがけない言葉にかなたも隆史も耳を疑う。
面倒臭そうにもう一度同じ事を繰り返すと、何事もなかったように山内は部屋に戻っていく。
それには慌てて、Ｆ１０２８たちが追いかける。
「待ってください。いいんですか？」
「彼らが何をしたのか、所長はご存じなんですか？」
扉の中に姿を消そうとしていた彼の足が止められる。
「いい」
「いいって、よくないでしょう？」
山内の肩を掴んで声を荒げる彼らは『ＧＡＩＡ』の兵士だが、各

エリア所長の部下というわけではないのかもしれない。
警備と同時に所長の監視も任されているのだろう。
『ＧＡＩＡ』の上役、さらにその上に立つボス。見えない相手に山内は舌打ちをした。
そして吐き捨てるかのように言い放つ。
「いいんだ」

その苛立った声にはるかは、はっとする。
（まさか……）
そう思うと居ても立ってもいられなくて、確かめようと彼に歩み寄る。
背中で呼び止める声が聞こえたが、構っていられない。
はるかの視線に気が付き、山内が振り返った。

「あなたは……」
鋭い瞳がはるかを突き刺す。
「もしかして……」

ふっと、彼の瞳が揺らいだ。
「どうした、Ｎ３０６？　もう家に帰って来たくなったのか？　南の伯爵の家はそんなに居心地が悪いか？」
誰が見ても無表情のその顔なのに、はるかには彼が微笑んだように見えた。
「家？」
気が付くと、確かめたかったこととは違う質問を返していた。
「帰ってきても良いんだぞ。ここはお前の家だ。お前だけじゃなく、シリーズ３の家だからな」
「違う」
はるかは首を横に振る。
「私の家はここじゃない。私はここで育ったわけじゃないし、ここ

で生まれたわけじゃない」

育った場所はとおるといた場所。
何度も引っ越したせいで、ここだと言える一つの場所はないが、とおるがいる場所がはるかの育った故郷だ。
そう言うと、山内は生まれた場所を覚えているかと訊いてきた。

「生まれた場所は……」

きっと『ＧＡＩＡ』の施設のどこかだ。
規則的な機械音。まとわりつくコード。
あれは、どこ？
彼を上目遣いに見ると、彼は短く答えた。

「エリア１だ」
「エリア１？　でも、なんで、あなたがそれを知っているの？　あなたもそこにいたから？」
話の流れが自分の聞きたいことに近付いている気がして、はるかは身を乗り出す。
「あなたでしょ？　とおるを逃がしてくれたの。１５年前、とおるやかなたや私が『ＧＡＩＡ』から脱走する時、力を貸してくれたの、あなたなんでしょ？」

答えてくれない彼の心の中を探ろうとするが、集中力を使い果たした今のはるかにはそれができなかった。
静かに彼の言葉を待つ。
彼の声がどうしても怖かったのは、１５年前、彼はとおるに自分を置いていくように言ったからじゃないかと、はるかは思う。
彼ははるかを見捨てようとした。
きっとそれを心の奥底で覚えていて、彼の声にあの時の不安が甦

ってしまったのだろう。

長すぎる夜。
ただ生かされる日々。
誰もいない。
何も考えられない。
闇が背後から迫ってくる。
自分がいったい何者なのか、必死で考えていた。

彼の声がはるかを、あの不安の日々に引き戻そうとしている。
そんなふうに心のどこかで感じてしまったのかもしれない。

山内は何一つはるかの問いに答えてくれなかった。
彼ははるかから目を逸らすと、背を向けてしまう。
「確かにお前の言う通り、ここはお前の家ではないようだな。ならば、自分の家に帰れ、Ｎ３０６。そして、二度とここには来るな」
「え、ちょっと……待って！」
言いたいことだけを言うと、彼はさっさと扉を閉めてしまった。
パタンという音がはるかの言葉を遮り、気力までも奪い取ってしまう。
「待ってよ、ちょっと。教えて！」
扉にすがりつき、叫ぶ。
１５年前自分たちを『ＧＡＩＡ』から逃してくれたのが本当に彼だとしたら、再びエリア１に囚われてしまったとおるを助ける手だてを知っているかもしれない。
協力してくれるかもしれない。
そう思ってはるかは扉を叩いた。
だが、数回叩いたところで、その拳をかなたに止められる。

止められた悔しさに瞳が潤んだ。
けれど、泣くとさらに悔しくなる気がして、絶対に泣きたくないと、涙を零す代わりに彼を睨み付けてやった。
かなたは黙ってはるかの頭をくしゃりとなぜた。
肩を抱いて歩き出す。
時々、はるかの足が止まってしまうので、ポンポンと肩を軽く叩き、歩みを促す。
かなたの腕の中ではるかは山内が姿を消した扉を振り返った。
それから、自分たちを呆然と見送るＦ１０２８たち。
彼らの顔を順に見つめて、もう一度、扉に目を向ける。
これが最後だと、その扉が開くのを待った。
だが、扉は微動だにしない。
はるかは緩やかに頭をふった。
サラサラと黒髪が左右に揺れる音が、耳をくすぐる。

「帰ろう」
みんなが待っているから、そう言って、はるかは微笑んだ。

23．生きていく場所

「それで？」

それでこれからどうするの？と訊いてきた瞳を、はるかは真っ直ぐに見つめ返した。

伯爵の屋敷に戻ると、待ち構えていた美奈子に引きずられるように朱美の部屋に連れて行かれたのだ。

朱美の部屋はヘレネを思い出させたが、この屋敷で最強コンビと密かにささやかれる姉たちから逃れることなどできず、大人しくソファに腰を下ろしている。

ちなみに彼女たちが最強コンビだと、はるかにささやいたのは他の誰でもない、隆史だ。

そして、おそらくそのささやきを最初に口にしたのも、彼なのではないだろうか。

「この屋敷にずっと居てもいいのよ」

「その方が伯爵も喜ぶだろうし、私たちも楽しくなるもの」

「でも……」

でも、きっと、かなたは嫌がるだろう。

まだかなたに直接聞いたわけではないが、なんとなく、彼はこの屋敷にはとどまらないだろう。

ここは居心地が良い。とても安心できる。

必要な物はなんでも伯爵に言えばそろえてくれるし、きっとお金で苦労することもないだろう。

読書でも絵画でもやりたいことをやらせてくれると言っているし、それができるだけの設備がちゃんとそろっている。

まさに最上の環境。
けれど、それでも、かなたはここを出ていくのだろう。

かなたを例えるのならば、野生の獣だ。
絶対に人間には懐かないような獣。
そして、ここを例えるのならば、動物園だ。
毎日餌を与えられて、身の回りを掃除して貰ったり、身体を洗って貰ったり、玩具もそろえて貰える。
それでも、かなたという獣は、例え飢え死にの恐怖があろうと、動物園よりも野生で生きていくことを選ぶだろう。

青い空の下、緑の草木に抱かれ、鳥の歌を聴き、そして駆けるのだ。
どこまでも。

彼をこの屋敷に留めることが不可能ならば、はるかがここに残ることを決めた時、二人の別れの時が訪れる。
それはきっと、もう二度と会えない別れだろう。
はるかはこの屋敷で伯爵に守られ生き、かなたはどこかの街で一人で生きていくだろうから。

黙り込んだまま俯いたはるかの頭上で二つのため息が聞こえた。
「彼について行きたいのでしょ？」
少し躊躇ってから、はるかは素直に頷いた。
「でも、私、伯爵に買われたわけだし……」
「買われたんじゃなくて、助けて貰ったの。恩は感じて良いけど、変な義務感はやめなさいね」
「伯爵は怒らないわよ。がっかりすると思うけど、この屋敷にはい

ったい何人住んでいると思っているの？　あなた一人くらいいなくなったって、ほんの少しだけ寂しいだけよ。無理して引き止めるほどじゃないわ」

二人は慰めるようにはるかを挟んで両脇に座り、肩をさすったり、頭をなぜたりしてくれる。

「それに伯爵は私たちにだって言っているのよ。いつでも外の自由に憧れたら、屋敷から出ていっても良いって。そして帰って来たくなったら、いつでも帰ってきて良いからってね」

「そう言われて、二人は出たことある？　屋敷から……」

「ないわ」

声をそろえて答えると、目を細めて、ふふっと笑った。

はるか一人、眉をひそめる。

「出てみたいと思ったことは？」

「全くないって言ったらウソね」

「けど、私たちは『ＧＡＩＡ』で生まれ、『ＧＡＩＡ』で育ったんですもの。外の世界なんて全く知らない。出たところで、生きていけないわ」

「でも、とおるは……」

とおるは生まれ落ちてすぐ『ＧＡＩＡ』に入れられ、１７歳までそこで暮らした。

ほとんど外の世界を知らなかっただろうに、子ども二人抱えて生きてきたのだ。

「Ａ？のことだけど」

瞳を曇らせて美奈子が口を開いた。

「A？の脱走時に協力した『GAIA』の幹部がいたの」
山内のことだとはるかは思う。
「その人はA？に戸籍を偽造し、しばらく暮らす家を与えたわ」
「そして、A？にできる仕事もね」
「仕事？」
それが喫茶店でないことはすぐに想像できた。
あの冷たい声からいったいどのような仕事を紹介されたのかと、はるかの顔に不安の色が浮かぶ。
「ちゃんとした職業名なんてないわ。あえて言うのなら、なんでも屋かしら？」
「なんでも屋？」
彼女たちの表情からして、雑貨店ではなさそうだ。
「始末屋と言った方が良かったかしら？」
「つまりね、お金になるようなことなら、どんなことでもやってしまうの。人捜しから、盗み、殺人までね」
「殺人！？」

とおるは、自分たちを食べさせる為に人を殺していたというのか。
はるかは顔色を失う。

「美奈子」
朱美は、はるかの様子に気が付いて、不用意な言葉を言ってしまったことを咎めた。
「今言ったのは例え話よ。A？が殺人までやっていたか、なんて私には分からないわ。そういう仕事は断っていたかもしれないでしょ。」
「……うん」
そうだと信じたい。自分の為にとおるが人を殺して金を作っていたなんて信じたくなかった。
「隆史の調べによると、A？は喫茶店を営業していたらしいわね。

そこに来る常連客はほとんど、その始末屋の客だったそうよ」
「そう言えば、お店に来る人たちって、みんな身なりの良い人ばかりだった」
「当然ね。始末屋になんて仕事を依頼するような人は、そこそこの金持ちばかりよ」
「依頼料が高いから、お金に余裕がない人は頼めないし、大金持ちとなれば自分の部下にそれ専門の者を抱え込んで、やらせちゃうものね」
なるほどとはるかは頷いた。
「要するにね。何が言いたかったかと言うと、A？は私たちと違って生きていくすべを持っていたってわけ」
「でも、探せば美奈子さんにだってできる仕事があるかもしれないよ。そこで生きたいと思えば、いくらだって、生きる方法はあると思う」
「そうね、けど」

美奈子はゆっくりと首を振った。
ふわりと柔らかな髪が揺れ、辺りに散った柑橘系の香りがはるかの鼻をくすぐる。

「私、伯爵がいない所では生きようとは思えないの」
「え？」
一瞬何を言われたのか分からなくて、美奈子をまじまじと見つめてしまう。
「初めて彼と会った時から、ずっと彼の傍にいようと決めたから」

美沙の代わりとして買われたのは４歳の時。
それは、あの時から、ずっと心に決めていたことだった。
美沙の代わりに一生彼の傍にいる。
美奈子はそう言って微笑んだ。

「彼が好き？　伯爵のこと、愛してるの？」
確かな言葉が聞きたくて、そう尋ねると、美奈子は黙って笑った。
その笑みがとてもきれいで、はるかは顔を赤らめてしまう。
もうそれだけで満足だった。
はるかはソファから立ち上がると、数歩歩いて、二人を振り返った。
「私、行くね。この屋敷から出ていく。ここはとっても居心地良いけど、でもね、私、ここで生きようとは思わないの」
自分のセリフをまねた言葉だと美奈子は声を上げて笑った。朱美も笑い、
「それで？　あなたが生きたいと思える場所はどこなの？」
と、はるかの答えなど、とっくに分かっているだろうに、わざわざ訊いてくる。
はるかはくるりと回って二人に背を向けると、
「黄金の獅子がいるところよ」
と、部屋を飛び出した。
照れくさかったのもあるが、一刻も早く自分の決意を伯爵に伝えたかった。
それに、早くしないと、自分を置いてかなたが屋敷を出ていってしまう。

伯爵の部屋に行くと、かなたと隆史もそこにいて、
思った通り、かなたの今後の話をしている最中だった。
伯爵も隆史も、はるかのために屋敷に残ってくれと言っているようだったが、かなたは断固として首を横に振る。
自分にここは合わないのだと。

次第に伯爵は諦めの色を顔に浮かべ、最後には何も言わなくなった。
対して、隆史はいつまでもしつこく残るように説得し続けていた。
はるかのためだけではなく、自分たちにとってもシリーズ1のかなたがここに居てくれれば、どんなに心強いかと力説する。
だが、かなたの決意は固かった。
こうして、二人の言い争いが堂々巡りになってきたところに、はるかが現れたのだ。

はるかは二人にちらりと目をやると、まっすぐに伯爵に駆け寄った。
彼はとっくに言い争いから離脱し、我関せずの顔で窓の外を見ていた。

「伯爵、話があるの」
「なんだ？」
「私、この屋敷から出るわ」

２４．一緒に

何？と彼の眉がひそめられる。
かなたも隆史も口を閉ざし、息を殺し、聞き耳を立てているようだ。

「ここは居心地が悪いか？」
「ううん、すごく良い」
「では、なぜ？」
「かなたと一緒にいたいから」

はっきりと簡潔に答えたはるかに伯爵は追及の言葉を失う。
代わりに口を開いたのはかなただった。
かなたは大股ではるかに歩み寄ると、その肩を掴み、自分の方に顔を向けさせた。

「どういうことだ？」
ここにいた方がお前は絶対に幸せになれる。そう、その瞳は言っていた。
だが、はるかは首を振る。
「かなた、あなたと一緒にいたいの。もう、二度と離れたくない」
「はるか……」
じっと見つめ合い、互いの胸の内を探り合う。
先に目を逸らしたのはかなただった。
負けたよ、と呟く声が聞こえたような気がした。
かなたははるかの肩を抱いて、伯爵に向き直る。
はるかも彼を見上げた。彼の目は穏やかに微笑んでいた。

「はるか、わたしはお前を止めないよ。だが……」
「だが、いつでも帰ってきていいんでしょ？」
伯爵の言わんとすることを先に言ってしまって、はるかは笑った。
そして、山内に言われたことを思い出して、上目遣いに尋ねる。
「ここ、私の家だと思っていいよね？」
「ああ、もちろんだ」
「伯爵のこと、お父さんだと思ってもいい？」
「はるか？」
驚き、明らかに動揺して、伯爵ははるかを見下ろす。
「だって、私、とおるのことお父さんって感じしないの。友達のお父さんとかと比べたって、とおるってば、父親っぽくないし。私の理想のお父さん像とかけ離れているんだよね。その点、伯爵はバッチリ。理想のお父さん像だわ。だから、ね、いいでしょ？　あなたのことをお父さんだと思っても」
少し考えた末に、伯爵は笑った。
「悪くないな」
「でしょ？」
つられてはるかも笑う。

ここには兄弟姉妹がいる。
伯爵もいる。
安心がある。
いつでも帰れる場所。

とおるはいないけれど、ここを自分の家だと言ってしまってもいいのではないかと、はるかは思った。

とおるは故郷。

ここは家だ。

はるかは甘えたっぷりに伯爵の腕に自分の腕を絡ませた。
「さっそくなんだけど、お父さんにお願いがあるんだけど」
慣れない音にくすぐったさを感じながら伯爵は、なんだ？と聞き返す。
「地下室にあるモノを移動して欲しいの」
「何？」
隆史が息を呑む気配を感じながら、はるかは続けた。
「地下室でないと生きられない鳴海たちのために、あそこにあるモノを移動して欲しいの。死んでしまった兄弟姉妹たちは、お墓に埋めて欲しいのよ。もちろん、お母さんも！」

寒い地下室。
光に弱いという鳴海。
彼女があそこでしか生きられないのなら、せめて快適にしてあげたい。
あそこはまるで、墓場みたいだから。
そう、だから、死んでしまった兄弟姉妹たちをいつまでもあんなところに保管して欲しくない。
それに何より、いつまでもお母さんを凍り付けのままにしておいてはいけない。
伯爵のためにも。
聞けば、伯爵は『ＧＡＩＡ』から美沙を連れ帰った日から一度も、彼女に会いに地下室に行ったことがないのだそうだ。
あの地下室がどんなに彼の重みになっていたのかが分かる。
過去の自分の無力さを憎む気持ちが作り上げてしまった後悔と悲しみの渦。
できることなら、そのようなもの、今の伯爵から取り除いてあげ

たい。

黙り込んでしまった彼の表情が気になって、はるかは下から伯爵の顔を覗き込んだ。

「伯爵？」

心配げに見つめる瞳に気が付いて、彼は微笑んだ。

「わかった」

「え？」

「お前の言う通りにしよう」

「本当に？！」

嬉しさに思わず、ぎゅうっと彼に抱き付いて、大声を上げて、それから、少し涙がにじんだ。

振りかえると、隆史も満面の笑みを浮かべている。

早く美奈子たちに教えてあげたくて、うずうずしているのかもしれない。

伯爵は、はしゃぐはるかの頭を軽く叩くと、かなたに目を向けた。

そしてゆっくりと頭を下げる。

「この子のことをよろしく頼む」

「はい」

「どんな時でも、何よりも優先してこの子を守って欲しい」

顔を上げた伯爵の瞳が鋭くかなたを見つめる。

かなたはそれから逸らそうとせず、真っ直ぐに見つめ返し、

「わかりました」

と、誓った。

▽▲

なんだかんだ言って、結局、はるかとかなたが屋敷を出たのはそれから一週間後だった。

保管されていた兄弟姉妹の遺体をきちんと埋葬したり、鳴海たちのために地下室を整備したりで、いろいろと慌ただしかったのだ。

最後に地下室から美沙が運び出され、伯爵は彼女と9年ぶりの再会を果たした。

彼が、しばらく二人だけにして欲しいと言ったので、はるかたちにはその時伯爵がどんな表情をし、何を思っていたのかは、分からない。

屋敷を出る当日、朝一で美奈子と朱美に別れを言い、二人に付き添って貰って他の兄弟姉妹たちにも別れを言いに回った。

話を聞いた時から会いたいと思っていた人魚の晴海にも会え、毒舌トークを存分に聞かせて貰った。

途中から隆史が合流し、彼は未だに屋敷に残ってくれと言っていたが、美奈子と朱美の左右からの同時攻撃により、撃沈した。

最後に伯爵の部屋に向かったはるかたちは、そっとドアを叩いた。

返事を待って部屋の中に入ると、伯爵は窓際に佇んでいた。

じっと外を見つめる瞳。

何を思っているのか分からない背中が悲しくて、はるかは俯いた。

「伯爵。はるかたち、もう出発するんですって」
美奈子が部屋の静けさをできるだけ壊さないように、そう言い放った。
それに対する伯爵の答えは、ごく短いものだ。
「そうか」
それだけ言って、こちらを振り向きもしない。
もっといろいろ話したいことがあったはずなのに、はるかも言葉が見つからない。
諦めたように息を吐くと、はるかは頭を下げた。
「お世話になりました。本当にありがとうございました」
なんのひねりもない形通りの挨拶だったが、それを言うだけでもはるかにはいっぱいいっぱいだった。
もう二度と会えないわけじゃない。
いつだって帰ってきても良い。彼はそう言ってくれた。
それなのに、どうして涙が出るのだろう。
「はるか」
すすり泣く声に、ようやく伯爵が振り返った。
「彼と、これからどうする？」
「とおるを探す。絶対に助け出すわ！」
はるかの言葉にかなたも頷く。

とおるはエリア1に運ばれたのだと聞く。
だが、エリア1の詳しい所在地が分からないのだ。
はるかはもちろん、伯爵さえ知らないと言う。
だったら、まずはエリア1の所在地を調べ、分かりしだい、とおるを助けにそこに乗り込むことになるだろう。

だが、伯爵は首を振る。
「賛成できないな」

「どうして？」
「君たちに、特に君には、危険なことをして欲しくない。させられない」
静かに、平穏に、普通の人のように暮らしなさいと彼は言った。
はるかは眉をひそめた。
「私がとおるに会いたいって気持ち、伯爵なら分かってくれると思ったんだけど？」
「何？」
「どんなに危険だろうと、どんなに苦しくても、一目でいいから会いたいって気持ち。親しい人が突然いなくなってしまったんだよ。絶対にそんなの納得できないよ。ちゃんと納得できるわけが知りたいし、それに……」
はるかは言葉を切ると、少し間を作ってから続けた。
「……それに、とおるは死んだって言うの。でも、そんなの私は信じない。ちゃんとこの目で死体を確認して、それからじゃないと絶対やだ！」

伯爵なら分かってくれる。
彼は、美沙を8年間も探し続けて、14年間も彼女を買い取る為に力を尽くしてきたのだから。

「分かる。だからこそ、同じ思いをさせたくないと思っている」
だが、と伯爵は続けた。
「それではお前の気がいつまでも晴れないだろうことも分かっている。ならば、わたしも協力しよう」
「ええっ？」
「隆史、エリア1の所在地を調べてくれないか？」
「わかりました」
簡単に引き受けてしまう隆史に、はるかは不安げな目を向ける。
「いいの？　本当に？」

「構わない」
「そうよ、全然構わないわよ、はるか」
「かわいい妹のためですものね」
隆史の両肩から、ひょいと顔を出した美奈子と朱美もにっこりして言ってくれる。
はるかと呼ばれて伯爵を振り返ると、彼ははるかの肩を両手で掴み、床に膝を着いた。
そうするとはるかと同じ目線になるのだ。
「だから、いいか。お前たちは無理に調べようとする必要はない。こちらが分かったことは全て教えると約束する。お前は、けして危険なことをしないでくれ」

きつく言われた言葉に、はるかは頷くしかなかった。
それを見て安心したのか、伯爵は立ち上がると、かなたの方へはるかを押しやった。
トンッとかなたの胸にぶつかり、そのまま抱き締められる。
その腕の中で、はるかは伯爵と別れの言葉を交わした。

「行きなさい」
「うん、行って来ます」

呆れるほど大きな門をくぐると、そこはもう、伯爵の屋敷の外だった。
伯爵と別れてから、玄関を出て、庭を通り、ようやく門から出たはるかたちだったが、その長い距離も過ぎてしまえば、あっという間のことのような気がした。
それはもちろん、とおるが病院に運ばれたと知らされたあの時から、今のこの瞬間までの数日間にも同じことが言える。あっという間だった。

一瞬で崩された日常。
駆け抜けていった日々。
そして、また日常に戻ろうとしている。

はるかはちらっと隣を歩く少年の横顔を盗み見た。

けれど、戻ろうとしている日常は、元の日常ではない。
これから彼と積み上げていく日々の始まり。

はるかの視線に気付いてかなたが振り向く。
「ん？」
「ううん」
なんでもないと笑うと、変な奴だと笑われる。
「ねえ、どこに行くの？」
「どこがいい？」
「んーっと、どこでも良い」

どこでもいい。
かなたが行くところに自分もついていく。
かなたがいる場所で自分も生きていく。そう、決めたのだから。

かなたはそうかと呟くと、はるかに手を差し出す。
はるかは一瞬の迷いもなく、その手に自分の手を絡ませた。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3487n/

A?　　－すべての始まり－

2010年10月8日12時15分発行